

實に過たり。其害たる人の正直質實の性情を失ふ媒となるなり。白髮三千丈、又は微風吹、幽松の類は、一誦三嘆の餘韻あり。其餘韻は、只文字の働にして、決して事實にあらざれば、世の交際に慣れしもの、辭令に巧みなるが如く。之が眞實を求むるよりは、巧みなる虚言を賞美するを以て、此間の通例となすべし。暗風吹、雨入、寒窓を。寒風吹、雨入、暗窓とせば、情味なし。月落烏啼の詩は、古今の絶調といへども。其詩の意を尋ぬるに、取り止めなし。

心識を鍛錬し、隨處に主となるものは、士なり。是故に士は性命の學に達し、死生の理に於て、疑ふ處なかれ。何をか性命の學と云ふ、大凡物は、生に始まり死に終る。此生死の中間に於て、天人相交るの道あり。之を性命と云ふ。吾が教學指歸は、専ら此一大事を論ず。

近來世に一種の流行あり、垂死の病人にして、病中の感覺を記して、之を世に流布するものあり。此等は、苦しまぎれの心やりなるべしといへど、俗に所謂死神に取付かれたるものなれば、常識を失ふ道理なり。されど其書を読みたる人の傳ふるを聞くに、大概は識に逼迫せられて、悟入せし趣を説けり。佛言に病は衆生

の善知識なりとあり。曾子曰、鳥の將に死せんとする、其鳴くや悲し。おもふに其言たる、必ず通途の凡夫に異なる所ありて、哀れなる節も多かるべし。たとひ其言の一理あるにもせよ、死際の愚痴なり。畢竟士道を行ふものは、決して手に觸るべきにあらず。かゝる書を好むて讀むものは、大概性命の學を修めざる未熟ものなり。

右十月廿九日まで記したる

十一月八日日曜講話

業識茫々として、邊際もなく、方所もなく、其中に出頭没頭して、種々の觀念あり、種々の理想あり。是れ皆自己の識變を記取分別して、かゝる一期の紛雜を生ずるなり。南天の九十五種、東土の諸子百家、西歐の哲學宗教等は、此紛雜中に於て、一縦一横、一得一失、其究竟を極むるもの。笑ふべく、哭すべく、憂ふべく、惑むべく、惡むべく、敬すべし。其有様はさながら、輾飛蠢動、種々の異相異行を呈露し來るに同じ。譬ば明鏡に對して、悲歡憂樂、其感情に任せ、吾れ知らず、其容を變じ、其體を

動ずるが如く。いやが上に變じ、いやが上に動ず、いよくますく、奇態を極め奇觀を呈す。妙と説き、理と談ずるも、詮する所は、業識の類事のみ。天地未生已前に去り、大千壞滅の後に來りて、此道理を求め、此智術を求め、此消息を求むるに總て前夜の夢の痕跡なきが如し。故に曰く、根塵同源、縛脫不二、識性虛妄猶如空華、されば古往今來、生きとし生けるもの、悉く此業識の中に身を出だし、此業識の中に來往す。而も此業識の虛妄の外に、眞實の求むべきなければ。只此業識を鍛鍊して智慧となし、人の人たるもの、正當の徳に受用して、安心立命すべきのみ。

十二月十三日歳暮訓戒

老夫も十七日より、熱海へ旅行致す。凡そ三ヶ月も不在なれば、學生一同、此不在中は、從來親しく教誡せし訓言を守りて、怠廢すること勿れ。歳末年始は、學舎に在りて、學舎の家庭にて、越年すべし。元日は、一年中の大禮日なれば、都下に父兄のあるものは、歸省して、御祝ひを申すべし。地方の學生は、日

款同縁取亂切
匿也

を計り、都合を計り、歸省するをよしとす。乍去往來五日を越ゆるを許さず。古語に曰く、欺は罪人の口より出づと。願ふに予が如く、此世に罪惡を造りしものは、稀なるべし。佛は八難の因縁を以て、悉く過去世造罪の報いなりと説けり。佛は過去無量劫中に於て、かゝる造惡をなす。余は此一世一生の間に於て佛と似よりの惡を造ること、恰も影の此身に從ふが如く、所謂深山大澤に、雲霧を藏し、虎豹を伏するもの、此間に出沒して、猶免れて今日あるは、只是れ此識を鍛鍊し、神武不殺の徳を尙ふ靈驗なり。是故に吾が學徒は、此古實を信じ、此家風を守り、一向に識の鍛鍊を修業すべし。富を欲せざるも、おのづから富み。壽を欲せざるも、おのづから壽なり。聲名徳望は、期せずしておのづから得る。何の故ぞ、惡を造ること吾が如き甚しきものにして、猶且つ此壽福を保つ。況や少壯より此教を奉じ、士道に志すものをや。安心立命、他を顧ることなかれ。儒佛老教を奉ずるもの、動もすれば識心を折伏して、有氣息の死漢となる。吾が士道を行ふもの、識心を鍛鍊し、識の剛健の徳によりて、一切の境縁を自在に差排すべし。此事たる、誠に毫釐の差なり、死活の道なり。

生滅を已とは、心識の所變に轉せざるを云ふなり、識を斷滅す

る意に
あらす。

西川生病む甚しく識の逼迫を受けて殆ど生氣なし。所謂識の吾れ病床に臨み徐に諭して曰く死生は命なり心配することなかれ。只々一心に天神地祇を禮せよ天神は汝の上を覆ひて汝の心を護り地祇は汝の體を載せて汝の身を守る。汝は正しく天神地祇の懷に在り決して憂慮することなかれと。夫れ病は時なり病床は其處なり一心正念にして喘ぐこと無ければ。即ち天命を受けて天命を全うす。其他の時處に於けるも劇しく識の逼迫を受くるときは必ず天地神祇の懷の中にむぐり込て免かるゝこと是れ吾が家の神祕なり。是事たる少年未熟者の爲に言ふに非ず。假令聖たり賢たりとも全く識の滅度を得ざるものは決して識の逼迫を免かるゝこと能はず。故に古聖今聖此神祇を傳へて世々流ること無し。疑ふこと勿れ。

以心傳終

神武太平策

兵は國の大事死生の地存亡の道なり。

此の死生の地存亡の道といふことを、篇と合點して。たとひ帷帳に在りて、戦地戰場に臨まざるも、恰も死地に立ちて活路を求めつゝ、働くが如き心得あるものは、眞實に兵を知るものと云ふべし。

兵法に曰く不敗の地に立て敵の敗を失せず。

敵を相手に苟くも戦を交ふるを知り、目前の敵に對し、只に攻守を策するは、即ち敵の實形を力撃するもの。たとひ多少の術策を弄し、一戦一勝の功あるも、畢竟じて凡將の作畧のみ。眞實に兵を知るものは、然らず。必ずや敵の實形を避けて、其敗勢を見定め、之を撃つなり。

彼我運動して、不敗の地を争ひ、我れ不敗の地に立つと同時に、自然と敵軍の敗形顯るゝなり。

此運動を以て、軍略と稱す。即ち攻戰防守ともに軍略中の動機のみ。決して

區々一勝一敗を争ふ所以にあらざるなり。
彼我相互に不敗の地を争ひ、以て敵を敗地に致すが爲に、一進一退あり。此間に於ける一退の働きは、猶一進の働きに同じ。只進むは難く、退くは或は易し。其易きを以て、敵を敗地に誘致するは、上計なり。

敵の實形を撃つは、險路に大石を運ぶが如く。敵の敗形を撃つは、坦途に輕車を駕するが如し。

兵に常形常勢なし。

一進一退變化して、彼我の形勢轉々して止まらず。且つ其一日の中にも、朝晝暮の三氣ありて、銳鈍強弱、其機同じからず。況や一月の中をや。其一年の長きに度らば、大概は老兵となりて、暮歸の氣を帯び、更に銳を養ひ、氣を新にするの術なければ、其兵は用ふべからず。其他兵勢軍形を、挫折變動する種々の事情は、前後左右より襲來す。たとひ今日勝勢を得るものも、一跌すれば、忽ち敗形を現すなり。

されば勝勢を保ちて、終局に至り、克く其全効を收むるは、眞に良將苦心の術な

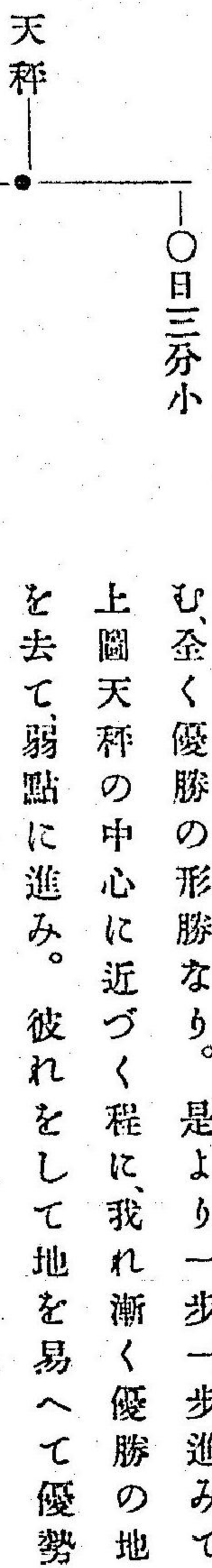
り。苟くも將帥の任に膺る者、此の一件は、ひしと心腑に秘藏して、油斷あるべからず。

日露の形勢を察するに、今日の所、我が優勢なるは、自然の數なり。是れ必しも兵の強弱にあらず、戰の巧拙にあらず。全く機先を制せざるを得ざる位置關係に在りて、機先を制し、おのづと不敗の地に立て、彼れの敗形に臨むものなり。此時に方り、我れ若し劍を提て立つこと能はざるか、斯る天與の優勢を棄て、彼れに致さるゝもの。所謂我劍を磨するを待てよ、やがて汝の首を討つべしと言へる、敵人の命に服従して首級を授る愚人のみ。他邦はいざ知らず、日本武士は、かゝる有様を以て、至大の屈辱となすなり。

天與なる必至必然の形勢が、おのづから我優勢なり。之れに加るに海軍の善戰を以てす。されば將來此至大の優勢を、其責任に負ふて働くものは、陸軍なり。此優勢を失せず、終局の結果に全勝を收め、國家を泰山の安きに置くは、全く陸戰の功なり。然りと雖も、今日此天與の優勢は、恃むべからず。終局まで、自然に優勢なることは、兵に常形なき限りは、僥倖にも之れあることなし。所

謂一進一退變化して、一朝過たば、牴羊觸籬の大厄に墮ることあるべし。戒むべく、慎むべし。

今や朝鮮の北方三道平安、咸鏡、海州を經略し、鴨綠、豆滿、兩江を以て、我兵配置の位置を定む、全く優勝の形勝なり。是より一步一步進みて、



是故に滿州の野に、我兵を進むることは、十分の成算ありて、彼れ敵軍の大部を破滅覆没し、其戰鬥力を失はしむるの見込あるにあらざれば、容易に兵を動かすべからず。

若し夫れ力攻力戰して、僅かに敵の位置を奪ひ、彼れをして其軍を全して退却するを得せしむ。如是を以て兵力を費し、人命を損するは、誠に危殆の道なり、かゝる進軍は、寧ろ敗退するの不祥にしかず。

抑も戰は、故なく敵の位置を奪ふべからず。又故なく我が位置を守るべから

ず。位置の移動を以て、戰の目的となすべからざるは、勿論なりと雖も。攻守兩道の外に、戰術なきが故に、其謀計動もすれば一進一退、攻守の範圍に墜いり易し。是れ兵家未熟の常情なりとす。されば將帥の任に膺るもの、須らく大策を定め、大勢を制すべし、勤めずんばあるべからず。

元來軍を配し、陣を列ね、以て戰を決す。其彼我の位置は、何れにもあれ、敵軍を打ち摧くを以て能事とす。滿州の野にても可なり、朝鮮の北部にても可なり、又京城をも敵に委して、其南部に引寄せて、之を打ち摧くも可なり。我は彼れを打摧くに都合よき處を撰んで、戰を決すべし。是れ所謂我が戰地戰場なり、之に反し敵に戰地を撰定せられて、我れ之れに致さるゝ時は、必ず我不利の地に、雌雄を決せざるを得ざるなり。

されば彼我の深謀、此事の爲めに、ちのづから不測の進退あり。是れ凡將の動もすれば不覺を取る所以。而して良將の肝膽を摧く所以なり。若し此事なければ、白面の書生の、僅かに兵術を學ぶものも、兵機を會得して、敵と對戰することを得ん。危いかな。

妄りに攻勢を取るを銳とし、敵の守地を奪ふを以て能事とす。如是きは兵家の大失なり。

敵に位置を與へ、彼れをして隔地に備へて、其弱點を補ふが爲めに、其兵を勞せしむ。如是きは、與へて而して彼れを敗地に致すの術なり。かゝる形勢に乗じて、一撃を加ふ。敵の戰鬪力を奪ふこと、猶朽木を摧くが如し。是れ兵の上計なり。是故に奪ふよりは、與へることを策し。進むよりは、退くことを策す。是れ即ち將帥方寸の神秘とす。亦以て進むべし、亦以て奪ふべし、亦以て敵を致すべし。

是故に滿州の野に、我兵を進むるは、尤も深謀遠慮あるべし。妄りに進軍の勝利を貪りて、彼れの術策に釣り込まるゝ時は、我れは往々劣敗の形となり、彼れは漸く優勢の形となる。今や彼れ既に敗形を取る。有ん限りの術策を施し、謀計を盡し、いよゝゝ優勢の地に立つに及んで、殊死奮戰、以て必勝を圖るなるべし。是れ尋常兵家の術策、決して悔るべからず。

即今の形勢は、我れ鴨綠の天險に據り、十里内外の内線にあり。彼れは哈爾賓

奉天、遼陽、牛莊、海城、旅順、大連、鳳凰城、安東縣一帶、殆ど三四百里に亘る外線に在りて、其危殆の地に奔命す。彼我を比するに、殆ど十が一の優劣の地位なり。斯る形勢の大體に着眼し、進退運爲、此の優勝の地位を失することなかれ。

露國の極東に用ひ得る兵力の八九部が、滿州の野に配列せられ。而して其位置及連絡要衝強弱の點を、一々認定して、而して大策を定むべし。此根本の大策の定まらざるに、輕兵を出して、漫りに浪戰するが如きは、必ず大事を誤るの端となるなり。

一勝一敗、兒戲に等しく、其勝敗の結果は、地物の與奪に過ぎず。而して彼我終局の勝利は、敵兵を殺し盡すにあらざれば、得ること能はず。是れ無謀の浪戰力闘の過ちなり。

敵國が三十萬の兵を、滿州に用ふると假定し。其二十五萬は、全く戰地に在りて、彼れより攻勢を取らんとする時機を以て、我も又一大大運動を開始すべし。

哈爾賓ニ

五萬

凡二十五萬、奉天、遼陽ノ間ニ

十萬

海城、鳳凰城、安東縣、一帶ニ 十萬

敵國が滿州の野に、大兵を出すは、三十五萬已其數の多大なる程が、我軍の利なり。大凡物には形勢あり、相應あり、其形勢を計らず、其相應を察せず、徒らに大兵を以て、重地に入る。進んで用ふる所なく、退けばみづから潰ゆるの恐あり。進退是れ谷まり、如何ともする能はず。遂に不利と知りつゝ、妄りに攻勢を取りて、みづから覆るに至る、如是きを兵の敗形と云ふ。

されば敵の大兵を、滿州の野に誘出し。之れを重地に致して、徐ろに討伐を計るを以て、此戰の眼目とす。此計策を實行するには、我れ輕兵を出して、専ら虛擊を事とし。我虛而彼實、我輕而彼重、則ち虛實輕重の形勢を利用して、彼をして知らず、不利の地に大兵を集合せしむる様牽制すべし。

海城以南、鳳凰城、安東縣等に、二十萬已上の敵兵を引入るゝは、是れ實に兵家皮肉の術なり察すべし。

今日彼我の形勢を察するに、終局の勝敗に關する大戰の運動は、今より滿五ヶ月後にあるべし。則ち十、十一、十二の三月間を以て、大運動を開始する時機と假定

し。而して此の五ヶ月間に、我が軍の經營すべき要件は、

- 第一 鴨綠江左岸ノ防禦工事、
- 第二 平安道ニ於ケル根據地ノ經營、
- 第三 鴨綠愛河ノ中間ノ要地ヲ占領スルコト、
- 第四 流行病豫防ノ設計、
- 第五 耳湖浦ヨリ鴨綠江左岸へ鐵道布設、

敵國の大兵、たとひ滿州に充滿するとも。北韓の防禦、及び輕兵を出し、敵軍を牽制するには、我兵十萬を以て、優に餘りありとす。即ち威鏡道に二萬、鴨綠江に五萬、豫備軍として三萬。以上十萬の兵あれば、たとひ敵兵百萬騎を以て攻勢を取るも。防禦工事の十分なる上は、決して韓境を超へて、我れに迫害すること能はざるなり。

豆滿、鴨綠の天險は、恰も大城の追手搦手の如く、其形勢固より同じからず。されど所謂一騎途に當れば、萬騎も超ゆること能はざるは、北韓の地勢にして、眞に天險と云ふべし。

露國が會て我國の協商に、應諾を與へざるは。此天險を占領せらるゝ時は、滿州を守ること至難なるを知らばなり。其得失の關係至大なるは、兵家以外のものゝ、未だ會て夢見せざる處なるのみ。

北韓の天險に據りて、萬里懸軍の大兵を苦しめ、彼をして自滅に至らしむることとは。殆ど捕虜を放て、之れが自暴自滅に任すが如く、誠に必至の數なり。決して畏るゝに足らず。但畏るべきは無形の敵なり。

無形の敵は、天險も要塞も恃むべからず。何をか無形の敵と云ふや、軍中の流行病是なり。就中赤痢虎列刺の二病、尤も畏るべし。若し是れに襲撃せらるゝ時は、只に病兵のみならず、全軍の銳氣を挫折し、闘志を失せしむ。

此等の要件を謀議するに先じて、我兵家の覺悟すべき一大事あり。何ぞや、大兵を用ゆべき方畧設備の未定に係らず、我が兵力を盡して、戦地に出兵し、徒らに疲勞倦怠を生ぜしむ。是れみづから亡滅を招くの道なり。兵家の大禁此上なし。

勝を喜び、勝に勇むは、兵の常情なり。故に無謀の戦に、軍の一部の勝利は、やが

て全軍を導て、大敗を招くことあり。又一部の敗北が、動機となりて、敵軍を不利の地に誘ひ、我軍之れに乗じて、勝利することあり。之れを要するに、兵を無謀に用ひて、恣まゝに攻守するものは、其結局に至りて、支離滅裂大敗を取ることを必せり。則ち楚の項王の如き是れのみ。

敵兵を滿洲の野より、漸次に撃退するは、恰も螺旋の彈器を押し届するが如く。彼れが一敗一退して、背進する程度に其力を増加し、優勢となるなり。されば此螺旋の彈機を牽き出し、其牽き出したる全部を截り取るを以て、此戦の目的となす。

敵の大軍が、滿洲の野に配陣するを待ち、滿蒙の間に奇兵を放ち、鐵道を破壊すべし。若し此目的の、全効を收むること能はざれば。彼れの大兵が、外國萬里の外に届して、みづから潰ゆるに至るの策を講ずべし。抑も目的を、胸中方寸に存して、機會の至るごとに、其目的を達するの手段を求め、之れが術策を案出す。之れ人事の常にして、必ずしも兵術のみに限らざるなり。されば將帥たるものは、兎も角我全功を收むるを目的に、手段を求むべし。

右に述する所の大計を前定して、其目的を達するには、第一着に、鴨綠江左岸の防禦工事を、駿速に設計し。敵兵をして江を超えて、一步も進むことを得ざらしむべし。

此防禦工事は、一時假設は餘儀なきも、永久築造の目的を以て、間斷なく改良補綴すべし。

咸鏡道の防禦は、擲手の備として、之を計劃す。

根據地の設定は、耳湖浦と龍川との間において、一の勝地を撰び。新に一市府を開くべし。

耳湖浦は、平安道五十里程の海岸に在りて、唯一の港なり。凡二千噸位の船舶は、自由に入出するを得る。海面に數島嶼あり、之れが防備をなすに、尤も好位置なり。但其水路曲折し、出入ともに、熟練の水先を要す。固より良港に非ざるも、軍需品を供給し、軍兵を増遣する等の交通要港となすには、尤も適當とす。

此地は、西南に面し、少しく陸上を進めば、全く正南面の地勢となり、西方に一帶

の丘陵ありて、海岸を隔て、東西凡一里、南北は龍川府の背にまで達す、凡そ七之れ恐くは平安道中の唯一最上の地形ならん。

平安道の韓人は、韓人中に於て、全く別種なり。軀幹長大ならずと雖も、力量ありて、且つ伶俐なり。之れに、武事教育を施せば、必ず戰闘にも用ふべし。余は以爲く、太古我國人の移住せし遺族を混ざるならんかと。

韓國は、到處惡水のみ。然るに耳湖浦より、龍川に至る中間の高地は、大概良水なるべし。山川の形勢、及び其地味に於て、察するに足る。

新府を開くべきは、耳湖浦より、凡三四里程の處、尤も可なるに似たり。廣く一地を劃し、道路を通じ、病院、兵舎、倉庫を建設すべし。又内地より信用ある商人を誘導し、市街を作るを要す。

耳湖浦より處申館まで、凡そ十餘里程鐵道を急設すべし。此地極めて平坦なり、但龍川府の背に到りて、一帶の丘陵あり、以て南北を隔つ。されど之を開通する甚だ容易なるべし。

此等の設計は、鴨綠江の防禦工事と相待て、一體の作用を生ずる一大經營にし

て。此經營此設計の大畧成就せざる已上は輕進以て敵を謀るべからず。抑も一系萬世の天子を奉じ國家存亡の道に従事す。實に人間世の最大事此上なかるべし。一死も報ゆるに足らず高名手柄などの所談にあらず。萬々にも大計方略を誤る時は再び取返しの出來ぬ敗亡の運を招く。恐れても畏れ慎むべし。

斯る大事を行ふに方り徒らに兵數軍器を恃み遙々たる千里の海濤を渡り山河を超えて他人の國に突入し所謂懸軍萬里之れに續く所の援軍もなき大兵を野戰出沒の態度にまかせて山野に暴らし進んで敵軍を覆すべき深謀もなく退ては軍を全ふすべき根據地もなく漫りに敵兵を出沒し一進一退以て勝敗得失を争ふは誠に危殆の至りと云ふべし。

今や敵軍は不利の極地にありと雖も。元來四五年間の經營を盡し鐵道を通じ都市を領有し滿州一帶の政權を掌握す。決して我が軍の萬里遠征の途に立ち斥候を發して僅かに道を開き土人に聽て未涉の地を探り敢て浪戰するが如きに似ざるなり。

我が軍必ずしも然らざるべし但急功を貪り敵を輕んじみづから設備をなさず。敵軍の薄弱に乗じて多大の兵を進め妄りに攻勢を取らんと欲する時は。勢ひかゝる過失に墜いるを免れず。

鴨綠江と愛河との中間の地を占領して後來攻勢運動の要地となすべし。義州の對岸にして虎山のある地此地點は所謂彼我の争地なり。此地點を占むるものは此の間の優勝の位を占む。

此の地點よりして長白山の西面一帶即ち連山溪谷の間に占據し暗に馬賊なるものを指揮し遼陽奉天の横背を扼し彼れの交線を斷つべし。此溪谷間には種々の妙計秘策も含藏せらるべし。之を發するは兵家の一樂なり。

馬賊の降して用ふべきを假定す若し用ふべきなき時は滿韓山中の民を用ふべし。斯る險地にありて輕兵を用ふ其土民と利害を等ふるにあらざれば妙計秘策も行れざるなり。

餘論

彼我の國力及び形勢を察するに、此の戦争の終局までは、大凡五ヶ年間に渉るべし。或は是より短日月に、終局することあらんも。そは今日彼我形勢已外の出來事の爲めに、生ずる變態にして、決して常勢にあらず。

若し此自然の大勢に戻り、強て終局を速ならしめんと欲する時は、其畫策、おのづから兪略となり、輕進力攻遂に大敗を招くに至るべし。されば今日より、豫め注意すべき要件は、

兵の疲勞倦怠を生ずること、

軍中の生活衛生不良の結果により、流行病を誘發すること、

軍用資金を濫費して、妄りに國力を費すこと、

彼我兵の強弱を詳らかに點檢し、我兵の弱點を補ふべし。

彼れ露兵の過半は、兵を以て常職とするものにして、能く戦地の生活に耐ふるは、東西兵家の認むる所なり。之れに反し、我兵は、太平の治民にして、其兵役を

以て、非常の大役となすか故に。一旦死を決して、此大役に當るは、其覺悟する處。然るに戦地戰場に、進退出沒して、長年月間持久することは、尤も其弱點ならん。但し滿一ヶ年已上に涉り、漸く戰場の生活に慣るゝ已上は、或は此の弱點を去るとを得べし。

長年月の間を期して、今方さに外征に従ふ。即ち士卒の軍中に在りて、快樂を共受すべき手段を、工夫制出すべし。

此事たる、些事の様なれど、戦陣を以て一天地となす士卒の爲に、尤も必要の件なり。海軍の永く戦闘の状態にありて、倦怠の氣味なきは、此の軍中の快樂を、共受する手段に富めばなり。

普通は、非職員の増加を以て、尤も軍の戒むる處とす。されど今日の場合に於ては、平安道全體へ、移民の目的を以て、男女を擇ばず、農商工を誘導し、其職を興ふべし。是れ長年月の間、外征に従事する軍勢軍氣を養ふに於て、唯一の條件なり。

長白山は、東亞のアルプス山なり。此の山に主たる者が、後來必ず東亞の覇權を

掌握し東亞の太平を守護す。即ち東亞の大鎮なり。されば此山中に、東方の瑞西國を建設するは、我國人天與の任務とす。此事成就せざれば、一進一退、一盛一衰の間を變動往來して、東亞太平の基礎遂に定まるの期なし。唯願くば、其道徳力の堅固なること、西歐瑞西國の好同伴たらんことを。

滿韓に涉り、鴨綠、豆滿、遼河の源流を收め、一千萬人を容るゝに足るの地域を檢定し、以て此の設計を立つべし。

韓人は、嫉妬佞奸の性ありて、反覆常なく、只に恩怨の情を恣にし、信義を顧みず、恰も女性の陰險なるものゝ如し。されば其行を視て、之を用捨し、決して彼れが口舌に信を措くべからず。滿漢人の性情は、幾分か立ち勝る處あるものに似たり。滿韓の經營は、光明正大なるを要す。慈愛ありて、斯民を救ふの志あるべし。本國の爲と稱して、妄りに生民を殘害するは、即ち人道の賊なり。慎まざるばあるべからず。

甲辰四月二十二日

續 太平 策

序 言

余病床に在り、藥餌と相親むこと已に一年、此間に於ける日露の戦は、尤も激甚を極む。其新聞の報ずる所、日として悲惨ならざるなし、幸に毎戦我軍の捷利に歸し、尙かに國運の興隆を祝し、以てみづから安慰する所あり。去りながら衷心の杞憂は、恆に常に懷に往來して、無寐に忘るゝこと能はず、爲に桂氏を煩はして、卑意を大本營に達せんことを乞ふ、一再に止らず。其獨語の如きは實に此間に於ける余が杞憂煩悶の爲體なり。然るに我皇軍の忠勇なる、其功烈果して空しからず、北は沙河の大戦に敵軍を覆し、南は旅順の堅城を陥し、以て明治三十八といふ、日出度新年を迎ふるを得たり。茲に於て病夫も、大に安堵の心を生じ、尙かに以爲く、今後は一意専心、只みづから病軀を養ふて、殘生を保ち、太平の天地に俯仰して、一向皇恩に沐浴すべしと。今茲に一月十二日、卒然山縣元帥より、親書を忝す、辭意殷懇、切に余が病軀を憐む。其中言あり曰く、桂

首相より、老兄の戰略論一冊送り候に付、一讀致候處、老練卓識の高論、敬服の外、無之、依而一本謄寫爲致、陸相より、兒玉總參謀へ送り置き候、云々、余又窃かに以爲く、元帥にして、苟も病夫の狂言を捨てず、縱令我身は病床にありと雖も、其志は夫れ或は砲烟彈雨、肉飛骨碎の間に行はるゝなきを知らんやと。遂に又氣を奮ひ、病を忍びて、胸中鬱勃の秘策を略陳し、之を綴太平策と名づけ、獨語と共に之を元帥に致す。但し病苦の爲に、其行文の如きは、頗る陋劣なり。若し責任にある人にして、其文字を略し、其意の取るべきを取て、國家の大事に參するあらば、豈只病夫の幸のみならんや。

明治三十八年一月三十一日

余病床に在りて、攝養之れ勉め、戰地戰場の様子は、一新聞に依りて、僅かに之を知るのみ。それも多讀は、病に害あるが爲に、外國の電報と、大本營の公示位に止む。是故に其兵を論ずるは、恰も聲の觀劇を評論するに同じかるべし。去りながら古往今來、一定して動すべからざるものあり、今の軍人は、往々目前進歩の有様を見て、此一定の法則を忘却するなきか。

夫れ兵は、二種の力を以て體用となす、即ち一は兵の運動力、二は兵の破壊力、是なり。此二様の力を、程よく調和して、形勢地物に應じて、之を用ふる、是れ將帥の任なり。而して多苦^{タク}知^チ幾^キの運動力は、古昔五千年前の當時も、今日と異なることなく、即ち馬の足、人の足の足のみ。

支那古代の車戰、印度古代の象軍、匈奴蒙古の騎兵等は、今日の運動力より、或は勝る所ありしなるべし。

而して其破壊力の進歩増長は、言語同斷にして、古今を引て、比すべからざるのみならず、百年前に比して、其進歩の度は、殆ど一と十なり。

小銃の發射距離の如きは、三百と三千の差あり。大砲の破壊力は、更に大なるものあらん。

千八百七十年普佛戰に於ける、其兩國の武器は、歐洲中に於て、當時最も銳利と稱せらる。而して今より之を比較し見るに、實に言ふに足らず。されば今日の彼我兩軍は、共に此遲鈍の運動力を以て、此精銳至大の破壊力を用ゆること、前代未聞にして。其一方が、或は地物の選定を失するか、又は進退方略を失するか、又は

軍の一角を破られて、左右翼若くは横背より鏖み付けて、敵に壓迫せらるゝ時は、全軍覆没して、生存者無き迄に、無残の最後に立到るべし。

地物を失ひ、又は攻勢の軍にして、一旦敗退する等の時は、遲鈍の運動力によりて、敵の猛烈なる火力の中に、永く暴露するが爲に、昔時の戦に比して、異常の大敗を受くるなり。

是故に此二種の不釣合の力を調和して、之を善用するは、誠に今日の將帥たるもの、大任にして、従前の兵術以外の活作略を要することは勿論なり。是を之れ察せず、徒らに破壊力を持みて、勇戦奮闘す。幸にして戦場を占領し、大敗に立到らざるも、其軍を疲勞し、其兵を傷害し、極度の精力を盡して、戦闘力を失はざるは希なり。

比較上遲鈍なる運動力は、地物に據りて、守勢を取るを以て、大利とす。之れに反して、攻勢を取る時は、頗る不利の形勢に在ること、一と三の比例なり。守勢の一に對して攻勢は三の損害を受く 故に若し止を得ずして、攻勢を取る時は、豫備戦を以て、數次に敵軍の死命を制すべき形勢を占むるを要す。元來今日の如き遲鈍なる運動力によりて、

至大なる破壊力を用ふる多苦知幾は、分戰豫備戦を以て、敵を敗形に陥入れ、而して一舉に掩撃殺到して、彼れ敵軍を其根底より破壊するの時期にあらざれば、全軍の進撃を用ふべからず。

普通野戦の攻守にありても、彼れ適當の守地にありて、地物に據る所の敵兵を攻撃するには、彼れが至大の破壊力を犯して進襲する我兵は、彼れの其一に對して、其三を損害せらるゝこと、必定なり。況や永久半永久の築城堡砦に據る敵兵を攻陥するは、決して此遲鈍の運動力を持み、勇を鼓し氣に乗じて、其の目的を達すべからず。但し其場合には、我至大の破壊力を用ふるに足る豫備の爲に、往々難戦苦闘を辭せざることあるのみ。

遲鈍の運動力は、彼の至大の破壊力を利用する目的の爲に用ふること、恰も戦闘艦の推進器が、其艦の有する破壊力を善用する爲に、用らるゝと、同一の觀念を爲すを要す。決して遲鈍の運動力により、其多數を持みて、敵軍を包圍し、壓倒すべからず。是れ將帥胸中の秘訣なり。然るに昨一年間の戦闘に於て、其將器なるものを察するに、頗る解すべからざる者あり、其一は、豫備戦より直に本戦に押し

移る進軍の意氣を含み、敵兵の前軍を一體に犯して、其地物の全體を奪取せんことを勉むるものゝ如し。其二は、敵に對し、何時も彼より多大の兵數を以て、彼れを包圍し、始めより引包んで打漏さぬ單調の兵器を用ひんと欲するものゝ如し、之れ實に無謀の極なり。

普佛戰の時に、普軍が専ら包圍戰器を取りしは、當時別に事情あり。

右の二様の軍謀が實地に行れて、非常の惡戰となり、一呼一吸のつひ引ならぬ場合に陥り、遂に猛進突撃し、我戰鬪力を盡し、以て敗退の厄を免かるゝに至る。

抑も今日の如き至大至猛の破壊力を有する軍隊は、比較上少數の兵を以て、多數の敵と戰を交ふるを以て、大利ありとなす。狹隘の地に、敵の大兵を誘致すると同様の心持ちを云ふなり。何となれば、所謂至大の破壊力を、用ひ得て十分なれば、必ず一を以て百に當るに足る。即ち彼れ敵兵の多數が、或る一部の戰場に集合する程、我が破壊力の傷害を受くること、増大劇甚に至ればなり。是故に今日の用兵は、比較上小數を以て、多大の敵兵に對するを貴ぶ。從來の兵法と全く其趣を異にする。其の攻勢を取る時の如きは、必ず敵の要害の一地を奪取し、漸く進んで敵の全軍を敗形に致すべし。其豫備戰に於ては、兵力

を用ふる、大凡そ全軍の三分を越ゆべからず。若し此數に越ゆる時は、指揮し以て前軍を進退すること能はず。却て豫備戰に、兵の全力を費して、遂に惡戰に陥るなり。況や總攻撃と稱して、全軍全面に涉りて、同時に攻勢を取るをや。其我兵を傷害し、徒らに戰鬪力を失ふこと、何の目的に出るを知らず。夫れ普通の野戰にありても、適當の地物に據るの敵兵を攻むるには、猶一と三との比例なり。況や要塞築城に對して之を行ふは、其將畧の無法なる、知るべきのみ。抑も總攻撃は、敵軍を敗地に押し付けて、一舉に之と塵戰し、其戰鬪力を、根本より破壊するの作略なり。決して敵軍の一部、若くは數部を破り、其何れかを占領し、因て以て勝を將來に制せんとするの希望によりて、行ふべきにあらず。之を要するに、現今多苦知幾上の運動力と、破壊力を調和して、軍の健全を保つには。

一我は適當の地物に據りて、守勢を取り、出來得る限りの防禦工事を施し、敵をしてみづから不利と知りつゝ、攻勢を取るの止むを得ざる形勢にあらしむる事
一我れ若し止むを得ずして、攻勢を取る時は、敵の守地に就て、其最も要害たる

一地を攻略し。即敵の全軍を敗形の位置に致して。彼れが機關部を破壊するの目的を以て、全軍を擧て進撃する事。

一敵と對陣の間は、暫時の休戦中にも、我れ形勝の地に據りて、防禦工事を施し、彼れ敵兵に比して、我れは半數の兵を以て、優に彼れと對等の戦を爲すに足るの經營をなす事。而して其餘兵は、後方安全の地に休養して、敵兵の進撃に備へ、一旦利を見れば、守勢を轉じて、攻勢を取るの豫備をなす事。

露國今日の有様は、内外共に頗る危殆の地に迫れり。我の此間に於て、施設經營する處のもの、實に最後の勝敗に關するなり。

露國內亂の如きは、毎度ある小波瀾のみ。近日必ず秩序を回復するに至るべし、決して我國情に比して、彼れの窮狀を、極度に想像することなかれ。

海軍は今且らく言はず、陸上の戦は、旅順陥落せる以上は、奉天遼陽の間を以て、彼の争地となす。而して此際に於ける我軍謀の最後の目的は如何に、此の最後の目的に應じて、豫め即今の戦闘態度を取ること、肝要中の肝要なり。然らざれば、所謂浪戦の害に墜いり、遂には最後の大敗を招くに至る。今や我軍最後の目

的として、進んで哈爾濱を占領し、敵兵を滿洲の地より撃退し、一方には浦鹽斯德を攻陥し、日本海一帯の地を領略す。即ち以て敵國を屈して、和を乞はしめ、必ず平和を克復するの望みあるか。若し敵を屈し、平和を回復するに足らざる時は、空しく不利の地に大兵を暴し、其弊は、漸く國疲れ民疲れ、所謂牴羊の難に觸るゝの大厄に陥るべし。

余を以て之を謀るに、此上兵力を以て、彼れ敵國を屈するは、頗る惡計なり。所謂百戰百勝は、善の善なるものにあらず。されば彼をして従前の敗辱を回復するに、心力を致さしめ。我は之に應じて、何時も互角の形勢を持ち、或は勝利の虚名を興へて、其戦闘力を盡さしむる等、即ち彼れみづから倦怠疲憊して、遂に滿洲を放棄して、平和を乞ふに至らしむるを上計となすなり。是故に露國が五十萬の兵を、千萬里の外に出し、力に任せて、我れを屈せんとする、是れ最後に至りて、平和を回復するの一機なり。元來昨年來の戦も、我れ力を極め、勝に急なる趣あり。今日以往は、決して斯る單調を以て、最終の目的を達する能はざるのみならず、之れに反して、大失敗を來すの恐あり。

遼陽奉天の間の争地に、要害の地を占領して、之に十分の防禦工事を施し、我兵十萬を以て守るべき、一の要塞を置くべし。此の要塞兵の十萬は、必ず敵軍三十萬に當り、縱令此臨時建設の要塞が、萬一陥落するとも、それと同時に、彼れ亦必ず其の戰鬪力を盡して、終に再び立つ能はざるに至るべし。況や十萬の餌兵を以て、敵兵三十萬を釣り、而して我が全軍は、餘勇を養ひ、其弊に乗ずるの餘地を保つ。敵をして絶望の意を生ぜしむること必せり。

過度に敵國に敗辱を與ふる時は、或は其都府を屠り、其戰鬪力の機關を破壊し盡すも、猶敵國人を屈伏すること能はざる實例は、往々あることなり。

今日現在の形勢は、奉天遼陽の間に於て、沙河の一地を劃し、對陣するものゝ如し。軍團を盡して、戰線に並列し、何十里に互りて、日々砲火を交換し、其兵を傷け、其武器を損して、日常の茶飯となす。一旦彼我大運動を起して、衝突する時は、例の惡戰難鬪互に兵を殺傷して止まんのみ。終に最後の大事は、此等惡戰難鬪の結果に望むべからず。

獨語

兵法に曰く、勇怯は勢なり、強弱は形なりと。又曰く、三軍は氣を奪ふべしと、夫れ勢は氣の鍾まるより生ず、故に氣を奪へば、則ち勢を屈す。勢を屈する時は、勇者も怯者となる。是れ兵家の秘術にして、將帥たる者の堅念不忘の大事とす。

然るに昨今新聞の傳ふる所を見るに、敵軍の間諜を捕へ來り、彼れ間諜が決心決死して、其君國に報ゆる態度ありとて、仰々しく感狀を作り、日本軍參謀の名を以て、之を敵軍に致せりと。若し此事ありとせば、無知無謀の至といふべし。我軍士中

に求むるに、リヤ、ボフ其人なきか、

日本軍の參謀より、露軍に與へたる敵間諜に對する感狀

譯文

チエンバールスキ第貳百八拾四聯隊附

ベンゼン縣ベンゼン郡レベデヨーフ村住

豫備卒　　ワシリーリヤイボフ（卅三年）

右者清國農民に扮装し、本月二十八日我が軍の爲め捕獲せられたり、同人の口供により、彼は志願にて、我が軍の哨兵線内に入り、我軍隊の行動並に配置等を探査せんが爲め、派遣せられたるものなることを、明かにせり、仍て成規の審判を經、右リヤトポフは、死刑に處せらるゝことゝなれり。

同刑は、九月三十日、銃殺を以て、之を執行せり。

右件を、貴軍に通報すると同時に、我軍は、貴軍に對し、貴軍がリヤトポフ其人の如き、眞實美麗なる、且充分なる尊敬に該當すべき兵士等の、多數を有せられんことの熱望を、發表するを禁ずる能はざるなり。刑に就くに先ち、謂はんと欲する處なきやを問ふに、皇帝の爲め、國の爲め、宗教の爲めに、身を致す、何の謂ふ所あらんと答ふ、爾は深く心事を知る、爾の父母妻子に、爾が如何に忠實堅固勇敢に、國の爲め死に就きしかを報ずるを約せん、猶ほ傳ふべき處なきやと問ふに、更に言ふ處なし、但其厚意は謝するに言なしと答へ、又同時に、涙を禁ずる能はざりし、斯くて許可を得、四方に向ひ、十字架を書き、伏拜祈禱し終て、徐々自ら刑所に就けり、觀る者涙を禁ずる能はず、此の忠勇義務の觀念に、充滿せられた

る美麗なる兵卒に對する同情は、其極度に達したりき、敬具。

日本軍參謀

滿州に於ける野戰露軍 御中

余此文を讀み、尙かに以爲く、嗟乎不仁も茲に至りては亦甚矣。若し露軍の將帥にして、此の感狀を以て一軍に諭し、即ち曰く、我軍は、其一兵一卒と雖も、悉く忠肝義膽を具へ、我君國の爲に、死を視ること歸するが如し。決してリヤトポフ一間諜のみかゝる事例にあらず、即ち露軍全體如斯の事例たることを、彼れ神經過敏なる日本人の頭腦に彫刻して、長く忘るゝこと能はざらしめよ。是れ露國軍人の、敵軍に對する覺悟なり。若し未熟未練のものありて、國辱を致すものは、必ず嚴刑に處して、赦すことなしと。

如斯は、則ち敵將をして、其三軍を鼓舞奮勵するの好機を興ふるものにして、氣を反對の精神上、恰も一倍以上の援軍を加ふるに異ならず。是に反し我軍に對しては、頗る不仁の至なり。之が爲め、惡戰難闘、我軍の士卒を殺傷し、延て全軍勝敗の數に關す。憶うて茲に至れば、實に身に寒毛を生ずるなり。又聞く、旅順攻圍

の始めに當り、彼我兩軍の體勢も、未だ定まらざるに、彼れに降伏の勸告書を發せりと。是れ前例に反し、敵を輕侮するのみならず、兵家の法度を蔑如する、實に甚し。抑も要塞の守將たるもの、未だ戰鬥力の盡きざるに、敵に降伏するは、則ち謀反と等しく、嚴刑に當ることは、苟くも兵に従事するもの、等しく明知する處なり。是を知りて是を爲す、是豈敵を輕侮するものにあらざるか。之を要するに、高襟風流の軍人ありて、みづから死生の地、存亡の道に任するをも忘却し、其當時に於ける彼我三軍の氣勢をも察せず、徒らに文明の態度、義戰の容體を、中外に發揚せんと欲するが爲に、知らず識らず、敵味方を鬪弄するが如き、大失計に墜いりしものに似たり。五月鴨綠江を渡りしより、十月沙河の戰まで、滿六ヶ月なり。顧ふに我軍の死傷は、必ず十萬以上に達せしなるべし。氣に任せ才に任せて、我が忠義の士卒を、屢々死地に置き、之を殺し、之を傷け盡して、後に臍を噬むとも、畢竟詮なかるべし。今より宜しく沈重の意思、精確の神算に依りて、最終の勝利を期せられんこと。是れ老夫日夜の願なり。

此獨語は、心地よき時清書して、山縣元帥に送るべし。
右甲辰十一月二十八日の花園日記に記す、今抄出して、續太平策の後に附す。

獨語の後に書す

老ぬれど矛鉞ゆげを杖に盡さん、身にいたづきのなからましせば。

一 菊溪 茶道 條規

甲辰十二月二十五日開室。

菊溪一流の茶道は、四事を以て境となし、賓主互換を以て心となし、心境一如を以て宗とす。

依經

經は、維摩經を所依とす。

四事

清潔。閑雅。野趣。風韻。

一 古式に拘泥すべからず、時流に隨逐すべからず。

一 法式手順は、諸流に通ずるを用ふ。細事の取捨は、茶道會得の上は、隨意たるべし。

一 傳授口訣は、初入の事なり。決して奧義など沙汰すべからず。

一 樂事は茶事にあり。茶事の外に、樂事を求むべからず。

一 人生の勤めは、いかなる勞苦も厭ふべからず。勞苦が、人生の職責勤務と知らば、妄りに樂事を求むるの不是を知る。此の如き人にして、即ち一瓶の花、一椀の茶も、其樂事の身心に和適するを知るなり。

一 茶事は、劣境を去りて、勝境を作す。造化の功を補ひ、其神を養ふ。

一 夏清冬暖、食は必ず胃腸に適するを主とす。

一 人生の勞苦を知り、勞苦を辭せぬ人にして、眞に茶事の樂事たるを知る。茶事は、眞に樂事なり、是故に又執着すべからず。執着すれば勝境轉じて、惡境となるなり。

入室

我が室は拂ひ拭ひもせぬまゝに、塵ひぢつけぬ姿なりけり。

開爐

我が茶道は、有疾の菩薩を度す。

よしあしも是も非も釜にうちいれて煎たゞらして、茶にたてゝ飲め。

- 一方丈室を以て、我が所流茶事の正室とす。
- 但し四疊半以上八疊までは、其好む所に任すべし。
- 我が所流にては、濃茶薄茶を、上茶魚茶と稱す。
- 一上茶は、必ず一客一服とす。其點茶の法は、親密に口傳あり。
- 一懷石の後、必ず上茶を供す。而して更に魚茶を喫して、餘興を補ふを得ず。
- 但し主人、客を別室に延きて、餘情を話し、又は廣間に客を饗應するときは、此限にあらず。
- 一正室中にありては、煙草を喫するを得ず。
- 一主客共に、室内所用品の外は、携帶して入室すべからず。
- 一臺子飾等の古式は、我が所流にありては、全く餘事たり。
- 但し一流の師範たるものは、一通り故事故實に通ずるを要す。
- 一食は、一汁三菜を限りとす。酒は、五盞に過ぐべからず。盞量、五勺に越ゆるを得ず。
- 杯蓋の制は、別記にあり。取肴は、山菜、海魚、其時節の物、一二品、適宜たるべし。
- 一淨水を選び、必ず瀝水すべし。

- 一時候外れの食物は、客に供すべからず。
- 一食を調するには、殊に清淨たるべし。神佛に供養すると、聊か違ふ所あるべからず。
- 一調理に任ずるものは、必ず手洗ひ、口嗽ぎ、覆面すべし。
- 一器物は、あるに任せて受用すべし。恰も拾ひ集めたるが如きをよしとす。但し不倫を忌む。
- 一器物の撰擇は、我が一流の見識を具し。傲奢卑陋の俗に、惑亂せらるゝことなかれ。
- 一食器は、清新なるべし。
- 一貧福自ら分限ありと雖も、所謂名物寶器の類、又は高價の品は、決して用ふべからず。或は家傳の品、又は因縁ありて、其所有に歸するものは、博物考古の料に藏すべし。
- 但し之を床に安置して、賞鑑するは可なり。
- 一掛物は、和漢古今を撰ばず。

但し時節因縁に違ふべからず。

一茶器は、一々時代、産所、形様、及び出来を異にす。たとひ末代、龜造の品と雖も、客たるものは、等閑に看過すべからず。

一客は主人に問ひ、主人は客に對ふ。共に懇懃たるべし。

一客たるもの、他の器物を引て、室中の器物を比較評論すべからず。

但し主人より、評論を求むる時は、一應は謙遜して、後に誠實の言を致すべし。

一客は、知中に无知を表し、无知中に知を藏す。恰も文殊の、維摩に對して、問法の心あるべし。

一主人は、客問の分量に應じて、之に對へ。其中おのづから情味ありて、和樂するを要す。

其他別記にあり、子細に吟味すべし。

甲辰臘月三十日

釣月庵に於て

不老翁識す

一我が所流に師範として、人の子女を教授するものは、専ら禮儀作法を主とし、必

ずしも茶事に拘泥すべからず。

一人の性、おのづから剛柔緩急の齊しからざるあり。心を靜め、意を定め、氣を鍊り、體を正して、禮儀に復さしむべし。

一意氣六分を含み、揚らず屈せず、舉止動作、恰も君前に大禮を行ふが如くあるべし。

一器物の取扱は、都て名品寶物を取扱ふ心得たるべし。

一聖訓禮記篇を口授し、就中曲禮を習得せしむるを要す。

一師受の道は、心に誠敬を存するを要す、決して無心、又は自得の境に住するを得ざれ。

一樂記曰、徳成而上、藝成而下。行成而先、事成而後。可以有制於天下也。

右追記

世をわすれ身をわすれても忘れぬは、西山おつる菊溪の水。

菊溪の清き流れを汲みて知れ、よしあし知らぬ人のこゝろは。

乙巳一月七日

古式に泥むも隘なり、時流を逐ふは不恭なり、茶事の眞旨たる禮を以てこれに對し、和を以てこれを行ふ。而して一碗の香、一瓶の色、清寂の妙趣を顯し、安心の眞諦を證す、人生の一樂といふへし。孟子曰、隘與不恭、君子不由と。釣月庵の茶規、眞個に中和を得たるもの。

心月庵主書

菊溪一流茶道條規終

菊溪一流茶道條規跋

昔年蘭疇翁壯時、得庵居士に禪の初歩を問ふ。居士曰く、而壁坐禪すべし。數日の後、居士翁に問て曰く、而壁如何。翁曰く、日來而壁すること數回、いつも睡を催す而已。居士曰く、亦善矣と。而して強て工風を勧めざりしと也。居士熱海別墅に茶室を設け、菊溪一流茶道條規を著し示さる。謹て之を讀むに、心境一如を宗

となし。不知々々の間に、軌を踏ましめ、覺えず道に入らしむること。猶蘭疇翁に禪を示すものと同じ。余大に感ずる所あり。爲に一言を卷末に跋す。

明治三十八年三月十七夜、此夜門前又鐵嶺占領の號外を賣る聲噴々。

况翁 石黒忠惠

尺 牘 三通

與川合清丸論養生書

拜啓仕候小生十一日出發伊豆不老窟へ罷越閑居保養罷在候。老兄近來の御病氣如何候哉御案じ申上候。自然御都合にて當地へ御來游如何。老兄の御病氣は全く心氣の疲勞より來り候事と被存候間其御積りにて御保養專一に奉存候人生一生の中には必ず一回位は此事より。少壯の舊態を不改時は或は不治の症と相成可申候間御注意肝要に御座候。小生も一兩年前より此氣味有之今年は少しく平常を得候様被存候。尤も氣力は従前に復し不申候へ共稍々平生を保ち愚頑性をなし候間此分にては異態も有之間敷候。元來道を信じ候ものは其品位を高尚に保つこと肝要と被存候。王侯に不事杯と申す譯には無之候へ共可成雜事に不染又他人の願使を不受獨立して世に不用の人物と相成候事返すくも願はしき事と存候。佛教の菩薩は實に此境界より頭を出すものかと被存候。抑も菩薩と衆生とは生々不離なるものに付決して一機一期の事業に

非ず。君の臣に對するが如く父の子に於けるが如し。古今萬國君なき國無く臣民無き時無し。一治一亂一往一返人生の有らん限りは如此なるべし。父の子に於けるも亦然り。生々育々一生一死の上に相續して盡期なく一念慈愛の絲を以て此の人間世を繋ぎ止むるに似たり。是れ併し別格の慈悲心を生じて然るに非ず。衆生と菩薩と民と君と子と父とは法に於て常に相應す。此眼あれば此色あり。此耳あれば此顔あり。此心あれば此身あるが如く居然として如是。決して取捨安排を假らざるなり。されば吾輩苟も道を守り道を修せんと欲する此眞實に違すべからず。假令功德は五帝三皇に踰え聲名は孔子墨子に勝るも。此眞實に違する時は畢竟野狐の雄のみ。是故に一切不捨一切不取我が一念心の時に相應して厚薄輕重の情なき是れ平常心と申すべし。古人云平常心是道と蓋し吾を欺かず。夫れ道に始終なく法に生老病死なし。生老病死なき處に生老病死あり。始終なき處に始終あり。其始めを始めとする即ち無始なり。其の終りを終りとす即ち無終なり。生老病死も亦然り。されば老病死の時は老病死なり。此外別に子細無し。譬へば燈火の漸く其光を滅し

て暗くなるが如く。是れ決して無慈悲にもあらず、不得力にもあらず、因縁の自然なり。得失取捨すべからず。されば此一眞實を知らずして、死に到るまで、目を見張り、齒を嚙みて、我相を顯はすは、凡夫の最下等なるべし。されば因縁の隱顯、我が事にあらず。我輩は只内觀の工夫第一と存じ候。内觀とは、内外古今を一枚にして、黒漫々地の處に坐を据ゑ、大光明の透徹する様工夫するを云ふなり。此一事のみ、老病死際も變ずる事なかるべし。其他は時々まに／＼にて、總て宜しかるべし。雲煙の如く、幻化の如く、夢想の如く、泡沫の如く、流水に面を寫すが如く、一物も取り止むべき相無し。功德と云ふも、事業と云ふも、一期の夢なり、著すべからず。然るに老兄の事業は、一分の愛見あり。是れ大いなる違法なり。違法の法は、人の倒さまに立つが如く、假令習慣となるも、終に久しきに堪ふべからず。且文章も、他の頭髮を引つかみ、引立て、道義の中に誘引せんとするの氣概あり、是れ大いなる患ひなり。如斯は、一國の君となりて、生殺與奪の大權を把握するも、其臣民を保つこと難し。所謂信賞必罰、却て不治の本となる。黃帝即位十有五年、喜天下戴己、養正命、娛耳目、供鼻口、燠然肌色、肝臟昏然、五情爽惑、又十有

五年、發天下之不治、竭聰明、進智力、營百姓、焦然肌色、肝臟昏然、五情爽惑、黃帝乃喟然歎曰、朕之過淫矣、養一己其患如此、治萬物其患如此、於是放萬機、舍宮寢、去直侍、徹鐘懸、滅厨膳、退而閉居、大庭之館、齋心服形、三月不親政事、晝寢而夢遊於華胥氏之國、云々。此事大いに理あり。されば氣を下し、志を弱くして、道根を培養する事、肝要なり。小生多年、大いに誤り來りて、此事實地に經驗あり。所謂三折肱爲良醫、ものなり。故に竊かに老兄の爲に、此事を告ぐ。決して輕信の人には示すべからず。

右は心付きしまし、申上候間。御一讀の上、御取捨被下度候。猶御疑惑有之候へば、御申越被下度候。閑暇故、時々卑見可申上。先は爲其早々。明治二十七年六月十五日。

與川合清丸論王道書

來書王道無黨の説の如きは、余不敏にして、其の意を解すること能はず。竊に以爲らく、書の謂はゆる王道無黨無偏の意なるものは、蓋し王者南面其の位を正し、

大權を把持し、天下を成敗するの心術にして、即ち惟精惟一、允執厥中^レの謂ひなり。是れ國君政を爲す、固より宜しく此くの如くならざるべからず。人の臣となり、輔弼の職に在り、以て其政に任ずるものも、亦固より宜しく此くの如くならざるべからず。然るに今吾徒時に感じ事に慨し、竊に臣道の明かならざるを憂へ、同志相謀りて、大義を正し、名分を明かにし、以て彼の不忠不逞の輩を戒めむと欲す。即無黨無偏、將た何を以て其中を執らむとする乎。夫れ堯舜禹湯文武周公なる者は、古の謂はゆる聖王王佐なり、而して唐虞の間、天下多事、四凶朝を亂り、鯀事を恣にして、民を傷つく。大舜位を攝して、惡を除き、奸を去り、賢を用ひ、能を進め、果決敢爲、允に中を執りて行ふ。堯をして堯たらしめ、禹をして禹たらしむるものは、蓋し大舜一人の功なり。湯王は桀を逐ひ、伊尹は太甲を放ち、武王は紂を伐ち、周公は管叔を誅し、蔡叔を放ち、是れ皆大權を把持して、天下を成敗する者。其の心術を言へば、則ち無黨無偏、而して其の天下の亂萌を芟除するに於ては、斷々乎として人の是非を顧みず。豈徒に王道無黨の意を稱説して止まむや。孔子曾て魯の司寇となり、七日にして少正卯を誅す、少正卯は魯國の聞人なり、未だ曾て

大辟を犯すを聞かず。而るに孔子の敢て之を戮するものは、願ふに彼れ必ず徳を賊ひ、民を惑はして、當時天下の亂魁たればなり。蓋し聖賢の心を用ふる、唯是れ天下治亂の機を慎めるのみ。

近時福澤氏なる者あり、亦是れ一代の聞人なり。曾て楠公を權介に比し、以て忠を王室に致せるの迂拙なるを罵る。夫れ忠を非る者は、君を無す、孝を非る者は親を無す、是れ大亂の本なり。若し孔子をして其の職に在りて、此輩を誅せしめなば、必ず今日上を犯し、權を争ふの禍を醸すに至らざらむ。只恨むらくは、古今時勢の同じからざる、此の奸猾を放ちて、天下を惑亂せしめしことを。夫れ時勢の變、浸潤の禍は、天下の人心をして、忠より不忠に移し、義より不義に移して、其の亂の底止する所を知らざるなり。昔者源賴朝の幕府を鎌倉に開き、以て大權を武門に移すや。後世の論者、大概其の天下を統一するの雄を稱して、未だ曾て亂臣賊子を以て之を責むるものを聞かず。是れも亦時勢の變と視做して、深く罪するに忍びざる乎。然るに北條氏、陪臣を以て國命を執るに至り、遂に三帝を廢して、偏土に遷し奉りき。足利氏も亦皇子を弑し、反旗を翻へして、禁闕を

犯す。而かも天下復之を怪まざるのみならず、反覆の論旨を以て、王命を拒む者之れあり。天皇御謀反を以て、天下に唱ふる者之れあり。是れ皆頼朝が大權を移せる流毒餘殃に非ざるはなし。苟も時勢の變と視做して、以て其の不義を不義とせず、其の不忠を不忠とせざれば、則ち天下の大亂踵を接して至らむ。聖賢の心を勞するもの、蓋し之が爲めのみ。

余亦竊に以爲らく、我國上世武を以て國を建て、不逞を討し、頑惡を誅し、民皆王化に服したりき。中世儒佛の入りしより、王室みづから教化の主となり、仁愛慈悲以て天下を帥る給ふ、乃ち仁徳餘りありて、威武足らず。恩賞下に普くして、誅罰は奸宄にすら加ふるに忍びず。彼の小人の徒は、惠に襲れて恩に感ぜず、積習の久しき、遂に謹慎恐懼の心を失ふに至りぬ。是故に王政には暴惡の累なくして、或は善柔の失あり。夫れ王道を以て天下を帥る、仁徳を以て斯民に臨まむと欲すれば、名教を布き、禮義廉耻を興し、以て民俗を正すに非ざれば、民彝亂れて臣道立たず。臣道立たざれば、則ち君道行はれず。抑も君臣なる者は、其徳猶ほ夫婦の如し。夫たる者賢にして、道を以て之を帥るも、婦若し徳の之に和

する無ければ。其仁愛慈悲は、適々以て婦の奸を長ずるに足る。我が國家中世以來政道漸く廢弛し、布教の權は、獨り僧侶の手に歸し、天下復た名教の民俗を化する無し。徳川氏起ちて、覇權を握り、元和偃武より以來、殆三百年、時全く太平に屬す。當時水戸義公の賢なる、首として儒術を尙ひ、碩學鴻儒相繼ぎて輩出し、稍大義名分の教を唱へ、天下の士大夫始めて尊王の道を聞くとを得たり。王政維新中興の業、先帝の宏猷と、今上の威徳とに因ると云ふと雖も。天下の人士をして、身を棄て利祿を擲ちて、而して王事に勤めしめしものは、亦此の名教の功に非ざるは無きなり。然るに積習の勢、一旦激すれば、則ち臣道を顧みず。強悍の俗、動もすれば、朝廷を蔑にす。西郷隆盛、江藤新平、前原一誠等は、皆維新の功臣にして、斯民の師表たり。而して反を謀ること業を創むるが如く、其の王師に抗するや、謂はゆる鹿を中原に逐ふに異らず。當時の賊軍歌ひて曰く、勝てば官軍たり、負くれば賊たりと、其意に以爲らく、名分は勝敗に由りて定まり、大義は強弱に由りて決すと。其の蒙昧獷悍なる、殆ど化外の民たり。是れは則ち其の甚しき者、其の他王政を不満とする者、各々黨を樹て、みづから民黨と稱し。民權

自由の説を以て、大義名分の教へに易へ。著書に、新聞に、演説に、天下の少壯を鼓動し、暗に勤王の迂濶を罵り。即ち曰く、謂はゆる維新なる者は、藩閥人士の功業のみ。更に政黨を以て、天下の權を執るべし、之を名づけて第二の維新と曰ふと。遂に今夏六月に至りて、諸黨相合し、政權爭奪を以て天下に宣言す。黨の領袖大隈板垣二伯の如きも、亦公然口を極めて、此の非舉を懲懲す。而るに輔弼其の器に非ず、管に之を制すること能はざるのみならず、却て此の輩を引き、朝に進め、今や再び大權下に移るの端を發く。是れ皆大義上下に透徹せず、臣道人心に顯明ならざるの禍なり。易に曰く、負且乘、致寇至と、負ふとは小人の事なり、乘るとは君子の器なり、小人にして君子の器に乗るは、乃ち盜を之れ招くの謂なり。吁、亂徵危機漸く動けり。苟も臣子の常分を知る者、將た如何にか之に處せむ。來書に曰く、近日某氏の書を得るに、大に伊藤侯の罪を鳴らし、目するに亂臣賊子を以てすと。余以爲らく、侯は久しく陛下の信任を辱くし、威權朝野を傾けたり。然るに輔弼し奉るに王道を以てすること能はず。危譎權變、一向自家權營の地を營み、事窮し術盡くるに至れば、乃ち窮措大の言を放ちて曰く、事與志違と

獨り憂ひを至尊に貽し奉りて顧みず。罪科瀾天、神人共に怒る。然れども專横上を犯して、みづから事を用ふる者と同じからず。以て亂賊の臣と爲すは、頗る苛刻の論たるを免れず。願ふに某遽に此の論を作すものは、蓋し其の政權相奪の宣言者を引きて、之を朝に進むるを惡みてならむ乎。然らば則ち侯を以て亂臣賊子と爲す、其の薦むる所の黨人は、將に何を以て之を呼ばむとする乎。處士の横議責任なしと雖も、其の失言も亦甚だし。頃者藤澤商岳、余に示すに詠史二首を以てす。其の中に句あり曰く、破摧唐室金甌、去馴養漁陽鐵騎來と。若し夫れ唐室安祿山の亂を以て、之を今日に比するは、謂はゆる針小棒大の喩へにして、頗る不祥の嫌ひあり。今其の大小の辯は且く措く、其の理の如きは、亦必しも通ぜざるに非ず。然れば則ち天下只慢に李林甫を罵りて、以て一時の憤を遣り、會て義兵を擧げて、祿山を討つ者なし。是れ實に唐室の金甌を破摧に委して顧みざる者に非ずや。忠義の士、憂世の心ある者は、決して此の如くならざるべし。徒に小人の死屍に鞭ちて快と呼び、顧て猾賊大盜を放ちて、劫奪を恣にせしむるは、甚だ至愚の人と雖も、猶且之を爲さず。意ふに足下も亦此の一大事に於ては、

必ず當に説あるべし。

余は頗る足下の平生を知る者なり、今敢て忌憚を犯して、聊か一言を進む。足下曾てみづから任ずるに大道を以てし、其の心竊かに世道人心の頽廢を挽回し、以て國運を悠久に護し、以て王業を不朽に守らむことを期す。其の志たるや眞に偉なり。是を以て大道社を創め、神儒佛三道を主張すること、十年一日の如く、社員は殆ど天下に普く、叢誌は積て棟に充ち、牛背に餘る、亦勉めたりと謂ふべし。然りと雖も深く道を信ずる者は、動もすれば萬能を以て、之を一道に歸す。佛者の曰く、佛道行はるれば、則ち天下泰平なり。儒者の曰く、儒道行はるれば、則ち天下泰平なり。神道者の曰く、神道行はるれば、則ち天下泰平なりと。其れ然らむや。夫れ國の治亂興亡は、必ず政道の奈何に由る。之を古今内外の史に徴するに、異途あること無し。余嘗試に之を論ぜむ、夫れ政道の立たざるは、必ず不忠の臣ありて、之を亂ればなり。假令三道一世に普きも、此の不忠の類を化して、忠良と爲すこと能はざれば、則ち國家の亂亡、決して免るゝこと能はず。而して此の類のものは、頗る難化の衆生たり。其心念強悍にして、才智は

必ず常人に越え、厚利を求め、權勢を貪り、人の堪へ難きに堪へ、人の能くし難きを能くす。約して之を言へば、利根にして煩惱多きもの。乃ち世の謂はゆる政事家なり。此の人や、口舌を以て屈すべからず、道理を以て服すべからず、故に舜は四凶を放ち、周公は兄弟を誅し、孔子は少正卯を戮す。王莽はみづから聖人に比し、祿山はみづから赤心腹に満つると稱す、而して共に殘賊の臣たり。此等は凶惡の甚だしき者なりと強も、然れども其の小人剛根利智、道を以て化し難きは、大概之に類せり。

是故に佛者あり、之を説くに佛道を以てすれば、彼れ即ち曰く、佛道は我れ迷に信ずること能はざれども、然れども其の法の如きは、曾て竊に之を尊重せり。聞く佛法は平等を主とすと、我等も亦平等を主とすと、謂はゆる平民主義なる者は、即ち平等主義なりと。佛者此の語を聞くや、喜色面に溢れて、以爲らく彼等我が法を尊敬す、宜しく引て以て大法を外護せしむべしと。儒者あり、之に説くに王道を以てすれば、彼れ即ち曰く、王道なる者は、我れ固より之を知れり、夫れ書は義の府なり、禪讓放伐を以て大義と爲す、而して大義の由る所は、即ち民意なり、故に曰く、

撫我則后、虐我則讎と、又曰く、天視自我民視、天聽自我民聽と、蓋し書經なる者は、眞個に民權主義なりと。儒者之を聽きて、襟を正し眉を揚げて、乃ち告げて曰く、民安ければ則ち君安く、民喜べば則ち君喜ぶ、王道の説固に此くの如し、卿等の言亦是なりと。神道者あり、之に説くに神道を以てすれば、彼れ即ち曰く、有神と無神とは、我れ未だ確信する所あらず、然れども我國太古以來、神國を以て名と爲し、敬神を以て俗と爲す、外國は吾れ之を知らず、我國の謂はゆる神道なる者に至ては、則ち皇道なり、皇上陛下は現人神なり、故に憲法に曰く、天皇は神聖にして、犯すべからずと、而して政事なる者は、凡俗の事、利害の衝なり、若し陛下之を親らし給はば、則ち或は恐る王室終に民の怨府とならむことを。是の故に神道皇道を崇敬して、深く王室の爲に計るに。宜く皇室と政府とを區別し、人民みづから進みて、政權を執り、以て神意を安むじ、以て皇基を守る、是れ國家不朽の道なりと。神道者流も、亦此の説を聽きて、唯々として退く。蓋し道を信ずる者は、偏に其の道の天下に行はれざるを憂へて、而して我が君の憂ひを憂へず。我が君の憂ひを憂へざるが故に。其の人の忠奸を辨へず、國家將來の趨勢を察せず、漫然其

の耳に順なるを喜ぶ。又偏に其の道の天下に行はれざるを憂ふるが故に、異端の徒、巧智才辯の士の、僅かに相似の説を爲せば、則ち以爲らく我が道行はるゝの端なり、天下復た憂ふべき者なしと。方今政事家を以てみづから居る者、其の求むる所の者は、勢利なり。争ふ所の者は、政權なり。若し之をして戰國に生ぜしめむ乎、白刃を踏みて、功名を競ひ。生死を懸けて、利祿を求むるの輩なり。神儒佛道、彼に於て畢竟益する所なし。豈管神儒佛道のみならむや、凡そ一切の教學に於る、牽強説を作して、苟も己が事に害なければ、則ち足る、若し相通じて助援となれば、乃ち曰く、是も亦勢力を養ふの一端のみと。抑々皇室を以て神聖の府となし、政治を以て凡俗の事となし、其の實權を擧げて、以て之を政黨に歸せむと欲する、是れ黨人畢生の欲望なり。此の欲望たる、其の上を誣ひ、私を行ひ、大義に戻るは論なし。之を國家の實際に徴するに、其の大に不可なる者二あり。一に曰く、政黨權を執れば、其の勢遂に皇上の天職を犯す。二に曰く、大權移動すれば、則ち國家必ず大亂を生ず。是れなり。何を以て之を言ふ乎、掛卷も畏こけれども、至尊の踐ませたまふ所の御位は、即ち祖宗の天位

にして、天下に君臨し、萬機を親裁し、以て國家の隆運を致し、以て斯民の福祉を保たせ給ふ。是れ至尊の天職にして、而して祖宗に奉じさせたまふ所以のものも、實に茲に在り。其の國體の至嚴犯すべからざること此くの如し。然るに彼れ冥頑無智の徒は、妄行作爲、漫に大權を私竊せむことを企つ。是れ猶天日の明を偷まむと欲するが如し。縱令鬼神の威靈も、亦決して爲す能はざる所なり。況や區々たる鷄鳴の才、狗盜の器に於てをや、其の分を忘れ、黑白を辨ぜざるも、亦甚だしと謂ふべし。且夫れ國家の事は、治まらざれば則ち亂る。民の事は、安からざれば則ち危し。此の治亂安危の由りて生ずる所のものは、即ち政道なり。今此の政道を以て、これを政黨に委して、其の亂たる危たる、猶皇室に得失なしと謂ふ乎。また我が皇上此の悲惨の狀を視そなはして、乃ち是れは臣下の責なり、斯民の自業自得なりと宣ひて、可ならむ乎。是に由りて之を觀れば、彼の徒の欲望たる、非理非道にして、殆ど君を無する者たるは、此の一事に於て見るべきなり。何をか國家の大亂を生ずと謂ふ、曰く、小人の國家の大權を視るや、以爲らく一種利便なる器物の如く、容易に移動すべき者と、然れども國家の大權なる

ものは、少しく移動すれば、少しく天下の亂を生じ、大に移動すれば、大に天下の亂を生ず。之を古今内外の史に鑑みるに、此の大器大權の移動にして、亂を生ぜざること、未だ曾て有らざるなり。彼の徒動もすれば、英國を引きて、以つて政黨内閣の美を言へり。蓋し英國は、其の憲法衆議院を以て重しとす。而して之を馴致する所以の者は、亂を経ること數十回、年を積むこと數百年、其の從來する所の者遠し。且國には各々宜しき所あり、縱令彼我の憲法、其の名を同くするも、其の意義に至りては、則ち未だ曾て大異無くむばあらず。是れ彼れに取りて、以て法となすべからざる所以なり。恭しく惟みるに、帝國の憲法は、皇上陛下の皇祖 皇宗の遺訓を聿べ修めて、以て欽定し給ふ所、即ち陛下爲政の大法なり。其の貴衆兩院の如きは、特に 陛下の立法官たるに過ぎざるのみ。法文憲章昭乎たること、曠日の如し、疑議を此の間に挟むことを得ず。方今世界各國、専ら攻戰を事とし、弱肉強食、人の國を滅ぼし、人の民を奴とし、天地の公道、人間の正理に於て、殆ど顧る所なし。此の時に當りては、法を三章に約し、海嶽不征、以て民と休息せむと欲するも、亦得べからざるなり。乃ち海陸の軍を整へ、數十萬の兵を養

ひ、攻守の具を修め、文教を布き、富源を發し、謂はゆる開國進取を以て國是と爲すは、乃ち時勢の止むべからざるもの、尤に今日の急務たり。是を以て國費多端、法令繁苛、以て斯民の自由を制し、以て斯民の負荷を重くす。是故に法律の以て斯民の義務を制する者は、事細大となく、悉く帝國議會の議を経て之を行ふ。是れ即ち帝國憲法の大旨大要にして、實に王者の大典、不朽の聖範たり。然るに彼の徒、視て以て王政を民に移し、大權を下に移すの利器となす。職を議院に奉ずる者も、敢て自己の職責を顧みず、詭譎詐謀、一向其の欲望を達せむことを勉め、遂に諸黨合同し、政權爭奪を以て、天下に宣言するに至る。顧ふに道義未だ地に墜ちず、天下應に必ず忠義の士の挺身卓立、以て其の非義を制する者あるべし。而して制し得れば、即ち治り、制し得ざれば、即ち亂る、其の治亂の機、實に一髮の間に在り。

人或は言ふ、彼の徒既に政權を掌握し、みづから政黨内閣と稱す、然れば則ち時機已に去る。而して彼の徒の欲望も、業に已に之を達したれば、焉能く之を制せむと。曰く、是れ皮相の見なり。彼の徒の欲望、未だ其一半を達すること能はず、

今正に進行の運に在り。故に皇張誇大、政黨内閣の名を掲げて、其の聲を大にし、其の言を壯にし、以て天下の人心を移さむと欲するもののみ。且彼の徒の領袖大隈板垣二伯の如きは、是れ固より維新の功臣、數々閣班に列し、樞機に參す。今皇上也亦推重し給ふ所なり。其の在野無責任の時に於ては、則ち或は極端無責任の説を爲して、以て其の黨與を鼓動すること有るも、今日局に當りて、輔弼の職に在れば、一片の忠情、其の心に動き。宸憂を奉體し、臣職を畏敬して、必ず應に政黨を以て重しとし、我が君を以て輕しとは爲さざるべし。然りと雖も、勢を得る者は、功を爲し易く。地を得る者は、術を施し易し。二伯已に權勢の地に立ち、内には黨與を援きて、之を要職に薦め。外は議員に藉りて、以てみづから重きをなし。内外相應じて、黨人自家の目的を經營す。是れ方今憂ふべきの實勢なり。抑も余が惡む所のものは、政黨其人に非ざるなり。又其人の朝に立ちて、事に任ずるを議するに非ざるなり。唯彼の徒が目的とする所は、我が國家の大害たるを懼るゝにあるのみ。

凡そ政黨に二種の別あり、一は國家の主權を移動せむと欲する者、二は政務の得

失に就きて、互に異見を立つる者、是れなり。而して其政務の得失に就きて、相互に異見を立て、各自黨與を結びて、以て其の信ずる所を守るは、是れ立憲政必至の現象たり。決して國家の深憂となすに足らず。若夫れ國家の主權を移動せむと欲するの黨派ありて起らば、不祥これより大なるはなし。我國不幸にして、微しく其の端を發す。今に及びて正義忠直の臣、慨然其衝に當りて、之を制するあるに非ざれば。履霜堅氷の漸、其の禍遂に底止すべからざるに至らむ。請ふ更に詳かに之を論ぜむ。從來黨派を以て起るもの、曰く自由、曰く改進黨、曰く進歩、而して其の唱ふるは、悉く平民主義と稱す。此の平民主義の名を假り、民意を代表すると自稱し、以て國家の大權を掌握せむと欲す。是れ隱然主權在民の意あり。故に彼の徒多數を衆議院に占むるや、敢て爲政の得失を問はず、敢て自己の職分を顧みず、傲然以爲らく、衆議院の勢力に藉りて政權を執るは、是れ立憲政の本色なりと。遂に宣言して曰く、藩閥政府の議案は、其の是非得失を問はず、盡く之を否決すべし。藩閥政府を倒し、我れ取りて之に代るべしと。若し此の無法の徒をして、天下に横行せしめ、此の不義の輩をして、政權を弄せしむ。則ち我が國家

の前途、其れ果して奈何ぞや。夫れ黨人非理を以て理と爲し、非義を以て義と爲すも、舉世敢て怪まず。則ち此の間に起る者も、亦必ず其の非理の理を理とし、其の非義の義を義として相争ふは、是れ自然の勢なり。今彼の徒の專横をして、其の極に達せしめむ乎。乃ち貴族院なる者あり、必ず其の非理を鳴らして曰はむ。彼の徒衆議院の勢力に藉りて、政權を執り、以て政黨内閣と稱す。然れども其の衆議院なる者は、帝國議會の一半たるに過ぎず。彼の徒をして、専ら帝國の政權を弄せしむるは、實に吾が徒の耻づる所なり。斯くの如き專横の政府は、則ち之を顛覆すべし。其の議案は、悉く之を否決すべしと。事遂に此の極に至れば、彼の徒も亦必ず曰はむ、平民主義なる者は、日進開明の趨勢なり。平民主義なる者は、貴族の勢力を存すべからず。故に帝國議會は、一院制にして可なり。憲法之を改革すべし。貴族院之を廢止すべしと。一事を生ずる毎に、輒ち一論を激し、一論を激する毎に、輒ち一亂を加へ。其の亂の加はるゝ毎に、過激の説、從て勢力を得。遂に彼の徒の中に在りて、稍事理を解する者をして、或はみづから其の黨を脱し、又或は放逐疎外せられて、而して大隈板垣二伯の如きも、亦遂に其の黨與

の秩序を持つこと能はざるに至らむ。余故に曰く、彼の徒の欲望は必ず國家の大亂を生ずと。夫れ國に君あれば、則ち之を尊み、之に事ふることを知る。是れ實に臣民たるの通性なり。家に親あれば、則ち之を敬し、之に事ふることを知る。是れ人の子たるの通性なり。而るに今君父の尊敬服事すべきを知りて、敢て之に尊敬服事せず。却て事に托して説を爲し、以て好て上を犯す者は。此の人や、必ず天地の間に尊敬服事すべき人あるを見ざるべし。若し之れあらむ乎、是れ之に服事するに非ず、姑く己を屈して、以て其の欲望を達せむと欲する者のみ。故に一旦其の望を達し、其の欲を遂ぐることを能はざれば。則ち悍然として立ちて、之と争ふ。此の種の者、之を名づけて亂民と謂ふ。故に曰く、虎爲群而食其母と。人心道義を喪ふの害斯くの如し。豈畏れざるべけむや。

世に一類の人あり、専ら公平の論を持するを以て念と爲す。其の説に曰く、凡そ物因縁無ければ、則ち生ぜず、彼の憲政黨なる者は、藩閥政府の秕政、以て之を激成するのみ。詩に曰く、維其有之、是以似之と。今日の事豈怪むに足らむやと。余以爲らく、是等の説は、徒に疾病の因由を説きて、而して其の病の大患に陥り、苦

痛煩悶死に至らむとするを熟視しつゝ、救はざるの論なり。吁、秕政民を害すること、何れの時か之れ無からむや。小人朝に立ちて、政道を亂ることも、亦世として之れ無きは無し。乃ち其の小人を去り、其の秕政を正し、蹇々匪躬、只我が君徳をして、四表に光被せしめむことを欲する、是れ誠に忠臣義士の志なり。彼の徒苟も此の志ありて、斯の道を行ひ、以て臣節を盡くさば、余輩決して之を議せず。豈嘗之を議せざるのみならむや、將に雙手を舉げて、之を贊せむのみ。今や然らず、曩の謂はゆる藩閥なるものは、其の職に在りて、時に或は其職を失ひしことあらむ。而して彼れ憲政黨なる者は、更に大權を私黨に移さむと欲す。即ち曰く、從來政權、全く藩閥の手中に在り、我れ之を奪ひて、以て政黨に移す、是れ即ち天下を公にするなりと。遂に黨府を置き、黨議を開き、國家細大の事を議し、其の決する所を以て、直に輔弼の任、立法の職に在る者を制裁せむと欲す。其の悖亂此の如し。而るも猶之を藩閥の餘毒と謂ひて、恕すべき乎。凡物必ず先づ腐ちて、而して蟲之に生ず、天下の治亂、國家の興廢も、亦必ず從來する所無きは非ず。余亦之を知る、故に明治八年に、國勢因果論を著はす、十三年に、王法論を著はして、竊に

之を三條相公に上る。廿三年に先愛論を著はす、前後三十年間、其經歷する所のもの、只此の一事を憂ふるのみ。是れ足下の熟知する所なり。抑も平氏の專横は藤原氏に倣ひて、而して一層の劇甚を加ふ。源平權を争ひて、大權武門に歸し、北條氏陪臣を以て國命を執り、三帝を廢して、之を偏土に遷す。而るに天下敢て怪まず。源氏北條氏に倣ひて生ずるものは、足利氏たり。其の勢從來する所ありて、萬爲すべからずと雖も。然れども猶王事を恢復することを謀りて、蹇々匪躬斃れて已まざる者ありしは。誠に臣子の常分なればなり。況や今日は、決して爲すべからざるの時に非ず。只僅かに其の禍端を發するに過ぎざるのみ。此の時に當りて、吾輩同志の士、起ちて之を制せば、則ち彼の徒の罪惡を、未だ甚だしからざるに救ひ。以て天下の人心を正し、遂に彼の徒をして、皇國忠良の臣民たらしむるも、亦甚だ難からずと爲す。是れ謂はゆる禍を轉じて福と爲し、亂を轉じて治と爲し、其の人を救ひ、世を救ひ、以て皇上陛下の宸憂を除き奉ること、蓋し此の一舉に在り。孟軻曰く、能言距楊墨者、聖人之徒也。夫れ言論を以て天下を亂る者あれば、之を排するに言論を以てし。干戈を用ひて天下を亂る者あ

れば、之を伐つに干戈を用ふ。今や彼の徒、朋黨を以て、將に王事を亂らむとす、乃ち吾が徒たる者も亦宜く同志を糾合して、以て一大義社を結び、以て王事に勸め、臣節を致すべし。是れ物に應じ時に處するの道なり。王道無黨の言は、美ならざるに非ずと雖も、然れども我が王事に益なければ、即ち猶空言に同じ。足下の賢なる、必ず此の義の歸する所を疑はざるべし。言語雅馴ならず、辭義も亦通ぜざる所有らむ、足下只其の大意を領せよ。會て致す所の王道會宣言書は、同志の委嘱を受けて草する者。其の之を用ふると否とは、同志者の撰ぶ所に任せむのみ。明治三十一年八月十五日。

與川合清丸論幻術書

過日御來訪被下辱く存じ候。其の節幻術養生の事、拜承致候。此事たる、第一修道の魔事のみならず、人道の悖亂とも、相成候事に付、御心付申度存候へ共、足下の此の魔事に、感染被致候事、尤も深く、殆ど膏肓の病とも、相成候事に付、緩々開悟の方便も、可有之と、其儘にさし置候事に、御座候。然るに今朝大道叢誌を一閱致し

候處既に彼の事を世間に公表致さるゝのみならず、佛の神通もかゝるべしとの義に到りては、實に驚愕の外無之、依りて不取敢、心付し儘を開陳致候。彼の幻術なるものは、全く足下の夢想にして、其の夢想を同じうするものは、同分共業と申して、少なきは一二人、多きは數十百人も、妄見を同じうすること有之ものに御座候。譬へば夢中の境の山河大地及び人畜等の如きも、自心惑業の影事なれど、其の中に、已れと彼れと、別々に見え分れて、其の言語舉動相互に反復して、人我の別をなし、勝劣も有之、我が知らぬ事をも、夢中の人より聞く事も有之ものにて、是れ皆な識心の轉變に有之。彼の幻術如きも、決して是れと別異なるものに無之。普通の夢なれば、必ず一醒一覺の時は、有之候へ共、彼の幻術の夢は、一回結ぶと、容易に覺醒するの時節無之。實に身の毛の立つ程、恐ろしきものに有之候。此の魔事は、隨分凡夫地にも有之事にて、昔より神あるし、又は言よせ杯申すものにて、無智文盲の間に行はるるものに、有之候。乍去凡夫地にありては、色蘊堅固なるを以て、自然其の感を受くる事も深からず。只一つの不思議として、甚しき大害も無之。然るに少しく禪觀を修し、色蘊微弱になりて、人我の世界を見

ること、玻璃室にても坐するが如き想をなすものは、此の魔事一層増長して、種々の奇特をなすものに有之。己が力量に相應し、己が妄想力の程合に、現するものにて、是れを色蘊の區宇と申候。色蘊盡きなんとして、米だ出脱すること能はず。故に世界の皆邪定邪觀の致す處なり。此義は、佛首楞嚴經に精しく説き置かれ、又達磨禪經にも、退分とて、精しく説き置かれし事なれば、必ず熟讀あるべし。元來一心法界の眞實眞際、は、足下の觀得せらるゝ處とは、雲泥の相違なり。此の事は、老生從來不肯底の事なれど、下根の人を、無理に駈り立て、進むる方便も無之、故に時節因縁の到來するまでと、其の儘にして、強て説破も不致、相過候處、今回の事は、實に不容易一大事に付き、茲に一言致し候。足下も其の心して、虛心坦懐、一切の妄想妄念を放下して、聽受有之度候。心如虛空界と申しても、此の心が、虛空界に充滿して、周徧なるものには、無之、只凡夫の心量に相應して、斯く説くより外無之ゆゑ、佛も往々斯く説かれしものなり。夫れ一心法界と申すは、自心現量の事なり。虛空は、虛空あるにあらず、自心現量にて、虛空と現はるゝなり。衆生と申すも、衆生あるにあらず、自心現量にて、衆生

と現はるゝなり。人我及び壽者相も、人我及び壽者相あるにあらず、悉く自心現量にて、人我及び壽者相と現るゝなり。一念生滅の相に墮つれば、自心現量の影事に付纏ふて、箇様な種々の妄想を爲すなり。佛大覺の中には、決してかゝる影事なし。此の大覺は、別に大覺と申す勝妙の境界あるにあらず。只此の迷の夢の醒めたる上に名づくるのみ。即今迷の夢さへ醒むれば、的面に此の境界なり。決して是れは迷なり、是れは悟なり、此の分は生滅なり、此の分は不生不滅なりと、取置くものあることなし。譬へば夢の醒めたるものゝ、是れを夢中の山河大地人畜なる、是れを醒めたる時の山河大地人畜なると、別々に取置くものなきが如し。是故に聖賢の斯道を修するや、徹底して開悟の地に到らざれば止まず。猶夢中に醒はるゝもの、是れ夢なりと知りて、早く覺醒せんことをおもふが如く、中間に滞りて、安んずべき處なし。若し中間に安んずべきあらば、是れ只夢境の轉じたるを知らず、いつとなく熟睡するものにして、更に一層の不覺に入りしものゝみ。

足下從來自己の本心を信ぜず、只に一心法界の不思議を感得自得して、有所得の

見を長じ、妄に識心を弄して、奇特を求め、勝妙を希ふ。慢魔其の便を得て、久しく肺腑に潜む、故に身を惜み命を貪ること、普通凡夫の煩惱に過ぎたり。我相、人相、衆生相、壽者相に於て、執着深重なるが爲めに、外魔時を得て法城を圍む。勇士猛將盡く降を乞ひ、主將亦將に魔軍に投ぜんとす。是れ皆聰明利根なるものゝ病痛なり。釋尊も菩提樹下にありて、曾て一回此の大難に罹る、況や其の他をや。此の時に當り、三世諸佛の冥助を得て、勇猛の志氣を鼓舞し、生死の苦海を跳出するに非ずんば、永く衆魔の眷屬となりて、未來永劫其の苦輪にかゝること疑なし。

夫れ一切生滅の心行は、邊もなく際もなし、三世十方を、一念の上に現じて、念々に住らず。過去の過去際を盡し、未來の未來際を盡し、天の天際を盡し、虚空の虚空際を盡して、此の一念の上に流轉す。若し此の流轉を、生滅にあらずと言はゞ、是れを何とかなす、若し一物ありて、幽明に出入し、自身他身に往來し、永劫滅度の期なしと言はゞ、是れ外道神我の見なり。凡夫着有の見の増長せしものなり。若し一切の諸法は、因縁生滅の相にして、此の生滅のまゝ、即ち實相なりと言はゞ、足

下の過去の念相を把持し來れ、過去の念相を把住し得ずんば、即今の常念何の處より來る。常に知るべし、即今直下に足下の念相と、耆婆扁鵲の神靈、又は所謂無色界の衆生なるものと等しく此の生滅虛妄の相にして、猶大海の浮漚の如く、自己心海の一波動のみと。而して此の自己と名づくるは、別物にあらず、即今直下に足下の自己心を言ふなり。足下の自己心、かくの如く妖をなし怪をなす、此の事都て他人に關らず。是の故に足下更に猛烈の志氣を振起し、自己の本分を呈露し來り、彼れ耆婆扁鵲及び無色界衆生と、無量劫來の宿執宿惡を、一併に掃蕩拂拭して、痕跡を止めしむること勿れ。若し然らずんば、足下亦是れ此の耆婆等と等しく、一心法界の影事に身を寄せて、依草依木の精靈となり、未來永劫、佛もなく法もなく、天もなく地もなく、君もなく父母もなく、子孫もなく、目もなく鼻もなく、口もなき一衆生となりて、一種の暗黒地獄に墮落すること、疑もなき事實なり。元來修道の人にして、かゝる淺ましき最後と成り果つるは、是れ皆修業中其の眞實心を取失ひ、邪定邪觀に入りて、此の禍を招くなり。是の故に返すくも、虚空界に周徧せる大自己ありて、我等各々其の分身にして、小自己なりとの見を爲す

勿れ。即今直下に窮めて、直下に見よ、此心不在内、不在外、不在中間、直見直窮、即得耆婆何處來、何處去、無色界何處住、足下爲老生、願下一轉語、但不許、足下從來、知解老生の最も悲しむ所は、足下自己の迷妄に因り、斯る魔事を感得して、之を書に筆し、世間多少の人を惑亂し、枉げて横禍に罹らしめ、此の佛種性を斷絶せしむること。足下宜しく此の書を熟讀し、精進の工夫あらんこと、是れ老生の足下に切望する所なり。足下若し反省の餘地なく、己見に住すとならば、老生の足下に對せる師友相益するの道は、茲に一絶するものと被思度。此の事面晤開陳と存候へ共、事の餘り深重なるが爲め、却て辯難論詰に益あらず。故に生死岸頭の一大公案として、卑懷を書きつづり、相呈し候也。

明治三十四年十一月一日

返すくも、道情を打失無之て、熱鐵丸を吞下する積りにて、御工夫有之。一回覺醒の時節到來する時は、不覺不知、呵々大笑の場合可有之候。左候へば神恩錄は、全く懺悔錄となりて、普徧の功德と相成可申候。

尺 牘 終

序 跋 二篇

川合清丸が著せる佛教演説の序

木のきれに目鼻をつけて、是れを佛なりと云ふは、さすがに物くるしき業なれば、惜しげなく、黄金の箔を塗りて、あたり輝くまでに、しつらひぬれば、いと尊げに見ゆれど。それも、こざかしき人の口の端にかけて、難なかん事は、おぼつか無し。況や年ふり、蟲はみ、形ちそこなはれて、怪しかるものを取りいて、これぞ我が家の寶なると云はゞ。大かた、人の笑ひ種ともなりぬべし。されば出家沙門の徒も、かゝる因果を悟りしにや。木佛金佛は、半文錢に賣りつぶし。黄卷赤軸も、反古紙にとり交せて、流布するは。末世末法のためしにして、禪門のいはゆる、破家散宅とは、是れ等の事をや云ふならむ。あはれ法の身も、衆生宿世の惡業にひかれ。六道の街に、たち吟ひて。いまは、はかなき姿となりぬ。目もなし、鼻もなし、恰も混沌の醜面皮に似たり。心あらん人は、右に尋ね、左に求めて、供養すれば。佛を救ふの功德によりて、無間地獄の苦報を免るべし。得庵居士しるす。

含雪兄自筆の歌卷の跋

此の卷は、含雪山縣老兄の曾て軍中にありて讀み出でられし歌どもを、みづから書して、何某ぬしに與へられしものなり。其の歌のよしあしは、いざ知らず。よみもて行くに、余が少壯のころ、軍に従ひし時の事ども、思ひいてられて、感いと深し。禪家の常談に、不風流、處也、風流と云ふ句あり、余容易にもへらく、是れ只機境轉換の句のみと。今此の卷をよみ終り、覺えず手を打て曰く、誠に此事あり、不風流の處、果して風流と。世の謂はゆる詩人歌よみなどいへる、風流三昧に入りすまさむ人々は、をりに觸れて、不風流殺風景の處に去りて、却て眞の風流を求むべきか。其はともあれ、總じて詩歌者流を云はず、四季折々の氣に感じ、雪月花鳥の情に通じ、無常轉變の上に、人を戀ひ、哀れを知るは、人と生れし誠の人にして、喜怒哀樂の情も、おのづから物と和らぐべし。されば吾が御國ぶりの、優にめてたきは、全く此の風流の道、歌心の徳とやいはむ。

年を経し、絲のみだれの苦しさ、衣のたては、綻びにけり。

伊勢武者は、みなひあどし、のよろひきて、宇治の綱代にかゝりける哉。

還幸と鳴くや、よしの、山がらす、かしらも白し、おもしろの世や。

これ等は、みなむかしの人の、軍陣の間にありて、一入をかしくよみいでしものなり。此の類を撰びとりて、云は、濱の眞砂の、よみつくすべくもあらず。さればにや、かりこもの亂れは、てたる世に。敵となり味方となりて。生死を争ふその中に、仁あり、義あり。人情のこまやかなる、中／＼に、治れる世に、ひたすら利名の途にいそがしく、友どちはらからさへも、うと／＼しきに似ず。是れ全く風流の道、歌心のあればなるべし。何某ぬし、此の卷の末に、一言書付けよと、切に乞はるゝまゝ、心にうかぶ一ふしをかくなむ。

序 跋 終

言 文 體

無 神 論 序

神のありやなしやといふ論の世にこちたく聞ゆるは論はてはえあらぬことありてなるべし。さるは世に神として崇むるか中にもいとあやしきが多くて。まことにさる神はあらずて人の造りまうけたるもあり。又世のたすけとなれる物の功を稱へて神となつけたるもありて。名こそ神とはいへ。その本質は種々なるを。そのけちめを深くおもはで。唯神といふ名にまどはされて。眞の理をさと見えぬ人の多かるは。いと歎はしきことにしあれば。心あらん人は。もたあるべきにもあらねば。こまやかに論らひて。世のまどひをとくべきことになむ。抑天地

萬物を七日のほどにつくりたりとかいふ事は。いみじき誤なるは。いふも更なれど。おほよそ人のならひとして。眼に見えぬ區域のことには。さるべき事なしと。おのが智をもて。おしはかり定めて。終に神はあらじとさへ論ひ。あるはおのが智の淺きより。みづからおもひはかりてなすべき事をさへ。唯神にまかせて。何事も神のまにくとおもふあり。こはともに。おもひひがめたるものにて。一はおのが智にほこりて。神のうへを論ひ。一はおのが智の乏しきより。みづからのうへをわすれたるなり。おのれとしこる神道の眞の理を説きあかして。世のまどひをとかんとて。をぢなき身をしも忘れていたつき。あるは東西の國々をめぐりて。人を教へみちびき。あるは學識ある人たちにまじらひて。眞の理をとひ明らかめ。などしてあるにつけて。近

き頃。鳥尾子爵のもとをとひて。そのかたの事どもをとひもし
語りもしつるに。無神論をあらはせりとて。見せられしかば。ま
づその名のいみじきにおどろきて。いかなる事をかするされ
たらんと讀み見れば。その論の高尙なるは更なり。誰しの人に
も。辨へやすくしるされし心しらびの深きに。いたくかまけぬ。
まして無神といふは。かの七日のほどに。天地萬物を造れりと
いふたぐひの神はなし。といふ論にしあれば。さるすぢの説に
まどはされがちなる今の世の人のためには。いとよき教なり
けりと。うれしさいはんかたなし。されば此書をよく見て。猶奥
深く心をおよぼさんには。道のまことを。たどりあやまつこと
もあらじ。とおもふまゝに。一ことしるしぬ。

明治二十年七月

千家尊福

眞正無神論一

人に思議心あれば。物に不思議がある。此不思議は。思議心のいまだ到らぬ分際
である。たとへば明暗の如く。明かなる處があれば。暗き處がある。此不思議が。
古往今來人間世界の一大妄想の窟窟となる。賢不肖となく。此妄想中に彷徨し
て。恣に妄見を起す。此妄見に相應して。一神多神の邪説をなす。一神多神。共に臆
想である。

思議心を勞し。不思議の分際に迷ふて。種々の夢を見る。其夢中に。種々の邪神が
現れ出來りて。威をなし。散々に驅使す。大根機の人は。これを悟り。己が思議心を
止め。不思議分際を。全く我が物にして。迥然として。獨脱す。下根劣機の徒は。死に
至るまで。其苦難にかゝる。今しばらく方便に。不思議分際を。分別開示して。これ
が解脱を教ふるである。

眼に色を見る。耳に聲を聞く。鼻に香を嗅ぐ。口に味を嘗む。身に冷煖堅軟の相を知
る。心には是非得失有無の見を起す。此中みづから疑ふて。決着すること能はざる

もの是れを不思議分際と名づく。世間の通途より云はば世の學術の進むにつれて、大に不思議分際を減却せしが如しといへど。未だこれが源底を拂つて、真理を安立するに至らぬ。故に人々一分の疑心より種々の妄想を誘起し、邪說縱横、却て一層の紛雜を加ふるである。蓋し天地の間において、人の思議し能はざるものは、最も人の靈性を埋没し、人をして蒙昧の中に墮落せしむるの起因となるのである。

此世界の明るき處は、思議分際である。此世界の暗き處は、不思議分際である。これを明暗兩境界と名づく。明境界は、所謂學術の所論である。天文地理、窮理分析等の學問は、皆此境界の事である。事物の變化、および關係を比量して知る、別に高尚の事はない、一を一に合して二となるの道理である。皆比量知と云ふものである。其高尚らしく見ゆるは、其關係が廣大なるのみである。其比量が、微細なるのみである。愚夫愚婦の、日常の思議、分別の位と、少しも違はぬ。言はゞ、目の測定である。天文は、日月星辰の運動、遠近の差別を測る。地理は、山川海陸の位置、高低を測る。其他の諸學、みな此類である。彼れと是れとを比量し

て、廣大にも至り、微細にも至るである。暗境界は、これに反して、比量知の分際にあらず、言はゞ絶對である。比量して、知ることが出来ぬゆゑに、其然る所以が知れぬ。されど事々物々の上に見えて、不思議である。考ふれば考ふるほど奇妙である。天命、鬼神、上帝等の臆想を、古來より、此間に爲す。西洋にても古來より、種々の學者が出て來りて論ずれども、未だ精しからぬ。哲學などの説も、大概は架空の論に歸す。されど此學は、鬼神、上帝等の造作に打任せぬが、一段高尚である。おひく詮索して、此の暗境界を、明るくする仕組である。人智を盡して、真理を知る、此所論の如きも、言はゞ哲學の類である。

要を取つて言はゞ、古來より、此暗境界に建立するものは、一神多神の兩説である。多神の説は、多くは、愚人の、鼻先の臆想である。一神の説は、妄想の深きものが、迷ひに迷ひを重さねたる臆想である。故に多神の説は、迷が浅い、假令悟らずとも、物に對して、恭敬の心を失はぬ、害が少ない。一神の説は、膏肓の病である、思ひ入れ迷ふて、固く執著す。一神を干になし、物に對して、輕慢の心を生ずるである。天竺に梵天あり、波羅門あり、西洋に天主教あり、回教あり、是等みな一神説であ

る。天地創造の神を建立して、人の魂靈も神が授與すると云ふ。古代より此妄想を作り來りて、各々其教法を立つ。人の靈性を味まし、智慧を失ふて、奇怪千萬の夢を見せることである。

果して神ありて、萬物を造作するや、若しくは然らずやと、初一心に疑ふ心を起すも、早く既に臆想である。何が故ぞ神ありと聞て、そのこれを疑ふ心の生ずるは他の妄想、臆想によりて、此の疑心を引き起さるゝに由る。他の妄想が縁となりて、此の妄想が生ずるである。況てや神あるべし、萬物は其の造作なるべしと念じて、一切を観察すれば、其の安排、布置、いかにも無心に成就せし物とも思はれぬ。依て此の臆想を増長して、いよゝゝ幽冥の中に神ありて、これが主宰となるに相違なしと、邪見を起す。是等の徒は、心に異常の感動を起こし、言はゞ氣病の類である。眞正の學者は、始めよりかゝる臆想をなさず。只々不思議分際に對ふて、是れ何の子細ぞと、平易に觀察を下すである。假令底を拂て、眞理を安立するに至らざるも、神ありとは臆想せぬ。若し神ありと認むるほどの智慧を生ずるに至れば、彼の不思議分際を、看破しての後なれば、神の立つ所の地位を奪ふ

である。

天地間の種々の不思議は、盡く神あるといふ證據にはならぬ。假令天地の廣大なる位置、安排、運動、造作、其妙を極めたるも、斯くありてこそ、天地の天地たる處である。人獸の靈活なる、草木の發育する、其妙は妙である。妙なれば、必ず神ありて主宰すると云ふ臆説は立たぬ。若し妙なれば、神ありとすれば、神は妙といふ事の異名までの事である。況てや此世界に、一として不妙な事はない。不妙な事がなければ、妙も不妙もない。さるに殊更に、妙じや、妙じやと云ふは、人間の妄想である。彼の一切萬物が、都合よく出來てあるは、當然の事である。不都合に出來ては、到底其の物の存在することが出來ぬ。たゞゝ不都合に、出來合せたるものもある。現在に人や禽獸が、片輪の子を生む、これが不都合の出來である。少々の不都合は、人なれば助けて育つ。餘り不都合の物は、これもあたはぬ。或は胎中にて死す、胎中にて死するに非ず、生れ得ぬである。禽獸などにては、盲目のものさへ、生育を遂げぬ。一切の事、推して知れ。されば現在するものは、大概不都合の出來はなし、能く場合に叶ひてある。天水桶に子々が生る、小池には

鱈や鮪が生る。鯨は生れぬ。必ず其の境に相應したるものが生る。其の生れ得る境に、生れたるものが相應するは、固よりの事である。相應せねば、其の境に生ぜぬ。是等を以て神のあると云ふ證據にはならぬ。

暗き處に聲あり、其の聲は人の聲にもあらず、禽獸の聲にも非ず、能く聞けば何か子細のある話のやうにも聞こゆ。人々打よりて種々の評を下し、遂に幽霊なり、怪物なりと沙汰す。勇氣あるもの、其の暗中に飛入りて捕へて見れば、一種の氣狂なりし。是れより大に人の疑心を解く。有神論をなすものも、皆この類である。己れが智解の及ばぬ處は、全く暗き處である。其の暗き處より、様々の奇妙不思議が現はる。能々、觀念、觀察するに、いかにも道理のある事のやうに思はる。是れ人の力にあらず、禽獸の力にもあらず、何物の力にも及ばぬ。されば神ありて、主宰、造作するに相違なしと思ふ。彼の幽霊怪物の説をなすことである。

不思議と云へば、人の聲を發するも不思議である。禽獸の啼くのも、不思議である。獨り人に非ず、禽獸にあらざる聲のみが、不思議では無い。只人と禽獸とは、常に目にも見え、耳に聞馴れて居るゆゑに、不思議と思はぬ。能々考へて見れば、

已か聲も不思議である。彼の暗中の怪物が、何か子細のある話をするが如くに聞ゆるは、人間の言葉に相違ない。さすれば彼の怪物は、人間である。なぜぞ、人間も元は人間の言葉を知らぬ、生れ出來つてこれを學ぶ。音に自然の意義はない、みな人間で作られたものである。故に此の地球上の國々にも、其の言葉は皆々違ふ。假令人間ならずとも、五十音の具足せるものは、學ぶことが出來るであらうなれど。此の地球上の動物にては、五十音の具足せるものは、人間のみである。無心の物の音も、人より解すれば、色々に解せらる。彼れ無心の物がみづから己が心を説くに非ず。此方より、其の聲につれて、心を起すである。禽獸の聲にも、一句一義は、たゞにはある、樂器の音にて、例して知れ。人間が聞く、と種々の意味に聞こゆる。人間より見ると、種々な意味に見ゆる。正しく人間の妄想である、人間の心から造り出だすのである。

角あるものは、牙がない。牙あるものは、角がない。羽翼あるものは、二足。羽翼なきものは、四足。乃至一切の動物を見るに、先は彼れが生活の爲に、都合よく出來てある。若し角あるものに、牙を付けたれば、彼の有神論の證據が破れて、無

神論に歸するか。左様の事はあるまい。動物の中には、角も牙も共に無きものがある。角も牙も共に無きもの、果報は、角あるもの、牙あるものに比して、其の生活が劣るまでである。これに準じて、角も牙も共にあるものは、角のみ牙のみの動物より、果報が勝れてあるまでである。此等の論は、有神論の證據にも、無神論の證據にもならぬ事である。

靈魂の事は、人々種々の妄想をなす事であるが、一類有神論を執するもの、説に、親より此の身體を分離するとき、靈魂も其の一部を分離すると思ふものあり。其の親も、其の親より分離し、漸々に天地の始め、人類の始めに逆上りて、眞最初の人は、神より此の靈魂を付與せしに相違ないと思ふ。是れは、暗き處より、漸々暗き處に入り込み、終に當途もなき處に墮落せしものである。第一人の靈魂は、親より分離せしものと云ふ事が、未だ落着せざるに、これを執じて、遂に箇様の處まで臆想を起こし。段々暗がりより、暗がりに入りて、天地の始めとやら、人類の始めとやらを妄想するである。よしんば、始祖一二人より、漸々に分離せしと、假定するも、古來より地球上に生れたる人の數は、億萬恒河沙數なるべければ。

其の死するや、靈魂斷滅して、跡方もなければ、それにて世話なし。若し生は親より分離し、死は一塊の靈魂ありて散失せぬものとなせば、天地の間、何の處にか、無量の幽靈あるべし。此の幽靈の一々始末には、さすがの神も、隨分難儀すべき事である。惡き幽靈は、地獄に落し、善き幽靈は、天堂にも上すべし。此等の差排も、隨分而倒なる次第である。たとへば、小兒が一枚の紙をさり散らして、無量の數となし。夫れを氣にして、狂ひ廻るに同じかるべし。されど、件の神は、まだしもよけれど、彼の幽靈どもは、途方に暮れ。寧ろ神が串戯に、我々を造り出せしゆゑ、箇様の迷惑ありと、小言を云ふなるべし。始がなく、終りがある、其の終りの始末は、困却の事である。或る小兒が、いたづらをせしに、其の母が小言を云ひければ、此の小兒大におこりて、箇様のいたづらものを、誰が生みしぞ。元の如くにして返しくれと、怒鳴り立てたる事ありし。思ひ出せばをかし。此等の説は、目のこ勘定の間違である。

近頃の新聞に、犬が子を生みしに、天窓だけが、人間の姿であつたと云ふ事である。想ふに、是れは、人間が犬と交合して、出來たもので、有うが、さりとて、淺問しき事て

ある。此の人は、生ながら畜生道に墮落せしものである。しかし異類のものと交合しては、大概は業力が違ふゆゑに、子は出来ぬ筈である。されど犬も人間も胎生のものであるから、惑業によりては感ぜぬとも云へぬ。人間の當然から云へば、犬に掛想する筈もない。犬に掛想するぐらゐならば、屹度子は感ぜぬものと云ふことは出来ぬ。若し筒様の怪しき子を生みしものとすれば、其の靈魂は、犬の靈魂と、人間の靈魂と、半々である。此等の靈魂の差排には、神も随分に入り入ることである。

動物の中において、人の禽獸に異なる所のものは、思議分別の心があるに由る。此の思議分別の心が迷ひともなり、悟りともなる。聖賢の人世に出て、正法を扶持し、邪見を斥け、人の靈性を護る。悟りとして、別に飛離れたる子細あるにあらず。妄想を遠離して、一切の事物を、正しく是非差排するの智慧を得るを云ふ。本末を失ひ、輕重を誤り、實を以て虚となし、虚を以て實となし、他に向て、吉凶禍福を求むる、これを迷ひと云ふ。思議分別の、邪路に入るがゆゑである。一念主となる處を誤れば、十念百念、乃至千萬念も、ことごとく誤る。尺の間違ひしものを

以て、物を尺すが如く、何くまでも誤ることである。

靈魂の沙汰は且らく置く、即今心の働を見よ、此の世間一切のものは、大概人間の果報で出来てある。何も神の世話のいらぬ事である。天に在りて日月星辰の運行して、終世光を放つ。これも人間の果報から見て、面白い事である。彼れ日月星辰が面白く見せるではない。光るから妙だといへば、光るものは、日月にも限らぬ、螢や腐木なども光る。動くから妙だと云へば、空氣が動いて風となる。縁によれば、土地も動く、珍らしからぬ事である。假令かゝる品物が、天に飾りてあるとするも、人間ならては見るものは無い。禽獸は知らぬ、彼が福分にあらず。穴中暗窟の中に、生を受くる虫などは、日光さへ、彼が福分でない。地に在て山川草木も、人間の果報である。山水の面白きも、つまり水に土である。人間が己が福分から面白く見取る。草木の花實も、同じことである。花がみづから自慢はせぬ、實がみづから自慢はせぬ。花實の手前より云へば、何の好悪もなく、出来た儘である。皆人間が己が福力にて建立して、妙とも美とも見るである。家屋器物乃至一切の珍寶の如き、皆人間の妄想で作る、人間の果報で感ずる。禽獸の果報

より看よ、金銀等の如き珍寶も、猫に小判である、土塊も同じとである。一切動物の果報を能々おもへば、面白き事である。雪隠の糞の中に生ぜし虫の爲には、糞が此上なき上味である、此上なき世界である。人が糞を放て、此の糞虫の世界を作る、彼れに上味を興へる。彼が爲の神である、造物者である。此の造物者も、糞を放てはならぬと云ふ時節が來らば、嘸かし困るであらう。されば糞を放るは、人間の業である。彼れが爲に世界を造り、上味を興へるとは云はれぬ。思を彼れに被せて、報を望むことは出来ぬ。なぜぞ、人は己れの業として、糞を放たまゝである。彼れの世界は、彼れが業より感ずる世界である。彼れの上味は、彼れの福分である。これによりて知れ、今此の人間世界の果報は、ことごとく、人間の福分より感ずる事である。神が世話して出来たものでない。悉く人間の心より作りなしたものである。

一類の者あり、曰く、人の種々に物を造作するに比して、此天地は、神が造るに相違ない。造る物がなければ、造られたる物の無き筈なりと。此等は眞に淺薄なる説である、第一人が種々の物を造作すると見るは、大に間違である。其作るやう

に見ゆるは、人の欲に任せて、思ふやうに形を變ずるまでである。其物より云へば、十の八九、破壊せし有様である。木を切り、石を碎き、土を焼きなどして、家屋器物となす、本の形より云へば、破壊である。人の欲に相應して、造作せしやうに見ゆるである。其の家屋、器物の上より見れば、家屋、器物と云ふ品物が出来てあるに非ず。同じ人間よりこれを見て、家屋、器物とおもふは、人間の欲情が同じきによる。禽獸などが見れば、出来ても居ぬ、破れても居ぬ。在の儘の形である、本の儘の木や竹である。此等を能々考合せて見よ、人間は人間の福力にて、種々の物を建立する。大概其物に實躰はない、實相はない。此方の妄想にて見る時、種々の形が出来て見ゆる。同じく是れ鐵なり、海に浮べると船となる、沈むれば礎となる。礎が浮くと、礎が破る。船が沈むと、船が破る。皆人間の欲に相應したるとき、出来たやうに見ゆるである、一切の物事推して知れ。されば人間が物を造るに比して、天地萬物の現在するを、神が造作せしと云ふことはならぬ。なぜぞ、人間が物を造りし例がなきゆゑに、造らねば出来ぬと云ふ道理が立たぬ。此等の説は、有神論者の妄想である。愚人を誑かす説である。

又一類の者が妄想して云ふ。神は幽冥の主宰なれば一切の處に居て、一切の事を知るの大智大能あり。物としてこれが恩德を受けざるはなし。只知らぬものが大恩德に背きて種々の邪見を起すと。此説をなすものは大分妄想が増長して、箇様の氣病に取付れしものである。なぜぞ此者に對して其の證據はいかにと問へば必ず云はん。天地萬物が證據である、別に證據としては無い。神なれば、ず箇様の大智大能を具するに相違なし。人の知らざる處を知り、人の能せざる處を能し。善を見ては喜び、惡を見ては惡み、是に與して非を斥く。靈妙幽玄にして、人間の議り知る所にあらずと。又汝何を以てこれを知ると問へば必ず云はん。我れ心に感じてこれを知ると。此心に感じて知ると云ふは、直に氣病と診斷すべき證據である。此の臆説を、子細に分拆して見よ。神があるなら、其の有る所以が知れねばならぬ。天地萬物があるとして、これが神のある證據にはならぬ。若し知れねば、幽冥の主宰だと云ふ説は立たぬ。幽冥の主宰だと云ふ説が立たない時は、此説はつまり空論である、妄説である。人間の議り知る處に非ずと云へば、人間にして知るべき道理は無い。故に我れ心に感じてこれを

知ると云ふ。尤も此説をなす者は、かゝる氣病に取付かれしものゆゑ、條理外に我れ獨りこれを會得せりと思ふである。或る臆病の者が、暗がりには歩行て墓を踏つぶし、圖らざる罪づくりせり。さぞ墓が恨むて有らうと、これを思ひつゞけて、家にかへり寐んとす。偶々睡を催せば、大の墓が現れ來て、恨みの眼を見張り、兩手をひろげて、櫻み付かんとす。これに驚かされて、終夜睡らず。夜の明くるを待かね、件の處に往きて見れば、墓にはあらで、腐れたる瓜が踏潰してありし。此者大に安堵して、一念の迷ひの恐ろしき事を悟りしとかや。前説の氣病も、なほ此の墓のたぐひである。一念神があるに相違ない、我が知らぬ處を知て居るに相違ない、怖き事である。いかにもして此神の味方となりて、安心に此世を過したいと、迷ひに迷ひて、終にかゝる氣病に、取付かれし者である。いかにも感じて居る。妄に感じて居る。

昔天竺にて、佛の御弟子が、梵天外道を調伏せん爲にとて、梵天を祭りし宮に入り、梵天の像に坐して、托鉢の食を食て居りし。天竺の風俗にて、食を不淨のものとす。其時梵天外道の坊主が出來りて、これを見て大に怒り。汝何ぞ無禮なる

や、梵天王の尊像を穢すや、疾く去れ、速に去れ。去らざれば、其分にしては置かぬと、怒鳴つけければ。佛弟子徐に説て曰く、汝が教法の説を聞くに。梵天は、一切造化の主宰にして、大智大能を具し、一切の處に居て、一切の事を知ると、果して然るやと。梵天外道對て曰く、然り。梵天王は、大智大能あり、一切の處に徧じて、一切の事を知ると。佛弟子曰く、然らば此像は木像なれども、此木像のある處、即ち梵天王の居る處なり。我れ佛弟子なれども、我れの居る處、即ち梵天王の居る處なり。此食の在る處も、なほ梵天王の居る處なり。今梵天王の上に、梵天王を坐せしめ、梵天の食を食す、何ぞ無禮と云ふや、何ぞ梵天を穢すと云ふやと。外道閉口して、黙然たりしと云ふ。昔よりかゝる妄説をなせしを知るべし。

總じて人間の業力は、手強きものにて。其心に憶念すると、種々様々の物が現はる。狐狸が誰かすに相違ないと憶念すると、おのづと怖くなる。怖くなるほど、臆念の力が募る。簡様なる時、つひ狐狸が誰かす。西洋諸國にても、昔の狐狸は、人を誰かせしよしなれども。今時の狐狸は、人を誰かすことは出来ぬ。昔の狐狸も、今の狐狸も、狐狸に相違はない。段々世の中が開けて、人が賢くなり、狐狸は

畜生である、人間を誰かすほどの力も智慧もないと思ひ切て。簡様の怪しき臆念を起さぬによりて、狐狸も致方がない。日本にても、或る山村にて、狐が動もすると誰かして、人々難儀をなせしに。或る剛氣のものが云ふに、狐の肉を食ふ時は、狐が誰かさぬものなりと。因て人々狐を狩りて食ひしに、案に違はず、狐が誰かさぬやうになりし。それより子供が生るゝごとに、必ず狐を取りて、食はしむるを、常例となすと云ふ。是れも至らぬ事なれど、寧ろ誰かさるゝより遙によし。併し是等は狐狸の事なれば、彼れも心のあるものゆゑ。時には人の臆念に感じ、誰かすこともありとしてよけれど。近來流行するつくりとか云ふものは、三本の竹の上に板を載せ、三人集りて、其上に手を載せ念ずると。此竹と板とが、人の云ふを聞きわけて、動くと言ふことである。簡様の心なき竹木さへ、人間の臆念の力で、動きいだす。動き出すといよ／＼信ず。信ずるといよ／＼念力が強まる、尤て獨角力を取るやうなものである。此れに例して、人間の念力の手強きことを知れ。己れの念力で、己れを誰かす。これを愚人は、不思議と思ふてある。感通など、おもふてある。

又一類の者が斯く思ふ神の有無は、つまり詮索の出来ぬ事である。無き證據も立つれば立つ、有る證據も立つれば立つ。何れを非とし、いづれを是とすることもならぬ。太古野蠻の時より、今日文明開化の世にいたるまで、人間の大概は神を祭り神を崇む。一神ならざれば多神、甚しきは禽獸、木石をも神とす。されば神を立つるは、人間の性情である。若し人間の性情とすれば、多神より寧ろ一神説を以て勝れりとすと斯うである。此の臆説、一應は通人めきて、面白きやうなれど、道理に叶はぬことである。成程、太古より今日の世に至るまで、一神多神種々の神を祭りて、これを信ずることはある。即ち此の一大妄想が、人間の迷惑である。人類の災厄である。此の災厄を除き、人をして安穩ならしむるが、聖賢の事業である。此の迷惑を斷じて、人をして正理に歸せしむるが、聖賢の心願である。此の迷惑、此の災厄を、其儘に差置くならば、一神多神の説も、入らぬ事である。人々の考へに、打任せ置て可なり。學問も入らぬ事である。教法も入らぬ事である。道理も入らぬ事である。さすがに箇様に打捨て、置くことは出来ぬ、そこで多神よりは、一神がよいとか、一神説よりは、多神説がよいとか云ふ説も起る。成

るべく人の迷惑の少なきやう、成るべく人の災厄を免かるゝやうにとの心願である。一回この心願が動き出だすと、直に此の人間世界に等流し來りて、聖賢の心願となり來る。學問、教法、種々の道理を、是非、分別することも出来る。取りも直さず、是れが聖賢の事業と云ふものである。箇様に説き來ると、邪見の徒は、なほ執着して、斯く云ふ。神だけは、古から今にいたるまで、有無が知れぬによりて、論ぜぬかよいと斯うである。若し古から今にいたるまで、有無が知れぬによりて、論ぜぬかよいと云へば、一神多神の是非、正邪も、知れぬ事である。一神多神のいづれか正、いづれか邪と云ふことが、知れぬとすれば、寧ろ一神説がよいと云ふも、道理のない事である。道理がなければ、寧ろ人々の妄想に打任せ、置くべき事である。教法も入らぬ、學問も入らぬ。打任せるがよいの、打任せぬがよいのと云ふ沙汰も入らぬ。

或る者は、なほ執じて云ふ、一神多神ともに、有無の證據は無い。なれども多神説より、一神説が高尙である。眞らしく思はる、其害も幾分か少ない方である。因て一神説を立つるがよいと。此の臆説も、前説に似て、少し浮氣の沙汰である。神

の有無も分らぬに、勝手に寐せ起しは出来ぬ。眞實が多神なれば、一神説と云ふ人間の妄想を以て、眞實の神を打つぶす道理である。眞實一神なれば、多神と云ふ人間の妄想を以て、眞實の神を打潰す道理である。いまだ何れが眞實と云ふ事が知れねば、妄りに差排することは出来ぬ。共に眞實ならざれば、其の眞實なるものを發明して一神多神の臆想を打破るべきである。眞實の道理もなきに、一神説を高尙とするは、其者の癖である。通論では無い。なほ多神説を執るものが、一神説より多神説が高尙なりと思ふに、差別はない。其害が少ないと云ふも同じことである。一神説より戦争も出来る、人の國を亡ぼした事もある。茲にいたれば、寧ろ一神説の方が、炎害が深ひ。箇様の辯説は、何くまでも辯説である。道理に叶はぬ事である。

人の禽獸に異なる處は、此の思議心がある故である。此の思議心があれば、是非得失、有無正邪を分別する。迷ふ者は、此の是非に迷ふ、此の得失に迷ふ、此の有無に迷ふ、此の正邪に迷ふ、つまり分別が正しからぬ。分別が正しからざれば、思議分際の事物も、以上眞暗である。況てや不思議分際は、遠くして遠し、夢にも見ざる

所である。されば不思議分際を分別開示する以前に、先づ思議分際を正さねばならぬ。思議分際を正さんとすれば、第一人間の妄想、臆測を打破らねばならぬ。此の妄想、臆測は、目を見張りて、夢を見ると同じ事である。夢に分別するは、思議分際、不思議分際の差別もなく、九ごかしに夢である。論ずるに足らぬ。されば此の大夢を、いかゞして覺すかと云へば、別に六かき事は無い、高が夢である、少しく大聲に怒鳴り付れば、覺るに相違ない、試みに呼起して見よ。

目に見ぬ事を見たらやうに思ふ。耳に聞ぬ事を聞たらやうにおもふ。鼻に嗅ぬ事を嗅だやうに思ふ。口に味はぬ事を味ふたらやうに思ふ。身に觸れぬ事を觸たやうにおもふ。乃至有るものを無いやうに思ふ。無きものを有るやうに思ふ。是を非のやうにおもふ。非を是のやうに思ふ。此やうに思ふのが、積りつもありて、種々様々の妄想を起し、臆測を爲す。みづから己が心を味まして知らぬ。目に見ぬ事を見たらやうに説く。耳に聞かぬ事を聞たらやうに説く。鼻に嗅ぬ事を嗅だやうに説く。口に味はぬ事を味ふたらやうに説く。身に觸れぬ事を觸れたやうに説く。乃至有るものを無きやうに説く。無きものを有るやうに説く。是を

非のやうに説く、非を是のやうに説く。此やうに説く言語文字の世中につもりつもありて。種々の邪説となり來りて、人間を惑亂す。彼のやうに思ふ心と、此のやうに説く説とが、内因、外縁となり。因縁、感應して、人間世界の昏睡病となる。此の病原を尋ねれば、分別がはつきりせぬから起る。分別がはつきりせぬは、不正直から起る。苟くも正直の心があれば、胡亂の事は言はぬ、胡亂の事は思はぬ。詩三百篇、思無邪である。左様な人は、知らぬものは、知らぬとする。解らぬものは、解からぬとする。強て妄想臆測はせぬ、妄想臆測せぬによりて、智慧が正しく起る。此の正智慧を以て、是非を正して見る、正邪を判じて見る。一切世界に顯現する事物に徴して、真理のある處を知る。聖賢の遺經を玩味して、道德の歸する處を知る。世間の虚妄の言説を排して、人の靈性を護る。天地間に箇様の人も古から随分ある。一神、多神の妄説、妄見を起すものばかりでは無い。鼻先の料簡で、此の人間の事理を差排し、是非を誤り、相帥ゐて、暗がりから暗がりに墮つるものは、氣の毒な事である。憐むべき事である。

多神説も種々あるが、中に就て禽獸草木を神として、これを信じ、これを祭るは、大

なる誤りである。狐狸が長壽したとて、これが神にはならぬ。草木が老朽たると、これが神にはならぬ。長壽した狐狸も、やはり狐狸である。老朽た草木も、やはり草木である。これを信ずるは、愚である。これを祭るは、迷ひである。是等は言ふに足らぬ事であるが、其中理に於いて許すべき多神説がある。聖人もこれを信じ、王者もこれを祭る。天地の徳を尊崇して、天神地祇とする。山川の徳を尊崇して、山靈河伯とする。田園五穀の徳を尊崇して、社稷とする。苟くも生民の利をなすものは、其徳を尊崇して、これを祭る。左傳に、民は神の主なりとある、民は主人である。此の主人の福利を助け護るものが神である。且らく神と名づくれど、別に靈妙不思議があるては無い。只其徳を尊崇した名である。なぜこれを尊崇するぞと云へば、人を尊崇する趣である。唯に聖人王者が、人を尊崇する爲のみでは無い。人々相互に尊崇する趣である。たとへば親を尊崇する者は、其親死して後も、其の取用ひし器物までも尊崇する。其の使役せし臣僕までも尊崇する。其親の福利を助け護りし功德を思ふ。古に終を慎み遠を追へば、民の徳厚に歸すとある。人間の智慧で、少し考へて見ると、分명한事である。

秦の始皇帝は松に太夫の位を授けたと云ふ事がある、是等は僻事である。已れ獨りを尊崇するの餘りに、箇様の僻事が出来る。阿房宮を建つるとして、蜀山を伐り盡したと云ふ。生民の利を思はぬから起つた事である。此の生民の福利を思はねば、天地も尊崇するに及ばぬ。山川も尊崇するに及ばぬ。社稷も尊崇するに及ばぬ。天地山川社稷は、生民福利の淵藪である。其徳が直に一切生民の福利である。其人を愛して、屋上の鳥にまで及ぶ、人の誠實心である。此等は彼の造物者などの空論では無い、道理のある事である。又人鬼と云ふ説がある、是れも道理のある事である。聖人賢人が世に生れ出て、此人の爲に、大功德をなす。英勇豪傑が世に生れ出て、此人の爲に、大事業を起す。一國を利するものあり、一郡を利するものあり、一村を利するものあり。一家を利するものあり。最下の愚夫愚婦も、其の子孫を利する。利に厚薄、近久はあれど、其力に應じ、其分に應じて、此人の爲に、現在、將來を利するの徳は、同じ事である。今日、現今に存在して、人の目に見え、人の耳に聞き得べき、人間世界の福利は、悉く祖先が、勞苦經營せし餘分である、此の身体血肉も、祖先の身体血肉の餘分である。此等は空論で

は無い、實々其通りである。人間の智慧で分別すれば、分明である。茲に由て知れ、人鬼を祭るは、當然の事である。一國に功德あるものは、一國の祭を受く。一郡一村に功德あるものは、一郡一村の祭を受く。家門に功德あるものは、家門の祭を受く。且らく人鬼と名づくれども、其實は世に亡き人を云ふ、亡者の事である。邪見の徒は、亡者として、幽霊が空中をぶら付て居て、これを祭らざれば、飢餓するといふ事はあるまいと思ふ。是れは至て淺薄な考である。なぜぞ、亡者として、現に此世に生れて居たには、相違ない、見た人もあるに相違ない。今日、現今、其の亡者たちの仕遣したる事業も、あるに相違ない。されば、此の天地間に存在せし證據は、十分ある。其の證據が十分あれば、死して後ち、其の靈魂が盡滅して、無に歸すると云ふ證據がなくば、此説は立たぬ。盡滅するて有らうと思ふのは、例のあらう説である。迷と云ふものである、不正直の心底である。此の人鬼の説は、彼の造物主宰神などの説とは違ふ。現に存在せしに相違ない證據は、分明である。しかし、此の亡者の靈魂有無の説は、一切萬物の生滅する所以の理を考究して、判断すべき事なれば、今は且らくこれを措きて、此の亡者を祭るは、直に

斯く分別するがよい。此の亡者と此の功德事業と一致である。此の功德事業と此の人類と一致である。なぜぞ此の亡者生前の一念心が其儘此の功德事業である。此の功德事業によりて我々の享受する福利は我々の身體および心念と一致である。此外に人間の徳はない。譬へば家を造るが如し其の能造者の一念が思議分別となり来る。其の思議分別せし通りに所造の家屋が現はる。言はゞ心の影である。此の亡者の一念の影が現在人間の心を引起す縁となる。現在人間の心は此の亡者の一念の影である。影が影を寫し出す全く一致である。されば亡者の生前の種々の功德事業が何くまでも亡者の一念心のある所である。現在人間の心を生起する因縁である福利である身躰である。先づ斯うである。斯く信じかく祭るによりて人鬼が安慰する。其の功德が明赫である其の福利が長久する。現在將來に續いて人間の徳が全たい。子細に思へば分明な事である。

此の世間は人間である人と人と物と人との間に其の道徳が成り立つ。人を離れ物を離れては道徳も無い。此徳天地と合す。古に亘り今に亘りて變易ない。

其至れるに及ては禽獸草木にまで及ぶこれを一視同仁と云ふ。一視同仁として同じやうに見て慈愛する義ては無い。如上の趣を能々考へて看よ。天地の徳が直に人間の徳である。萬物の徳が直に人間の徳である。鑄型に入れて造つたやうなものである。寒來れば衣を重ぬこれが其儘徳である。福分である。暑來れば衣を脱すこれが其儘徳である。福分である。春は耕し秋は收む夜が明くれば起る日が没すれば休む。花を見て樂み實を捨て食ふ此中に人間の道がある。用を節して物を愛す其福分は盡ぬことである。これをすつくり我が物にして居るが聖人王者である。儒者が儒道は仁義である禮樂であると主張すれど仁義禮樂は節目である。人々をして如上の徳に相應して心を起さしむる方便である。此の道理を解せずして仁義仁義と云ふは不覺である。不覺なるによりて儒者同士で種々口論が起る。そこで莊子が盜跖にも仁義ありと云ふ横鎗を入れて儒者を困らせる。儒者が腹を立て、異端である左道であるといへど。莊子は高く吹て居る畢竟つまらぬ口論である。

如上の道理を解せぬ者からこれを見れば天地山河も一塊の芥である、田園樹林

も、沙磧荆棘である。古人今人も、犬猫同様である。兄弟朋友も、南蠻北狄である。己が情欲に任せて事を行じ、愛すれば物を濫り、憎めば物を賊ふ。獸の荒れたるが如く、縁に觸るものは、殘害を被ふる。其身の果は、狂ひ死に死ぬ、人と生れ出た福分はない。されば天地萬物の徳は、直に人間の徳と知らねばならぬ。此の天地萬物の徳を尊崇するは、我が徳を護ると知らねばならぬ。茲に至りて、天地人の三才一致である。能所の差排である。我が心に叶はぬとて、所縁に憎み怨みの心を生ずるは、其人の福分の盡る時節である。侮り輕んずるは、其人の福分の盡る時節である。これを天神怒り、地祇悲み、人鬼哭すと云ふ。又鬼神と云ふことがある。古人が明にしては人物となる、幽にしては鬼神となると云ひし。明とは、目に見えてあることを云ふ、人も物も、目に見えてあるから、これを明にしては人物と云ふ。幽とは、かすかと訓む、目に見えぬことである。目には見えぬ、物に付き添ひ、人に付き添ひて、其影が顯はるゝ。其影に付て、人が知るに因て、かすかである、これを幽にしては鬼神と云ふ。此の鬼神の事は、怪力亂神と云ふて、人の迷より生ずることが多い。中に就て、聖賢の人も、これを信ず

る一理がある。易に、精氣物を爲し、遊魂變を爲す、是故に鬼神の情狀を知るとある。中庸に、鬼神の徳たる、其れ盛んなるかな、これを視て見えず、これを聽て聞えず、物に體して遺すべからずとある。又國家將に興らんとす、必ず禎祥あり、國家將に亡びんとす、必ず妖孽ありとある。是等は皆聖賢の人が鬼神を信ぜし證據である。聖賢の人が、何とて目にも見えぬ、耳にも聞えぬ事を信ずるとなれば、所謂不思議分際を、尤こかしに鬼神と云ふ異名を付けて、これを觀察したものである。今此等の聖賢が、此の不思議分際を觀察して、鬼神の有様を悟つたか、悟らぬかは知らぬが、其の言句に付て、これを判断すると、斯うである。精氣物をなすと云ふは、人にもあれ、物にもあれ、目に見える物は、精氣の凝り結ばれたものである。精氣が凝り結ばると、物となる。精氣の解は、除ほど六かしいが、精とは、くはしと訓むし、らげるとも訓む、そりすぐれたと云ふ。氣とは、目に見えぬ、其働きの著しきものを云ふ。人にて云へば、勇氣、氣力、氣分などと云ふことがある。草木にて言へば、生氣が衰へる、生氣が盛んになるなど云ふ。天地で言へば、春は春の氣がある、夏は夏の氣がある、秋は秋の氣がある、空氣、電氣、暖氣等の名もある。

此等の名目に類して知れ。扱天地の精氣が次第に凝り結ばれて物をなす。そこで物には、一々天地の精氣を含有して、分際に相應する。其の精氣が、追々退減すると物が衰へる。此の天と云ふは、青雲の上を云ふてない。地と云ふも、足下を云ふて無い。此の世界を丸こかしに言ふ言葉である。且らく言葉が無いに由りて、其の上を覆ひ、其の下に塞がりきるもの、即ち天地の名をかるである。箇様に天地の精氣が凝り結ばれて、人物をなすが、此の精氣の物に寓するは、眞に條理がありて、一定したものである。春去り夏來り、夏去り秋來り、秋去り冬來り、此の條理一定である。人が生ると、赤子より段々成長して、四十五より、又段々老衰する此の條理一定である。禽獸草木より、微細の物に至るまで、物として條理の一定せざるものはない。箇様に條理一定の上に異變を示す事がある、これを遊魂變を爲すと云ふ。遊とは、あそぶと訓む、ぶらぶらづく意味である、魂とは、たましひと訓む、こゝろとも訓む。精氣結ばれて物をなす、其物の上に現はれて變をなすことである。今人の心も魂である、眠らんと欲すれども、眠り得られぬは、魂が生じてあるによる。此魂は精氣より生ずるものかと云へば、左にあらず。

精氣衰へても魂はます／＼增長することがある。重き病人などが、少しの事にも驚き、平生に思はぬ氣にせぬ事までも思ふ。其末だ物に寓せぬ以前は知らず、物に寓せし所より見れば、此魂は、精氣の生ずる所では無い。おのづから天地の中にある此魂か、幽冥にぶらつき居て、種々の變をなすと云ふ事である。迷いの魂である。迷ふてぶら／＼とする中、物に感じて變をなす。これを能々考へ得れば、鬼神の情狀が知れると云ふことである。孔子は斯く言はれた事がある、操ればすなはち存し、舍つれば即ち亡す、出入時なく、其郷を知ることなきは、唯心の謂ひかと。されば鬼神は、一種心の異名と悟られたものと見える。中庸の、鬼神の徳たる、其れ盛んなるかな、これを視て見えず、これを聴て聞えず、物に體して遺すべからずとあるも、全く此の趣である。淺薄の了簡から云ふと、心は我が心だから直に知れたことである。目にも見えぬ、耳にも聞えぬなど、大そうな事を言ふほどのことでは無い。況して鬼神などいはい、以の外の事じやと思ふ。よく考へて見よ、眼ありて物を見るが心を見る眼は無い。耳がありて聲を聞くが、心を聞く耳は無い。眼耳鼻口は、外境界に對して機能が有るが、内心に對しては、所

詮はない。鏡の裏を見るやうなものである。自心と云へば直に我が物のやうなれど、我が思ふやうにはならぬ。みづから自心の有様を知らうと思ても知れぬ。偶々此れは我が心じやと思ふことは心の辯である。其辯を除いては、外の境界によりておこる思の外は無い。一口に言へば念である。此念此思は、定まつた姿は無い。念々に生滅して、跡方もなきものである。全く心の作用である。此の作用を起す心の全體は、いかにと云ふに、自ら知らぬ目に見えぬ耳に聞えぬ。されど物に體して遺すべからずである。其徳は目の前に顯はれて、盛んなるかまである。我も知らぬ、人も知らぬ、物も知らぬ、これを知れば己に人と云ふ名である。我と云ふ名である、物と云ふ名である、其人と我と物とに體してある、通じてある、これを鬼神と云ふ。隱顯出沒はかり知られぬ、心と名づけしも、假の名である。魂と名づけしも、假の名である。鬼神と名づけしも、假の名である。且らく方便に名を立つるまでである。名を取除けても、此事は取除くことは出来ぬ、これを不思議と云ふ。

天地の間に、此不思議がある。物に現はれて、精氣となる。人に現はれて、神魂と

なる。此神魂が、歸着の處を知らぬを、遊魂と云ふ。ぶら／＼と飛び歩行て、物に感じて變をなす。明眼の者よりこれを見れば、此世間に、遊魂變を爲し、妖をなし、孽をなすも、ある事である。人間は至治を望み、安寧を望むが、當然である。時に遊魂變をなして亂が起る。此亂も、一朝一夕にしては起らぬ。其起る前に、人間が何となく苦を感ずる、不平を懷く。此苦此不平、共に貧富、強弱、智愚の別なく、盡く感じ、盡く懷く。天も昔に變らざれど、此事がある。地も昔に變らざれど、此事がある。山川、草木も、昔に變らざれど、此事がある。此事あれば、必ず流言が起る。歌謠がはやる。此根もなき、流言を、愚者は信じ、智者は半ば疑ひ、終に種々の妖孽をも目に見る。人間總體に斯くの如き時は、自ら天地も感じて、天變地異も起る道理である。是が所謂、遊魂變をなして、條理を亂る姿である。人間の大病である。此病氣が段々に増長すると、上に君王も無く、下に臣民もなく、倫理亡びて、親もなく、子もなし。是が遊魂化して、惡鬼となる有様である。蘇秦、張儀の辯、孔子、墨子の智を以て、一人一人に諭したとて、箇様の事は出来ぬ。人々自ら歸する處があり、安ずる處がありて、容易に動かぬものである。一回動き出すと、辯を以て

説かず、智を以て誘はずとも、俄然として起り、忽然として變ず。人々其歸する所を忘れ、其安する所を去て、亂に趣く。是を人に惡徳あれば、惡鬼便を得て、其惡を助け、人に吉徳あれば善神來り集て、其善を助くと云ふ。簡様な事も、無しとは言はれぬ。畢竟人間の妄想、妄念より起る事であるが、此妄想、妄念の起るのも、奇妙不思議である。一概の理窟は言はれぬ事である。されど鬼神論よりして種々の説が出來りて、日月宿曜方位の吉凶禍福を説くに至る。甚しきは、人獸の魂魄が祟をなすなど、此等は正論では無い。しかし善人も、處によりては、危難に遇ふ事がある。惡人も、時によりては、快樂を受る事もある。それ等を強て差排すれば、宿曜方位の説も起ることである。

我が日本の神道は、多神であるが、是れは一段面白い事である。天地造花の順序を立て、これを天神七代とす。人間の事理を差排して、これを地神五代とす。此の天神七代、地神五代の説は、種々差排の仕方もあるべきなれど、畢竟斯うである。天地の初めは混沌である、混沌とは、なり形の定まらぬ姿である。たとへば、泥海の深いとも、浅いとも、穢いとも、奇麗なとも、見分けの付かぬ如し。其中清く

して、輕きものが、上て天となる。濁て、重きものが、下て地となる。斯く天地が分れて、始めて生ずるもの、其狀、莖牙の如し。乃ち化して神となる、其名を國常立尊又の名を天御中主神と云ふ。それより次々に、神々が現はる、其の七代目を、諸冊の二神と云ふ、面白き事である。天地の初めは、混沌である、人の議り知ることの出來ぬ境界である。此の境界が、天地と判かるゝと、始めて人が分別することが出来ぬ。兎に角、上に現はるゝが天である、下に現はるゝが地である。其中に一物が生ずる、狀、莖牙の如しである。水中に水こけの出來るやうなものである。此の莖牙のやうなものが、直に天の主ともなる、地の主ともなる。天地の主宰とも、人間の主宰ともなるほどの徳が、此の一物わづかに生ずる時、已に定まつて居る。其次の諸神は、其の一物が、段々に成熟して、成立つ順序である。而して、惶根尊に至て、全く具足す。而とは、なり形である、なりかたちか、満足すると云ふことである。惶根とは、威光が生ずると云ふ事である。此の威光とは、神徳である。神とは、自然に發達してある不思議の名である。これまでは、獨化である、諸冊の二神にいたりて、獨化にして、偶生である。伊弉諾伊弉冊とは、いざなひいざなふの

義である。因縁して萬物を生ずることである。此の因と彼の縁と、因縁相合するに非ざれば萬物は生ぜぬ。佛經にも同業吸引して因縁をなす。此の因縁を以て衆生相續すとある。要を取てこれを言へば、天地自然の法である、其法の現はるゝ處に其徳あり。中々人間の思慮を以て、取捨安排すべき分際にあらず。看よ、人の此世に生ずる、父母一念の業感で以て、此生を招く。其初め胎内に托生するとき、天地未分である。父と云ふべからず、母と云ふべからず、子と云ふべからず、己に父と分れ、母と分れて、狀犛牙の如してある。假令狀犛牙の如くなるも、己に既に天地の主宰となる徳がある、人間の主宰となる徳がある。此神が天御中主である、國常立である。獨化の徳である。他の造作ではない、自の作畧ては無い、天然自然の徳である。人々此徳を含てある、此徳がなければ、生もない、身軀もない、面白き事である。箇様に神徳顯現して、常に一切の因となり縁となり。其因のある處に、必ず其縁を見る。其縁の在る處に、隨逐して離れ得ぬ。これを偶生と云ふ。姑らく邪見を捨て、正直に憶念して見よ。眼の前に見えてある、これを不思議と名づく。正念を以て見取る者は、此の不思議が、分明に解し得らる。

彼の一神説、造化説の如き、天地萬物を神が手づくねに造ると云ふやうな淺薄の説ではない。早く其の正邪を知らんと欲せば、我が神道の所談は、生るゝと云ひ、生むと云ふてある。神が勝手に造ると云ふては無い。此處が第一正邪の分かれてある、邪見、正見の分かれてある。古聖人が人を憐みて、正見より説き置かれた事である。是故に我が天皇、世々此の神徳を尊崇遊ばして、國土、人民を撫育したまふ。此の人民は、神々の生みたまひし、大事の寶である。神人感應して、悠久に此徳が顯赫してある、眞に面白き事である。支那古聖人の趣と、其理は易ること無し。

眞正無神論 二

要を取てこれを言へば、一神多神種々の言語は、悉く人間一大妄想より生起することである。其中一神説は、立たぬ理窟を立て、迷ひに迷ひたる臆想である。多神説は、聖人賢人が、理によりて立置れし事もあれど、概して云へば、凡見、凡智にて、不思議分際より顯現し來るまに、名目を下して、是れも神じや、其れも神じ

や、鬼神じやと、臆想せしまゝの事である。此の凡見凡智を取るに非ざれども、此の凡人が凡見凡智にて感應せし事が正直である。不思議分際を論明する、よい證據である。此の證據を取除いて、強て別に不思議が有ると言ふは、所謂人間の感覺することに非ざれば、以上空論に歸す。常に空論に歸するのみに非ず、不思議分際と云ふ名目も、思議分際と云ふ名目も、凡夫の凡慮から起ること。假令此外に深き子細があるも、つまり人間の關係す可き事に非ず。大海の底を探つたら、何か有らう。天地の外を尋ねたら、何か有らうと。都表もなき臆想の外は、畢竟じてなき事である。其れ等提空の妄想は、所論の外として、平たく此の不思議分際に注目して見取るがよい。箇様に神と名づけ、鬼と名づけ、魂と名づけ、心と名づけ、種々薩陀に名目はあれど、等しく不思議分際より現はるゝ異名なれば、此の不思議の本體は、果していかなるもの歟と、縦に考へ横に考へて、其の合點の行かぬ所が、所謂不思議分際である。これを一大疑團と云ふ。此の一大疑團が起らねば、迷ひは覺めぬ。迷ひが覺ねば、正しき智慧は起らぬ。正しき智慧が起らねば、不思議分際の事も、以上方角の違ふ事である。元來妄想が種々様々

なるによりて、理窟も種々様々に思へば、思はるゝものである。さりとして妄に比量比知の見を起して、万物を取集めて、理窟を並べるも、不是じや。幽靈、怪物、鬼神、上帝、天狗などを持出して、不思議がるも、不是じや。假令王者、聖人の立て置きし事は、一理あるにもせよ、真正の眼より見るときは、畢竟じて、妄想の差排と云ふものである。且らく正理に隨順し、道德に合するゆゑ、人間世界にては、許すべきである。遊魂を収めて、歸着を示す、是れにて人間世界は全たい。人間が悉く此の不思議分際を開悟せぬとて、矢庭に事を闕ぐと云ふほどの事はない。邪説を退けて、人間の妄想を、人間の徳義に合するやうに成敗すれば、今日は無事安泰である。此の成敗とても、迷ひの凡夫が、勝手には出来ぬ。正智慧を得たる聖賢の事業である。人々、正智慧を得て、悉く聖賢となるも、亦妙じや。志あるものは、工夫して見るがよい。

一切の物に對し、一切の處に於いて、いつも人間が片相手になりて、理窟を言ふことであるが。此の理窟が間違ふと、爲る事成す事が、以上間違ふ。此の間違の本を尋ねると、向ふ相手から間違を仕掛けて、そこで人間が取り間違へて、理窟を云

ふかと云ふに、左にあらず。天も古から今に天である、天に科はない。地もいつからいつまでも地である、地に科はない。禽獸草木も、うろたへ廻りはせぬ、禽獸草木にも科はない。畢竟人間の妄想が種々の妖をなし孽をなす。此の妄想が直に遊魂變を爲すと云ふて然るべきである。天地萬物を不思議におもふけれど、天地萬物も不思議に相違はない。其中人々の妄想が最も不思議の第一である。夜が明けて目が覺ると、眞先に此の妄想が飛び出す、目が暮て寐ると、影をかくして何れへ立去りしとも見えぬ。瞋たり笑たり泣たり悲たり、丸て妖物である。天地も不思議であるが、筒様な奇怪千萬の事はない。天地が筒様に空中に現れてある、禽獸草木が筒様に地上に生れてある、乃至一切の物を、熟く考へると、随分不思議な事も澤山あるが、これを人間の靈魂の不思議に比して見ると、遙かに劣た事である。此の人間の身體靈魂の作用が、其儘天地に現れ、禽獸草木にも現れ来るて有らうならば、此天地も、此の禽獸草木も、まだ速かに不思議千萬の事が出来るに相違はない。筒様に考へて見ると、天地も禽獸草木も、此の人間の靈魂に比しては、餘程下等の不思議である。たとへば、不思議の一分が

現れたものである。且らく靈魂と云ふ名を設くれども、畢竟我々の心である。此の心が動く、種々の業が現る。此の業が、相手方の縁につれて變化する。此の心の動くのと、業が現るのと、相手方の縁につれて變化するのとは、一致して、其の間はない。身體が痒さと覺ゆると、直に手が其處に往て搔く、かくと痒さが止む。痒さは心の動くのである、手の往くのは業である、痒さが止むのは、縁につれて變化するのである。物が欲しいと思ふと、直に心が向ふ、其物を得れば、其心が變ずる。憎いと思ふと、直に心が背く、其物を去れば、其心が變ずる。大に動けば、大に業が動く。小しく動けば、小しく業が動く。種々様々に、其の相手方の縁につれて、變化窮りなし。筒様の事は、已れが企て、造るのではない、此心の自然の働きである。此働きは、みづから知る知らぬに關せずして有る、夢の中にもあるが如し。此心の働きによりて、身體も成就する、一切萬物が都合よく出来てある。そは此心が、向ふ相手の縁につれて動き、縁につれて變ずるからの事である。嫌なもの、取のけるやうに、そむけて動く。好むものは、求むるやうに、順じて動く。此の好惡、向背が、直に心の感動である。小にしては、蟻の一身にも現は

る、大にしては、鯨の一身にも現はるゝ。人間は其中に於いて、満分の所縁を成就し。えりすぐりし所縁の上に、此心が動くによりて。満分に成就して、満分に發達してある。曾て説きし如く、所縁に相應せざれば、其物は生れ得ぬものである。其境に相應するは、そむける所縁を避けて、順ずる所縁に生るゝ、これを避る爲めに、防ぐ業が動く、此の防ぐ業が、形に現はるゝ。順ずる所縁に求むる業が動く、此の求むる業が、形に現はるゝ。手早く言はゞ、見やうとおもふ心が動いて、眼となる。聞かうと思ふ心が動いて、耳となる。防がうとおもふ心が動いて、角とも、牙ともなるである。境に色がある、此色に感じて、眼が出来る。境に聲がある、此聲に感じて、耳が出来る。境に害がある、此害に感じて、角も、牙も出来る。乃至一切の動物、植物の形體は、悉く其境に相應し、其心に相應して、現はるゝものである。岩石に木の根がへばり付てあるのを見ても、知れ。これを佛説に、諸の法は、縁より起ると説てある。因縁果報の説は、其差排が少し違ふけれど、先づはこれに準ず。正直の心から、能く憶念すると、解せらるゝ事である。近來、西洋の哲學に、萬物進化、自然淘汰等の説がある。是等の説は、全く此の縁起の理を、外より見

かけて説たものである。此の心境感應の事は、至極面白い事である。精氣神魂の事も、別々に見えるなれど。萬物唯心造の上から見ると、精氣と神魂とを、取離すことはならぬ。精氣退いて死に至れば、神魂も去る。神魂くじけたむ時は、精氣も衰ふ、全く一致のものである。別々に見えるは、且らく外より見かけて、立つる説である。草木の如き、精氣のみにして、神魂のなきものは、因縁が微薄なるに由る。動物の至愚なるものと、草木の至精なるものとを、並べて見ると、さほどの相違はないと云ふ事である。筒様に草木と隣り付に生を受けて居る蟲蟪より。段々因縁の手厚き動物に、廻りて見ると。其精氣ばかりと、神魂を具するとの際は、たしかに分つことはならぬ。況てや草木が化して、動物ともなる。おいゝ因縁の満足するに隨ひて、神魂の作用も靈妙にいたる。人にいたりて、其靈を極むる、其妙を極むる。此心の底を拂て、靈妙を顯現する。此心一切の因縁に相應し、微薄な所縁には、微薄に相應し。重厚な所縁には、重厚に相應するてある。人間の一身の中にも、此の事はある。毛髮と眼耳とは、一樣ではない。正直の心を以て工夫すると、直に知れる事である。されば精氣は、此心の疎き摸樣

である。神魂は、此心の親しき模様である。疎親の別はあれど、其心の上より言へば、全く一致である。兩般は無い。

此心は、天地一枚である。三千大千世界を、引包んで漏さぬ。始もなく、終もなく、大とも言はず、小とも言はぬものである。天と云ひ、地と云ふも、此心の中に現はるゝ影である。三千大千世界と云ふも、此心の中に、差別する模様である。虚空の到る處、虚空なるが如く。火の到る處、縁に應じて發現するが如し。これを始に求むると、其始を窮め盡して盡ぬ。これを終に求むると、其終を窮め、して盡ぬ。これを大に求むると、其大を窮め盡して盡ぬ。これを小に求むると、其小を窮め盡して盡ぬ。一切の比量を離れて、直に此心である。此心の全體を知らんと思はゞ、直に此心に就て、工夫して見よ。若し此心に就て工夫するも、知れぬとならば、一切の外境界に對して、臆測するは、愚じや。幾等臆測を勞して、理窟を立つるも、總て妄想と云ふ者である。目が有るから、色は見るて有らう。耳が有るから、聲は聞くて有らう。鼻が有るから、香は嗅ぐて有らう。口が有るから、味は嘗むるて有らう。彼此の比量して、其大小遠近は知るて有らう。彼れと此れと、其

色を異にし、其形を異にするによりて、其變化は知るて有らう。夫れは只見たまゝの事である。聞たまゝの事である。眞實の道理を知るとは言はれぬ。眞實の道理を求むるは、須らく此心に就て工夫すべし。みづから己れの道理さへ、知るところは、ざるものが、己れより疎き天地萬物に求めて、其道理を知る筈はない。若し天地萬物に求むるとき、天地萬物が、我に向て求むるより、直に汝己れに就てこれを知れ。我は猶汝の如しと云はゞ、其時いかゞ返答をするぞ。况てや入間は、天地萬物の中に於いて、其靈を極め、其妙を極む。此靈此妙、直に是れ自己じや、至て親しきものである。此靈妙の徳の一分が、天とも現はれ、地とも現はれ、萬物とも現はれてある。斯く決定の心を起して、不思議分際を、看被するの門戸を開くべきである。

此心の全體大用は、各々みづから悟るべきである。水の冷たきを知るも、水に就て知る。火の熱きも、火に就て知る。草木禽獸も、草木禽獸に就て知る。これを教ふるものは、これが水じや、これが火じや、これが草木禽獸じやと、其物を指し示すまで、ある。其有様は、各々其物に就て、合點すべき事である。此心を知るも、

猶其通りである。別に教ふべき道理はない、これを知るものは、これを知る。これを知らぬものは、これを知らぬ。種々の道理も、説けば説かるゝなれど。畢竟此心の分別である。此心の作用である。此心で分別すると、種々の道理が出来る。此道理を知たとて、此心を知るとは言はれぬ。斯く言へば、取付き端のなきやうに思ふものも有る。因て佛は、此心を知るへき方便を、種々に説く。佛の五千餘卷の經典は、悉く此心を説きしものである。此心を知るの方便である。其中の要目に、四依と云ふ事がある。依、智、不依、識、依、義、不依、語、依、法、不依、人、依、了義經、不依、了義經、とかうである。其中、智に依て識に依らずと云ふは、最も大切な事である。第一に、智と識との區別を知らねばならぬ。此智識の區別は、甚だ六かしき事であるが、今畧して言はゞ斯うじや。智とは、道理を知るの心である。識とは、縁に觸れて心の生ずる事である。古語に、人其子の悪を知ることなしとある。其子を愛するの切なる、其悪きを知らぬに至る。其子を愛するは、識である。其悪を知らぬは、無智である。識が熾なれば、智がくらむにより、善悪の見分けが付かぬ。物が欲しいと思ふと、つひ其物に心が赴く。憎いと思ふと、つひ其物に心が背ける。

縁に觸れて、心が生じたまゝである。禽獸が空腹になると、奔走して食を求め、満腹の時は、何心なく、ごろづいて居る、これ等を識と云ふ。人は今日あり、明日あり、今年あり、明年あり、老あり、死あり、と云ふことを知る。空腹なりとて、妄に奔走して、食を求めはせぬ。満腹の時とて、ごろづいては居らぬ。一分の智分が、現れてあるに由て、變化の理の一分を心得て、識のまゝに行ぜぬ。見たまゝ、聞たまゝ、憎いまゝ、可愛いまゝ、欲いまゝ、嫌なまゝ、食たいまゝ、寐たいまゝに、打任せては置かぬ。されば識は、此心が縁に觸れて、感動する儘である。一切萬物の形を、みづから作りなす働きてある。人にありては、此識の上に、智が生ずべきが、當然である。一切の物より、靈活の方が強きゆゑ。識も隨て勝れてあるものなれば、智が生じて、此識を程よく、取治めねばならぬ道理である。なほ後のくだりに、智識の分際を、委しく説き示すべし。

一切の動物は、悉く物を怖るゝ心がある。此怖るゝ心より、疑ふ心が起る。此怖るゝ心は、みづから已れを愛する心が、異境に觸れて、感動するものである。異境とは、馴れぬ境である。此心は、常になれた境に安堵してある。其身も心も、知ら

ず識らず打任せてある。言はゞ所縁の上に生れてあるにより其所縁が馴れた境である。其物の果報である福分である。みづから其身も心も打任せてある。手早く云はゞなれた境は其物の境界である。故に一朝なれぬ境に遇ふと怖るゝ心が生ず疑ふ心が起る。甚しきは身を挺いて遁るゝ此れは畢竟みづから愛するの心である。一切心あるものゝ欲である。欲と云ふが其儘其心である。此欲が各々分に応じて形を作つてある力である。此力と云ふも欲と云ふも愛と云ふも且らく假に付けた名である。畢竟此心の妙用と云ふものである。靈活なる所以のものである。身をつめると痛い此いたいのが靈活である。此痛いのが何にも角にも縁に觸れて變化して現はるゝ。痛いのと癢いのとこそぐつたいのと、ひもじいのと、欲いのと、憎いのと、嬉いのと、悲いのとは種々様々に違ふやうに見ゆれど。畢竟此心が向ふ相手の縁につれて變ずるまでの事である。一々違ふ心が有るのではない。此心が活たものであるから向ふ相手がこれに觸るゝまゝに種々に感ずる事である。此事を能々憶念すると、人獸の形を感ずる所以も知れる。順縁の上に生れ出てゝある所以も知れる。異境に遇て怖る

ゝ心の起る事も知れる。怖るゝ心が起ると疑ふ心の起る事も知れる。これまでは識の分際である。此疑ひが破るゝと正智が生ずる。此疑ひが破れねばどこまでも迷ひとなる種々に妄想する種々に臆測する。禽獸などは微根のものゆゑ怖るゝ心までは生ずるなれど疑ひの心が生ぜぬ。ゆゑに思議心が起らぬ。人間の中にも至て恐なものは疑ひの心が起らぬ。智分の勝るゝものほど此疑ふ心が起る。みづから愛する力が強ひ欲が勝れてある。此愛と云ひ欲と云ふけれど、且らく物に應じた姿の名である。其實は、靈活の徳が満分なのである。人間の通途より云へば此心の靈活な事は遙かに禽獸より立勝りてあるに相違ない。此立勝りたる様子をたとへて云はゞ鏡の如きである。禽獸とても一面の鏡はあるに相違なけれど、曇りて明らかならぬ。人の鏡は至て明らかなるによりて、些細な事までが此心に寫り来る。少し強く感ずると、樂な事でも、苦い事でも、直に此心に記應する。此心に記應するとは、此心に感染する事である。是れが此心の靈活な謂れである。禽獸の中にも、少し根機の勝れてあるものは、強く感じさせると記應して居るものである。これに比して知れ、此心に感ずる

力の強きほど靈妙なものである。其記憶は、此心に癖が付くのである。靈なほど癖が付きやすい、靈なほど感じが鋭い。總て此心の靈妙な作用は、箇様なものである。さるにより人間は、生れて、追々成長すると、物ごとに段々感ずる力が起る。苦樂を白づと記憶する。看よ、小兒が、火を攫て手を焼くと、再びはせぬ。此感覺、此記憶が、勝れて居るに由て、終に物の形を知り、名を覺える。其形の變化するのを見て、物には變化のあると云ふ事を知り、關係をも知る。見馴れぬものには、不審を起し。聞なれぬものには、疑惑を生ず。已にこれを知る者があつて、説き諭して教ふ。人間として、生れ出づると、此人間世界の物事に馴れて居るのではない。初め父母に馴れ、家に馴れ、友に馴れ、又父母の怪まぬものは、畏れもせぬ。家に在るものは、疑も起さぬ。箇様にして、一村より一國の事にも馴る。其馴るゝ中に、一分の疑ひ心はありて。知らぬ事はこれを問ひ、これを明らめんと思ふ。此等の事にて、人間は一分の智分があるを知れ。禽獸は、記憶も乏いから、教ふるものもなく、疑の心も起さぬものである。此心に感覺記憶した事が、思議心の土臺となりて、分別を起す。彼と此れとを比

べて、是非好惡も憶ふやうになる。人間の通途より云は、此感覺が鋭いのが、賢い者である。此記憶が慥なのが、賢い者である。此感覺、此記憶が、思議心を引起して、種々に分別する、種々に分別して、道理を見出す。此道理を見出すと一時に、智分が顯はる。此事は成る程、箇様な事じや、此物はなる程、箇様なものじやと、疑ふ心が破れて、明らめが付くを、智分を生じたと云ふ。假令、分別するも、疑ひの心が破れて、明らめが付かぬ時は、どこ迄も迷ひである。自分勝手の思はくのみを、思ひ募る。識に味まされて、智が生ぜぬからである。諺に、我身をつめりて、人の痛さを知れと云ふが、我身をつめりて、痛いのが識である。それに比べて、人も痛いに相違はないと知るが、智である。我も痛い事は、好まぬ、苦しい事じや。人も好まぬ、苦しいに相違はないと知るが、智である。箇様に、智は、識の上より生じ來りて、自と他とに、通じてある道理を知る。過去と現在と未來とに、通じてある道理を知る。故に、智とは、道理を知るの心と云ふべきである。又識が熾なると、智が味むと云ふは、譬へば、欲いと思ふと、欲いに引かれて、種々に分別する。幾等分別し、も、欲いと思ふにつれて、此分別が生ずるに因て。遂には人の物を

も、偷むやうになる。例令引さらへて持往かずとも、種々の手段を分別して、遠廻しに取るとを考へる。一寸とした事にも、此類がある。此類の分別は、畢竟識に味まされた、分別の迷ひである。さるに由て、分別さへすれば、智とは云はれぬ。智とは、道理を知る心である。此道理を知る心は、程よく識を制す。識が主宰となれば、迷ひである。智が主宰となれば、悟りである。禽獸などは、人間ほどに、識が勝れて居らぬに因て、智が生ぜぬとて、害も左程には無い。されど、禽獸に、迷ひが無いとは云へぬ。識の上から動く時は、悉く迷ひとなる。識が勝れてあれば、迷ひも勝れてある。識が劣てあれば、迷ひも劣てある。先づ斯うである。智と識との區別を知れ。或る性理學者が、一概に禽獸草木に就て、天地の原理を尋ね。又天地の性は、人爲の外であるから、小兒赤子が、性の儘である。此性の儘が、天地の性である。大人は、人爲の欲があるから、性を失すると云ふは、愚の至りである。所謂識の一分を見て、性と思ふものである。譬へば、松の赤子即ち二葉のものを、見て、此れが松の性じや。數百年も経し、大木を見て、これは松の欲より變じたもので、性のまゝでは無いと云ふに同じ。箇様な道理はない。此心の性は、須から

く人に就て見るべし、禽獸などでは不十分である。其人に就くも、赤子小兒よりは、大人に就くべし。大人の中にも、聰明叡智のものに就て知るべし。此心に具足せぬものならば、人爲の欲も生ぜぬ、智と云ふものも生ぜぬ。これを火に喩へて云ば、識は火の熱である、智は火の光りである。熱が熾んなれば、火が生ず、それに味むは、燃すと云ふるのである。分別が不都合の處に墮るによりて、燃え立ぬ。一朝燃え立つと、光が発する。故に知れ、光は火の精なるもの、智は心の精なるもの、一切を照し盡すである。

智と識との分別は、上に説きし如し。智に依りて、識に依らずとは、眞實の道理を窮むるには、必ず智に依りて、發明すべしと云ふことである。識はかく有るものと知るも、智である、智に由りて、一切萬物の眞實の道理が分別せらる。義に依て、語に依らずとは、言語にも有る事なれども、おもに書物を讀みて、其意味を解する事である。書物は、人の言葉を寫したもののなれば、言語も同様である。此義に依て、語に依らずとの事は、元來佛の説置れし經文の意味を、解する事に付ての事なれども、此事は、其他にも通じてある。早く言へば、易經と云ふ書物がある、

是れは八卦の事が書載せてある。此の易經の言葉を、其儘に説けば、易とはかはると讀む物のうつりかはる事である。經とはたて糸と讀む機の立糸の事である。故に語に依て、易經と云ふ意味を取ると、かはる立糸と解すべきである。これでは、易經と云ふ意味にはならぬ。易經と云ふ意味は、天地萬物のうつりかはる定理を説き示した、大切な書と解すべきである。易は、かはると訓ても、先づはよろし。經は、機の立糸に譬へて、道理の立糸とも言ふべき意味を、著はしたものである。機は、機織の立糸が亂るゝと、機を織る事が出来ぬ。道理の立糸が亂るゝと、人間の教へが立ぬ。筒様に言語と云ふものは、場合によりて、其意味が違ふてある。孟子に、盡く書を信ずれば、書なきに如かずとある。此れも義に依て、語に依らずの義である。書を半信半疑の間に置く事ではない、義に依て解すべきである。義に合せぬ事は、措て問はぬがよい。強て臆測して、妄想を起し、利發らしく是非を言はぬがよい。後世は、人の妄想ばかりが熾になりて、種々な臆説を出して、道理の立いとを亂る。臆説の上に、臆説を出し、妄想の上に、妄想を重ねて、これを書に筆して、人を誑かす。是が眞の狐狸と云ふものである。

一切の物事の名字は、悉く凡夫が見たまへ、聞たまへに、付けたものである。段々世の中が開け往くまゝに、聖人賢人が生れ出で、道理を窮むることが始まる。此道理を窮むるに隨て、此名字に、種々の意味が含まるやうになる。聖人賢人とても、己が勝手に、名字を下すことは出来ぬ。己が勝手に、名字を下せば、其下した人より外には、解すものは無い。人間の言語、名字とは言はれぬ、人に説き諭すことも、意味を通ずることも出来ぬ。況て聖人賢人とても、識に依て、智が生ずることとてあれば、目に見ぬ、耳に聞ぬ、心に思はぬ事を、工夫するものではない。凡夫の疑ふ事を疑ふて、道理を見開くまで、ある。道理を見開いて見れば、凡夫が想ふのと、其眞實の有様とは、相違してある。其相違の廉を、種々に説き諭したものである。鬼神などの事も、昔から人間が、幽冥の中に、おのづから物ありて、不思議をなすと思ふによりて、此名がある。此事を聖人賢人が、詮索して、扱は鬼神と云ふは、かゝる道理であると悟りて、平易な語をかりて、其様子を示す。其言語が顯れて、論とも説ともなる。されど、一般人間の言語の意味は、どこまでも、言語の本をなすによりて、學問上の言語は、それより變化したものと云ふより外はな

い。段々、智慧の階級が違ふほど、物事の見えなしが違ふて来る。妄想と正智との相違は、夢と現との相違となるに由り。これを尋常の凡夫の語を以て、寫し出す時は、語の通りに解すると、同く妄想の談となりて、正智を開くべき教とはならぬ。故に義に依て、語に依らずと云ふ事が出来る。法に依て人に依らず、了義經によりて、了義經に依らずとあるも、これに準じて知れ。茲に必用がなき故、略して説かぬ。

明らかな鏡に、種々な物が寫てあるを見る。これを見たまふより言へば、全く眞の物に相違ない。筒様に、我心に感ずる其儘が、識と云ふものである。故に識に打任せると、鏡の中にも飛込み、欲きものなれば、攫み取るべきである。されど、人に一分の智が有るによりて、是れは鏡じや。其物は、鏡の中に寫れる影じやと知りて。さすがに鏡の中に飛込はせぬ。此等に比して、智に依て識に依る可らずと云ふことを知れ。其夢を見るも、なほ識の所變である。夢中には、天地も山川も、人も我も、少しも眞の物とかはらぬ。爲る事成す事も、現在に此事がある。夢の中では、是れは夢と云ふ事は知らぬ。夢の中で夢を夢と知るの智は生ぜぬ。

其智が生ずる時には、其夢が覺る。覺て後に、夢でありしと云ふ事を知るによりて、其夢中で見し事爲し事を、眞の事とは思はぬ。されば夢にもあれ、現にもあれ。識とは、其心に、其儘その通りに感覺せしを云ふ。智とは、これを見これを聞く、外の境界の物事を、正しく分別して悟り。又我が識の所變によりて、見るもの聞くものに、變化のあることをも悟るを云ふ。其中、外の境界を正しく分別する事は、人間の當然の智慧で、大概は明らめが付く。此識の所變は、誠に凡夫の智慧では、悟られぬものである。是れが悟られぬと、迷ひに迷ふて、果は外の境界までか、怪しまるゝやうになる。眼を病むものが、空中に花の散るが如きを見る。耳を病む者が、常に風の音の如く、溪水の音の如きを聞く。同じ一室にありて、一人は暑きを感じ、一人は寒きを感じずる事もある。筒様な事は、悉く識の所變と云ふものである。或る者が、金が欲しい、金が欲しいと思ひつゝ、歩行て、こゝらに金が落ては居ぬかと、一心になりて行くうち。丁度目の前に、小判が澤山に落てありしに打喜び。兩手を出して、一攫につかみて、持行かんとせし折しも。是れ何を爲るぞと云ふ聲の、耳に聞えれば、打驚きて見れば。兩替屋の店先にて、手代番頭が勸

定をするため、金を取散らして居たを、攫みてありしと云ふ。餘りに金の欲さに、其者の眼には、金の外には、人も家も見えぬによりて、箇様な事があるものじやと。是れは識の所變を、たとへて説きし話である。まさかに、箇程の荒ましな事は、大概の人にはなき事なれど、これに準じて、識の所變を知るがよい。此れは人の物である。取るべからずと云ふ分別の智が、味めば、欲いと識が動く、攫みて持行かぬとも云はれぬ。左様な時は、人も家も見えぬと云ふべきである。一心一念が、丸て識に味まされて、種々に變を爲す。目を見張て、白晝に夢を見るのである。深く心に感ずると、箇様な事もなしとは言はれぬ。修行して智慧を磨くことをなさず、識に打任せて置く時は、段々生長するに隨ひて、識も欲も増長して、果は犬猫同様な事が出来る。其智慧を修行する趣は、百端なれども、寶間比丘の因縁が、十善法語の、不偷盜戒に説てある。此等は此處の話の引續きにて、智慧を修行するの趣を知るに、尤もよし。未だ讀ぬ人の爲に、略してこゝに示す。佛の在世に、寶間比丘と云ふものが、始めて受戒して、佛の御前に禮拜して申すには、既に受戒仕れり、是よりいかゞ修行して、佛智慧を開き申すべきやと。其時、

佛の申さるゝには、汝が物に非るよりは、取ることなかれ。此比丘この一言の教を受けて、禮拜して去り。林の下に至り、石の上に坐してみづから思惟す。今佛が、汝の物に非ざるよりは、取ることなかれと教へたまひしは、いかなる義ぞ。他の金銀財寶などの類は、何ぞ佛の教を待ん。さるに慇懃なる佛の教へ必ず子細あるべし。今我が物と云ふは、畢竟何物を云ふぞ。家財官祿は、出家しれば、我が物に非ず、取るべからず。妻妾眷屬も、出家しれば、我が物に非ず、取るべからず。五尺の身體は、果して我が物なるか。是れも父母血肉の餘分なり、生れ落し以來、衣服飲食などを以て養ひ來りし物なり。終に朽敗して、土に歸る。是れも我が物に非ず、取るべからず。眠に色を見る、是れ我が物なるべきか、此れも内に眼根あり、外に色あり、中間に虚空あり、光明あり、衆縁が和合して、假りに此相あり、鏡にうつる影の如くにして、其實體なし。我物に非ず、取るべからず。耳に聲を聞く、是れ我物なるべきか、此れも内に耳根あり、外に聲あり、遠からず近からず、他の障礙なきとき、衆縁が和合して、假りに此相あり、谷の響の如く、其實體なし。我が物ならず、取るべからず。乃至意に善惡邪正、是非得失を分別す、是れ我が物な

るべきか。此心もみづから心とは知らぬ、みづから心とは言はぬ。意と云ふ名も、心と云ふ名も、外より名づけし物なり。畢竟見聞覺知の影なり、其實體なし。我が物に非ず、取るべからず。此の如く決定して、智慧を修行せしかば。忽ち此心の本性を悟り、廓然として初果に入り。再び委しく思惟して、羅漢果を得しとなり。初果とは、佛智慧を得る、初めの階級の名である。羅漢果とは、極位の名である。箇様に識の所變を知て、智慧を修行すると。一切の迷が破るゝことである。志あるものは、始終に臆念するがよい。

識に依れば、一切の是非分別が總て迷ひとなる。智によれば、一切の是非分別が悉く悟りとなる。夢中に種々分別することは、畢竟夢である。分別さへすれば、これが智慧とは言はれぬ。盗人が物を盗む爲めに、幾等巧みなことを思ひはかりても、總て迷ひと云ふものである。我れ知らず、己れ知らず、欲に引かれて、心が種々に動くによりて。盗人の目で見ると、一切の物が盗むべき物である。一切の事が盗むべき事である。一切世界が、盗人の世界に見ゆる。是等悉く、識の所變と云ふものである。此人間が、生れ來るや否や、第一に己有ることを知る、次に

人の有ことを知る、萬物のあることを知る。何によりて、これを知るかと云へば。形が別々に見え分かれて、其様が一樣ならぬからである。男と云ふことを知る、女と云ふことを知る、貴きと賤きとを知る。其中に、苦あり樂ありと云ふ事を知る。好き嫌な心も起る、嬉しき事もあり、悲しき事もあり、泣やら怒るやら、種々無量な事どもが、取かさなりて、此心を引動かす。箇様に引動かされて、我れ知らず、持前の業を働かして、一切の物事を、己がまにまに成敗す。是等の事は、識の所變では無く。此心の外から持來るか、と云へば、左に非ず。同じ人間でも、それ業が違へば、直に利害も違ふ。此の人の喜ぶ事も、彼の人は悲しみ。彼の人の泣く事も、此の人はをかしがる。我が身を大切に思ふものもあり。人の身を大切に思ひて、我が身を苦しめ、命をも捨て、顧みざるもあり。此等にて、全く識の所變と云ふことを知れ。されど、人間の通途より云へば、大概其の業が同じき故。人間の感ずる事は、左程の變は無きものである。盗人が見ると、一切が盗人の心に相應して見ゆるが如く。此人間が見ると、一切が人間の心に相應して見ゆる。其中、各々の宿業によりて、種々の識變もあれど。畢竟人間の業より感ずる事は、

大同小異である。食も求めねばならぬ、衣も求めねばならぬ、家屋も求めねばならぬ、器物も求めねばならぬ。求める心がつのりて、食も旨きものが欲しい、衣も立派なのが欲しい、家屋も器物も、奇麗なのが欲しい。此の欲い心から見ると、人の物までが、浦山しくなる。まさか盗みもせぬけれど、國に法度がなければ、随分ともに亂暴せぬとも云へぬ。智分がありて、みづから識を制する人は、稀なことである。國の法度とても、これを刑罰することがなくては立たぬ。刑罰を畏れて、法を犯さぬは、欲を制するに、識を以てし、識を制するに、識を以てするに由る。諺に云ふ、痛けりや放せじや、衰れなる事である。通途人間の有様は、先づ斯うしたもので、誠に智分が少ないものである。其少ない智分でも、取用ふればよけれど。それは捨て、妄に神佛に願ひて、罪を免がれん事を求む。甚しきは、當度もなき冥福を祈る。不思議分際などの談には、遠くして遠し。凡夫當然の思議分際だも、眞闇がりである。箇様な有様なるによりて、邪見の者が、世に生れ出て、種々様々の怪談を流布し。親兄弟の教へ、賢人聖人の法をも、蔑にして、相率ゐて、迷ひから迷ひに墮入る。迷へば迷ふほど、識の所變が甚しくなりて。

果は夢中に、靈なことを見る。白晝にも怪しき事を見る。物に對して、妙に不思議を感じ。遂に氣狂ひも同様になりて、身を捨て、これに赴き。命を捨て、遁るゝやうになる。斯る場合になり果れば、人間通途の福分を失ひて、一種奇怪の獸となる。能々正念して、智慧を修行するがよい。さも無いと、賢きものも、愚なるものも、己が識の轉變に誑かざるゝ事である。

智慧を修行するものは、其識を委しく分別して、次第を立て、知るべきである。佛の經に、八識に分けて説てある、第一の識を阿刺耶識と云ふ。第二の識を、末那識と云ふ。第三の識を、分別事識と云ふ。阿刺耶と末那とは、天竺の語である。阿刺耶は、含藏の義で、よくみたくはへる意味である。末那は、心の一名で、意の義である。此識で己れを憐めて居る。分別事識とは、物事を分別思慮する識である。意識とも云ふ。末那が動いて、意識となる、意の識の故に、意識と名づくと云ふ解がある。意は、目が覺ると寐るまでは、何も分別せぬとも、生じてあるもの言はゞ、無心である。意識は、分別思慮することが、對ふ相手になりて、種々に思ひなす識である。此末那の事は、昔から種々に解を下すものがあれど、取間違ひ

が多い。餘り深く考へて、鼻先の事を知らぬからである。また染汚意の名がある。これは迷悟の上から下したものである。阿剌耶識は寐ても覺ても變らぬもので、手早く言へば、人が生るゝと、阿剌耶識が起る。人が死すると、阿剌耶識が滅する。目が覺ると、末那識が起る。睡むるときは、末那識が滅する。分別すべき事があると、分別事識が起る。分別する事が止むと、分別事識が滅するである。第四に、眼識と云ふ、第五に、耳識と云ふ、第六に、鼻識と云ふ、第七に、舌識と云ふ、第八に、身識と云ふ。眼識とは、色を見て知る識である。耳識とは、聲を聞いて知る識である。鼻識とは、香を嗅て知る識である。舌識とは、味を嘗て知る識である。身識とは、物に觸れて居る識である。これを前五識と云ふ、前の三識を合はせて、八識となる。此心が、外物に對して、知識するには、前五識の外には、畢竟、知識することはない。此前五識によりて、知識せしことを、取集めて、意識が分別する、これを法と云ふ。法とは、聲も形もなくして、意識の相手になるものである。猶、眼識の相手に、色があり。耳識の相手に、聲があると、同じことである。此事を委しく言へば、斯うである。色を見て知るは、眼識である。此色によりて、これは山じや、こ

れは家じや、これは人じやと、分別して知るを、法と云ふ。分別事識の相手である。なぜに山や家や人を、聲もなく形もなきと云ふなれば、眼にては、色を見知るまで、畫を見るも同じ事である。其色の摸様で、山と云ひ、家と云ひ、人と云ふことを分別する。此摸様は、色に由て起るものなれど、色と摸様と、同じものとは言はれぬ。色は見たまゝである。摸様は分別して、何と云ふことを知る。これを色の分段と云ふ。色の分段とは、色が分々段々になりてあることである。色が分々段々になりてあるに由て、摸様がある。其摸様が、山とも家とも人とも、見分けらるゝ。それも、箇様な摸様は、山じや、箇やうな摸様は、家じやと、兼て心に留め置ぬ時は、只に色の分々段々になりしばかりが見えて、山とも、人とも、分別が付かぬ。これに比して、法は、色も形もなきものと知れ。其耳識に聲を知て、意識が分別するも、猶、其通りである。聲の音色は、其儘、耳識に知るまゝである。其音色によりて、是れは人の聲じや、禽獸の聲じやと、分別するは、意識である。其相手は、聲に非ず、法である。聲の分段によりて、人なれば、何を語る、何を言ふと云ふ事を分別して、これを知る。此聲と此言葉の意味とは、同じものとは言はれぬ。聲の摸様に由て、此法

が顯はるゝ故に法は、色と聲と香と味と觸とによりて、顯はるゝものなれど、これを聲じや、色じやと云ふことはならぬ。色聲香味觸を、別々に智識して、意識の片相手の法となり來るときは、聲もなく、形もなく、色もなくして、此法がある。此法の事を、猶委しく云へば、人は色じやと云ふことはならぬ。人は聲じやと云ふことはならぬ。人は香じやと云ふことはならぬ。人は味じやと云ふことはならぬ。人は冷煖じやと云ふことはならぬ。さすればとて、聲香味觸の和合物にもあらず、車を尋ねて車なし。されど人には色がある、人には聲がある、人には香がある、人には觸があると冷煖がある、箇様な事で、人と云ふことを知れど、別々に取放しては、人は見えぬ。これを取纏めるのは、眼識でもなく、耳識でもなく、鼻識、舌識、身識でもなく、意識の働である。其意識の相手になるものは、法である。此法は、色でも聲でもなくして、全く人と云ふ法じや、山と云ふ法じや、家と云ふ法じや。能々、臆念すると、此差別は、はつきりする事である。此の八識の順序は、眼耳鼻舌身より、一、二、三、四、五と、順に立て、第六を意識、第七を末那、第八を阿剌耶とするを、常例とす。今は解説の都合にて、これを逆に數へたるものと知るべし。

何事も、一切の物相對せざれば、此世界に顯れぬものである。譬へて云へば、光の如し、照すものが無ければ、照さるゝ物は無い。力の如し、動かすものが無ければ、動かさるゝものは無い。これを能所と云ふ。能とは、よくすと訓む、又あたふと訓む、よくしあたふの意味である。所は、らるゝと訓む、又ところと訓む、らるゝところの意味である。此の能所が對立して、一切の物事が顯はるゝ。眼に對して色がある、此色が無ければ、眼識は生ぜぬ。耳に對して聲がある、此聲が無ければ、耳識は生ぜぬ。鼻に對して香がある、此香が無ければ、鼻識は生ぜぬ。舌に對して味がある、此味がなければ、舌識は生ぜぬ。身に對して觸がある、此觸がなければ、身識は生ぜぬ。意に對して法がある、此法が無ければ、意識は生ぜぬ。箇様に、能所が對立して、一切の物事が顯はるゝ。此心と、此の色聲香味觸法とが、人間の世界である。此外に世界は無い、此外に世界があれば、それは夢である。夢の中にも、夢に此色聲香味觸法が顯はるゝ、夢に此色聲香味觸法が顯はるゝと、夢に眼耳鼻舌身意の六識が動く、夢にもあれ、現にもあれ、此心が動く、箇様に能所が立つ。これを心境と名づく。心はこゝろである、境はさかひである、さかひとは、心の

相手方である。此心の相手方の境が正しく此世界である。扱此境となり来る色聲香味觸法はいかなる姿であると、詳かに工夫して見ると、意に對する法ばかりが、形なきのみならず。色聲香味觸ともに、眞實の形はなきものである。色は光に由て發するもので、光には形はない色にも形はない。聲は物と物と相觸ると發するもので、觸には形はない、聲にも形はない。香も觸も其通り、形はないものである。されど目に見て、色があり。身に觸れて、堅軟冷煖の相があるものは、其實體あるに相違ないが。其實體とて、且らく因縁により、原素とか云ふものが、和合して、其姿が見えるまである。此原素に就て見ると、見るべき觸るべき實體はない。窮理學の説では、此原素は散じて、遂になくなるものでは無い。何くまでも存してあるものじや、と云ふ説もあれど。是は窮理學を立つる原位の爲に、方便に立た説である。いよゝの處にいたれば、有るものとも、無きものとも、取極らぬものである。窮理學では、此原素の有無の議論は聞いてせぬを、此學問の分際とする。夫れより以上は、所謂哲學の所論である。今假りに、原素は何くまでも有るものとするも、此草木は、原素ではない。此禽獸も、原素ではない。

此人間も、原素ではない。此家屋器物も、原素ではない。原素は常に集散あるも、此人間は、常に集散せぬ。此禽獸は、常に集散せぬ。此草木は、常に集散せぬ。此人間は、日々に飲食して、原素を集め、息となし、汗となし、大小便となして、散ずるなれども。これに由て、人間が殖たり減たりはせぬ。人間は人間が生るゝと、死るまでは、人間である。草木禽獸も、猶其通りである。されば此境に顯はるゝ物事を、委しく詮議すると、悉く實體なきものである。實體なくして、此事あるを、假りに名づけて法と云ふ。

此心あれば、此法が現はるゝ。此法あれば、此心が現はるゝ。明鏡に對した如く、空谷に叫ぶが如し。此姿を變ずれば、これに應ずる影も變ず。此聲を變ずれば、これに應ずる響も變ず。此心の一念を變ずれば、一切の法が變ず。一切の法が變ずれば、此心の一念も變ず。念々變じ、法々變ずるも、此心は、常に恒に此心である。此法は、常に恒に、此法である。此法あれば、此心もある。此法なければ、此心もない。此心あれば、此法も有る。此心なければ、此法も無い。此心、此法、相對立して、無始曠劫より、盡未來際まで、相違せぬ。面白き事である。迷ふものは、此法

に迷ふ、此心に迷ふ影を逐ひ、響を尋ねて、自己心の中に、往來生死して其邊際を見ぬ。たとへば算數の如し、一元有と立つれば、これに乗じて、天地の外を包ぬるも、乘じ盡さぬ。これを除いて、無間の際に至るも、除き盡さぬ。有の法に對する一念が、大に向ふて生じ、小に向ふて生じ、生じ、生じて、何くまでも盡ぬものである。小に向て除き除くも、有の一念の、除きやうはない。大に向て加へ加ふるも、有の一念の、加へやうはない。此れに比して知れ。此心此法は、斯くの如し。彼れより此れを見るも、此心此法は、斯くの如し。此れより彼れを見るも、此法、此心は、斯くの如し。其中迷ふものが、自己心識の轉變に迷ひて、種々の臆想を起し、思議、不思議の分際を見る。能々正念して見よ、此世界に何も不思議は無い。不思議と思へば、一切不思議である。不思議と思ふ其一念から、不思議である。一切不思議なれば、殊更に不思議と云ふ事は無い。法に不思議を立つるから、心に不思議の念が起る。法に思議を立つるから、心に思議の念が起る。何も對ふ相手の法ばかりが、不思議と云ふ事は無い。却て此心こそ、不思議とすれば、不思議である。心を以て不思議とするも、早く是れ法である。此心の相手方となる。されば不

思議と云ふも、思議の分際である。思議すればこそ、不思議も出来る。此思議心を止むれば、不思議もない。只に彼れと此れとを比量比較して、合點が出来ぬから。其合點の出来ぬ處が、且らく不思議となる。此法の現はるゝは、箇様なものである。此心の現はるゝは、箇様なものである。合點さへすれば、直に合點の出来る事である。心より云へば、且らく對ふの相手は法となり來れども。其法に即て言へば、心である。我より言へば、人なれども。人より言へば、我も人である。人間は禽獸と見れど、禽獸からは、人間を鬼とも見る。此心の靈妙の徳が、此れとなり、彼れとなり、心となり、法となり、一切衆生の業に相應して、現はれ來るものである。若し此心を、別々のものとして見れば、人と人にとりても、此心の通ずべき謂れはない。昔も今も易らぬものは、此心である。其證據は、古人の書記せし事を見ると、分明に解せらるゝ、今の人の心の作用と、相違はない。全く一つものを、分ちて持しと、同じ事である。これに由て、此心の廣大無邊などを信ずるがよい。此心の無邊な功徳を信ずるがよい。此心を信ぜずして、うろたへ廻ると、際限のなき事である。色は五色に過ず、五色の變は、擧て言ふべからず。音は五音

に過ず、五音の變擧て言ふべからず。味は五味に過ず、五味の變擧て言ふべからず。有情は、胎卵濕化に過ず、胎卵濕化の變擧て言ふべからず。非情は、草木苔菌に過ず、草木苔菌の變擧て言ふべからず。此擧て言ふべからざるものが、一々法となり來て、此心を感じ動する。思慮分別を巧にして、終日終夜工夫するも、詮なき事である。終には、幽靈、怪物、鬼神、上帝、天狗などまでが飛出して、惑亂するに至る。

眞正無神論三

一切の法を、一々取離して見ると、其姿は無きものである。されどこれを意識にて分別すると、天も出來る、地も出來る、世界も出來る、國も出來る、山も川も海も、一時に出來る。これを此心の光影と云ふ、此心にて照し出したる影と云ふことである。向ふ相手の法に、實有の姿は無けれど、此心にて實有と分別すれば、此法は何くまでも實有となり來る。天を實有となし、地を實有となし、世界を實有となし、國を實有となし、山も川も海も、實有となし、家屋、器物、身體も、實有となして、其中に心識が轉變する、これを名づけて妄想と云ふ。正智慧を修行するものは、此

妄想の有様を委しく知らねばならぬ。現在に、天地萬物と、種々に形が見え分かれてあれど。畢竟四大が、假りに和合して、種々の形に見え分かれたものである。假令形は種々なるも、其實は四大に相違はない。青黄赤白、もろ／＼の雜色をとり交せて、畫を書たようなものである。其模様どりにて、山とも川とも、人とも家とも、木とも花とも、鳥獸とも見ゆれど。其實は、種々の色より外には無い。四大とは、堅き性のものを、假に地大と名づく。濕ふ性のものを、假に水大と名づく。煖な性のものを、假に火大と名づく。動く性のものを、假に風大と名づく。此の地水火風の四大とても、實々に不變な性質があるのでは無い。悉く因縁より生じて、箇様に見ゆるである。此事は説明しが長くなるによりて、今は且らくこれを差置く。扱此の地水火風の四大が和合して、天地萬物が、形づくと定めて見ると、其形は只模様のみ。其實は、四大の外は無い。此模様は誰されて、實有のものと思ひ。四大が假に和合して、形を見せると知らぬは、直に妄想といふものである。何となれば、此四大が、假りに和合して、形をなすも。彼れの四大より、人を誑すのでは無い。此方の分別から、種々様々に見取るのである。畫ける色の青

黄赤白もろくの雜色が其色の通りに見えて、違はぬなれど。これを見るものは、色を見ずして、其模様を分別するが如くである。さすれば此色を去りて、別に畫があるかと云へば、畫はない。此の四大を去て、天地萬物があるかと云へば、天地萬物はない。故に此四大の相を見ずして、天地萬物を見る、これを妄想と云ふ。されば四大が假に和合して、種々に見え分かれて有る、草木、禽獸、其他人間に至るまで、悉く四大なり。四大の外に、物は無いとおもふも、なほ四大の相に誑かされた妄想である。四大は、地水火風である、草木、禽獸は、草木、禽獸である。草木、禽獸と、地水火風とは、一所にはならぬ。故に此四大の相に關らずして、此草木、禽獸を、正しく知らねばならぬ。正しく知るには、此草木、禽獸の姿に現はるゝ四大の相を除きてみれば、直に草木、禽獸といふ法である。我よりは法といへど、彼れ草木、禽獸に即て云へば、心である。此法はなしとは云はれぬ、此心はなしとは云はれぬ。木に就ていへば、幹もあり、根もあり、枝もあり、葉もあり、花もあり、實もあり。禽獸に就て云へば、目もあり、鼻もあり、耳もあり、口もあり、手もあり、足もあり。箇様な相は、四大の相とは相違である。四大を假て、此相が現はれて有る。これを

有情非情といふ。有情とは、こゝろ有る衆生といふ事である、禽獸などを云ふ。非情とは、こゝろ無き衆生と云ふ事である、草木などを云ふ。情とは、識の事である、なまけと訓む。一心より云へば、非情とても、心外の法ではなければ、識が生ぜぬものゆゑ、動物とは相違してある。扱箇様に分別して見ると、天地萬物と、口に云へど、悉く心外の法はない。此心が生ずると、有に見える、此心が滅すると、無に見える。有と云ふも、無と云ふも、畢竟此心の生滅である。手早く云へば、目が見ると、己れて己れが有に見える。眠れる時には、己れて己れが無に見える。無と見る心もないから、眞の無である。これを有無の相と云ふ。此有無の相に迷ふて、人間が種々に妄想を起す、空を攫み風を捉ふるやうなものである。眞實の法は、上の如くなるに。人間が妄想を起し、日月を相手に、天といふ名を下だし。土や水を相手に、地と云ふ名を下だし。山と云ふ名を下だし、海と云ふ名を下だし、川と云ふ名を下だし。一々の模様は、一々の名を下だして、世界と妄想する。此世界に生れてあると思ふ。木を切り、石を碎き、土を焼き、これを縦にし、これを横にし、丸く角く、長く短くして、己が妄想の如く模様をなし。家屋と名づ

け、器物と名づけ種々薩陀に名づけて、妄想するである。因は果を離れず、果は因を離れず、妄想より建立したものは、畢竟妄想である。されば人間は、全く一大妄想の世界で、此妄想より外に、世界は無い。此妄想によりて、快樂を受くるを、人間の福分と云ふ。此妄想によりて、苦惱を受くるを、人間の災厄と云ふ。此人間が平等に快樂を受くべき妄想を、世間の道と云ふ。此外に世間の道は無い。此人間が一切衆生の快樂を快樂として、親の子を愛するが如き妄想を、出生間の道といふ。法は心を離れぬものなれば、此心に縁じ来るものが、ことごとく快樂を受くるとき、此心が快樂を受くる。且らく世間、出世間と云へど、畢竟、妄想の差排である。なぜぞ、此妄想は、此心の功用である、功德である。一切世界は、此心の光影である。此心の所造である。此外に一法もなきが故に、此妄想が、直に眞實である。これを悟るを悟りと云ふ。これに迷ふを、迷ひと云ふ、面白き事である。生れ出ると、直に此世界を、一念の中に作り出だす、死し去ると、直に此世界を、一念の中に納め入る。一生一死、悉く己が心の業力に任せて、或は廣大、莊嚴の世界を建立し。或は狹隘、卑劣の世界を建立し。其中に游戲する、其中に苦勞する、其中に死

する、其中に生る。此心の光影の中に、善惡、生死の業を造て、無始曠劫より、盡未來際まで、往來して、際限ない。面白き事である。

此心は、天地一枚である。三千大千世界を引包て、漏さぬ。此法生ずるも、此心は生ぜぬ。此法滅するも、此心は滅せぬ。此法往くも、此心は持ち往かぬ。此法來るも、此心は持ち來らぬ。明鏡の中に、其影は千變萬化するも、其明體は、千變萬化せぬと、同じ事である。此法に迷ふて、人間が種々に業を造りて、苦樂を受るも、此心は、常に苦樂の相を離れて、苦樂に隨順せぬ。看よ、玉樓瓊筵に、一生を送る王侯も。生るゝ時に生れ來り、死し去る時に死し去る。無寐動靜ともに、己が勝手にはならぬ。樹陰草上に、一生を送る乞食も。生るゝ時に生れ來り、死し去る時に死し去る。無寐動靜ともに、己が勝手にはならぬ。彼れに於ても、一分を増さず。これに於ても、一分を減せず。任運として住る所はない。一念が苦に住る時に、苦境が現はる。一念が樂に住る時に、樂境が現はる。若し念々住る所なれば、王侯も乞食も、同じ生死である。同じ無寐、動靜である。是故に、一念わづかに動けば、一切の法、悉く苦樂である。苦に非ざれば、樂である、樂に非ざれば、苦で

ある。一念わづかに動けば、一切の法悉く自他である。人我である。人に非ざれば我れ、我れに非ざれば人である。自に非ざれば他、他に非ざれば自である。一念生じて後、我れあることを知る。一念生じて後、人ある事を知る。此心は一切の苦樂を離れ、此法は一切の自他を離れて。此一念が、獨り箇様な變をなす。此一念の事を、精しく考へて見るがよい。直に迷ひと悟りとの分際が、はつきり知れる。茲に一言せねばならぬ事がある、法と云ふは、元來此心の生滅の相を指して言ふ事である。それは前説に説き示したが、猶精しく云へば、生死も、寤寐、動靜も、畢竟、此心の動く相である。此心の箇様に動くは、此心の持前である、當然である。苦しい時も、樂な時も、苦も樂もなき時も、動くものである。王侯乞食の同じきのみでは無い、人も獸も、一樣である。扱て此心の動くのを、なぜ法と云ふとなれば。縁につれて動くから、法と云ふてある。此心に分別して知るから、法と云ふてある。此分別する心も、なほ法と名づくるは、一念起れば、おのづと此心に知て。どこまでも、此心の相手になるによりて、法と云ふ。源泉の流れ出づると見れば、直に源を離れて。後に出づる泉のために、前流となるやうなも

のである。いつがいつまでも、其通りである際限はない。猶前に説きし法の處を、委しく考へ合せて知るべし。此法が生ずると、此心が其生に相應して、生ずるやうに見える。此法が滅すると、此心が其滅に相應して、滅するやうに見える。此法が來ると、此心が其來るに相應して、來るやうに見える。此法が去ると、此心が其去るに相應して、去るやうに見える。されど、其心は生じもせぬ、滅しもせぬ、去りもせぬ、來りもせぬ。此心は、此生滅去來を、知れども、常に恒に動搖せぬ。譬へば、空中に、雪霧の去來、起滅するが如く。雲霧は去來、起滅しても、虚空は常に恒に去來、起滅することは無い。此心もなほ其通りで、態々工夫すると、直に知れる事である。此心の全體を指して、佛經には、涅槃妙心と説てある。不生不滅の本心である。此本心が、眞理の原である。此不生不滅の心と、生滅の心と、和合して、阿剌耶識を成すと、大乘起信論に説てある。楞伽經の説に、照らし合せて見るも、其通りである。此事を現在に分別して見ると、斯うである。不生不滅の心と、生滅の心と、二つあるては無い。不生不滅の心は、生滅の心に就て云ふ事である。此心の生滅が、其儘不生不滅であ

る。水と波との如し、波は生じたり滅したり、大波、小波もある。水は生じたり滅したりはせぬ、大にもならぬ、小にもならぬ。されど水を離れて、波が別にあると云ふ事はならぬ。水の有る處に、風が吹けば、其風の縁につれて、大波、小波がたちて、生滅する。此の不生不滅の心が、一切衆生の本體、本性である。此の本體、本性のある所に、生滅の心が起る。幾等生滅しても、本體、本性の生滅すべき筈は無い。佛の經に斯うした譬へがある。黄金を以て、種々な形を作る、或は人物、或は禽獸、或は草木、花實と、其模様は幾等變化しても、其の地金の黄金に差別はない、模様はない。此の如く、一切衆生の阿剌耶識も、涅槃妙心と生滅の心と、常に恒に和合してある。涅槃妙心は地金である、生滅は模様である。此等の喩へにて、不生不滅と生滅と、和合して阿剌耶識をなすことを知るがよい。されば無始曠劫より、盡未來際まで、此心のある處に、此法が現はる。此法、此心、暫くも間斷なきがゆゑに、一切の衆生身が直に是れ阿剌耶識である。前に説き示し、人が生ると、阿剌耶識が生ず。人が死ぬると、阿剌耶識が滅すると云ふは、一樣の解で、深く論ずると、筒様な道理である。一人一箇に限りたことでは無い。其の末那識に至

ては、本より一人一箇の事で、一々の衆生に、一々の末那識を成就してある。此の末那識を離れて、阿剌耶識の生滅を引起すべき因縁がなきゆゑ。此の末那識より云へば、阿剌耶識も、分々に別れて見える。譬へば、大地に就て見れば、山河草木、人獸も、大地の上にある。國々の封境より云へば、山河、草木、人獸は、其の國々の封境に分る。言語、風俗、政教などは、悉く其の國々にて違ふ。末那は、國々の封境を分つた上から、云ふやうなもので、人々別々なものである。さるに依りて、阿剌耶識も、おのづと別々に生滅を起し。別々に業種子と云ふものを、含藏へるである。末那は、意と翻譯してある、染汚意と云ふ。染とは、そむと訓む、汚とは、けがすと訓む。人が生れてから、境に對して、種々の妄想をなして、此心に種々な事を染め付けて、種々に汚してある趣を云ふ。此の染みつき汚れが、おのづと阿剌耶識の上では、業種子となる。譬へて言はば、大地の上に住する人間なれども、國々の政教にて、此の人間の上に、種々な心持を起さしむ。これを末那にたとへ、此の人間の心に、己れ知らぬ處に、種々な業種子が成就してある。それが現はると、きは、彼の國の人と、此の國の人と、おのづから別々な因縁を引いて、別々な果報を受る

と同じ事である。業種子とは、業は心の動くを云ふ、心の働きの意である、種子とは、たねと云ふ事である。心が動くと、人々別々な業が出来る、其の業のたねと云ふことで。言はゞ、梅は、梅の種から生じ、櫻は、櫻の種から生ずるやうなものである。阿刺耶に含み藏へるときは、業の種子となるによりて、己れもかゝる種子が、此心に含み藏へてあると云ふことは知らぬ。此の業種子の事は、實に分別が六かき事であるが、能々憶念するとはつきりすることである。されば、未那は、畢竟阿刺耶の生滅の上に就て、人々別々に作り、別々に起す趣を云ふ事と心得て、間違は無い。總じて、八識とは云へど、識が八つあるのではない、識の作用に就て、精しく分別して説いたものである。畢竟一識である一心の作用である。箇様に分別して説かねば、此心の平等なる様子と、差別なる様子が、分明ならぬにより、佛が委しく説れたものである。

業種子の事を、なほ委しく分別して、茲に説き示さん。元來此心は生じもせぬ滅しもせぬものなれば、人間が死だとして、此心が死だ後までも、片隅の方で、きとくとして有るべき筈はない。去りとして、死だ後は、丸て立消へて、跡方もなきものか

いへば、其様な殺風景な事は、此心の靈妙な上から、理において許されぬ事である。若し此の人間の一人が死で、夫れにて此心が滅しきるものなれば、天地萬物も、一時に滅しきる筈である。左様な事は、現在に無い。此心は、一切衆生と同體である、差別すべき所はない。只其の差別は、人間は人間の身を感じて、眼耳が別々なるによりて、差別の相があるまでである。此心が生ずると、其の生じた外面に、法が現はるゝ。此法に相應して、此心の徳が現はれ來りて、眼耳鼻舌身ともなる。これを此心の差別の相と云ふ。此心の外面は、云はゞ皮で、此の皮一重が、彼れと此れとの分際である。小兒の身體は、小さいにより、其心の生ずる外面が狭い。大人の身體は、大きなにより、其心の生ずる外面が廣い。蟻の一身の如く、象の一身の如く、此の外面の廣き狭きにつれて、此心が生ずる。大は大に生じ、小は小に生じ。小にしても、生ぜざる所はない。大にしても、生ぜざる所はない。兎に角、向ふ相手のある處に、此心が生じて、内外の分際は無い。腹が痛むのは、腹の中に、向ふ相手が出るからである。されど、法と心と、相融すれば、自身で自身を知らぬ。是れも、心と法との働きが止むのではない。左程好きでもなく、嫌ひでもな

きものは、此心に深くは感動せぬやうなものである。好きと云ひ、嫌いと云ふは、心に烈しく感動を起すからの事である。此心が偏るからの事である。さるにより微細な識分の生ずるのは、己れみづから感ぜぬ者である。五臟六腑の中迄も、心と法とは、相對して有る筈で偏ると病をなす。心と法とが、相融せぬによる。簡様に此心の生ずるのは、内外の差別もなければ、且らく一身を以て、此心の領分と定め。皮一重内を、我となし、皮一重外を、天地萬物となして、差別を立つ。此差別を立つる中にも、はや差別の出来がたきものがある。呼吸を看よ、外にありては、空氣である。内にありては、人間の大事の息である。暖氣を看よ、外の世界が寒いと、内の身體の暖氣を、外に引とらるゝ。外の世界が暖なると、内の身體にまで、此の暖氣が押込む。湯水を看よ、内の身體に、水氣が拂底になると、直に外から運び入れねばならぬ。其他委しく云へば、皆此類で、現在に簡様な事がある。人間が内外の分際を立て、氣張り込んでも、火や水や空氣は、平氣なもので、内に入るも、内に入るとは思はぬ。外に出るも、外に出るとは云はぬ。内外の分際を追通して、其の在の儘の處が、火である、水である、空氣である。此處をよ

くく工夫すると、平等の中に、差別を立つるは、全く因縁の上から起ると云ふことが、はつきり知れる。一挺の蠟燭に、火をともし、其火を百本千本に分かちて、燈すときは、百本千本にもなる。されど、本の蠟燭の火を、半分づゝ分かつて、持ち往くのではない。各々の蠟燭が、各々の分に應じて、光を放つ。本の蠟燭より、大きな蠟燭に移すときは、廣大なる光も放つ。左様なれば、此等の火は、必ず別々なものかと云へば、左にあらず。若し別々なものなれば、一本より外のものに移すことは出来ぬ。是れを因縁と云ふ。因となるべき一本の蠟燭に、火があれば、縁を興へると、どこまでも分かれて、天地も照らし盡す。されど本の火は、己が因縁に應じて、以前の通りである。現在目の前に簡様な法がある、これに比して、此心の差別、平等の處を知るべきである。火の性から云へば、此火が因でもなければ、縁でもない。心の性から云へば、此心が因でもなければ、縁でもない。天地一枚である。其因縁のある所に、現はるのである。一切衆生の生死も、此の因縁の上から有る。此心の生死ではない。此因縁の事を、委しく論ずると、彼の業種子の事が知れる。

此心ありしより以來、此法がある。此法に迷ひ、此心に迷ひて、業種子を造る。手早く云へば、人を憎いと思ふと、直に憎いと業じた業が。此の心地に染み付て深く阿剌耶識の中に含まれてある。其始は至て些細なものなれど、善きにつき、悪きに付き、いつとなく増長して。再び向ふ相手の縁が出来ると、つい大事になる。萬事簡様な道理と知るがよい。此の業種子が、全く因てある。因があれば、いつか縁は出来るものである。欲いと思ふ事も、嫌いとあもふ事も、憎いと思ふ事も、可愛と思ふことも、種々薩陀に思ふ業が。悉く己れ知らぬ間に、心地に落ちて、阿剌耶識の中に含まれて、業種子となる。見た事、聞た事、邪見を起して考へた事までが、一切擧て、業種子となる。乃至慈悲、善根な事より、殺生、偷盜などは固より、總て此心に一たび業じた事は、どこまでも業種子となりて。此平等の心地に落ちて、因となる。譬へば草木の種の如く、花が咲き、實がのると。其實が地上に落ちて、其時いたれば、芽を生じ、枝を生じて。雲をも凌ぐほどの大木となるに同じ事である。今日現在に爲す事は、現在の業である。此業は、過去に作りし業種子が縁に觸て現れた姿である。花が咲き、實がのると、同じ事である。此實が此

の心地に落ちて、又も未來のための業種子となる。どこまでも、果てのなき事である。扱この業種子は、種々薩陀なるもので。時には善き業も動き、時には悪き業も動くなれど。つまり善業の強きものは、善道に生るゝ。悪業の強きものは、悪道に生るゝ。善道とは、善に向ひて、此心が運び動くこと。人の足を動かして、道を行くに同じく。一步一步より進む、一念一念より、善は善に進む。悪もなほ其通りである。簡様に業が定まると、世界が其業に相應して出来る。山河大地、禽獸も、別に變りは無けれど。樂むものゝ心から見ると、何となく麗しくも見ゆる。苦むものゝ心から見ると、何となく物悲しくも見ゆるやうなものである。此の心境の事は、前に委しく説てある。此處の業の話と、照らし合せて見るがよい。或者が、二人連れにて旅行せしが。何か言ひ上りに、揉み合ひ、揉み合ひ、大喧嘩を始めし處へ。一人の者が通りかゝり、其中に立入りて、漸く取分けて、其喧嘩の始末を聞けば。一人の者が云ふには、己が金を拾ふたのを、此者が是非半分よこせと云ふから、夫れは道理のなき事である。己れが拾ふた金だから、お主に三分一を分けて遣うと云ふと。左様な道理はない、二人で旅をして、同じ道を行き、

同じ道に金が落ちてあるのを。ち主が拾ふたとして、三分の二を取る筈はないと、理不盡を云ひ募るから。つい喧嘩を致したので、外に子細はござらぬと云ふ。其金は幾等あるのかと問へば、まだ拾ひはせぬと、若し拾ふたらと云ふ話でござると。筒様な影も形もなき事に、妄想して、果は其身を忘れて攫み合ふ。若し金が眞實に落ちてあらうならば、夫れこそ一大事じや。識に打任せて、妄想すると出逢ひがしらに、斯る事が出来る。況してや業種子を十分に造りて、此の心地に埋め置くからは。其の因縁が到来するといかなる事が出来ぬとも云はれぬ。芝居などで種々善惡の有様を造りて見せるが、一々分別して見ると、因縁のなき事はない。盡く自他の業種子より、善惡も出来る、苦樂も感ずる事である。現世現在には、此の業種子より、種々の人事の吉凶禍福、善惡、苦樂も、因縁して起る事は。少し考へのあるものは、誰も承知する事である。心學とか云ふ教には、殊更に此事を説くと云ふ事である。夫れも大概は、鼻先の事とばかりに見もし聞もするなれど。此事は、實に鼻先の事ではない。固より業と云ふものは、其の實體のあるものではない。業を亡ぼさば、無くなるもの。業を造れば、出来るもの。無

くさうと造らうと、勝手なものなれど。識に付て廻れば、どこまでも此業が出来。智に依れば、此業が段々減じて、終に滅するにも至る。されば此の業種子が、人間の死した後までも、存在してあるべき筈は無いやうなものなれど。萬物唯心造の上から見ると、此の肉身と云ふものは無く、獨り業のみがある。此業が、縁に相應してある間は、生涯である。此業が、此縁を離ると死ぬるである。假令縁を離れたとて、此業が滅すると云ふ道理は無い。業があり、縁があるので、縁があり、業が出来るのは無い。故に業を亡ぼして、仕廻はなければ、善業惡業の差別なく、必ず再び縁によりて、善惡の二道の中に、生を受くべき筈である。此心の自性、自體は、いつも變動のなきものなるにより。此の變動のなき心地に、業種子を深く埋めて置くと、此心の生滅の相につれて、又も現はれ来る道理である。此業の生じ現はるゝ處が、必ず己れが後身と云ふものである。此心平等である、此法も平等である、地水火風も平等である、人と人との分れは、只此業のみで。此業より外に、差別はない。善人悪人と云ふも、只此業で。業より外に、善人悪人はない。未來生れ来るも、己が前身を知らぬ時は、別人の如しといへども

全く別人ではない。此業の相續する間は、どこまでも、其物の生々死々である。夢中の己れも、現の己れも、別人では無い。夢として取除けて仕廻へば、別事のやうなれど。其夢の中にて、苦しい時は、眞に苦しいに間違はない。前生を忘れて仕廻へば、罪もなきやうなれど。悪き果報を受ける時節が到來すると、心持のよきものでもない。是故に、程よく識を治めて、業を除くべき事である。此業さへ除き盡せば、直に涅槃妙心となる、不生不滅の金色の身體である。其の生滅は、身體の模様である。是等の事は、前の話より、能く工夫して見ると、直に知れる事である。此業の轉變の上から、果報を示して、佛の經には、天上、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄の六道が分ちて説てある。此事も、眞實なる事である。要を取て、これを言へば、此の業種を断じ盡して仕廻へば、此身此儘で、輪廻はせぬ。此身此儘で、生死を打越えて、生れもせぬ、死にもせぬ。其死ぬるのは、他より死ぬるやうに見ゆるのである。其生るゝのは、他より生るゝやうに見ゆるのである。これに比しても、直に此の業種によりて、未來に輪廻して、六道の中に、後身を受けることを知るがよい。此身にも科はない、此心にも科はない。此身は地水火風で

ある死ぬれば、元の地水火風に、それ／＼還すまで、ある。此心も、一切衆生と平等である。天地一枚である。何も生死のあるべき筈はない、況して往たり來たり、六道に輪廻すべき物柄ではない。當處に生じて、當處に滅す。念々生じて、念々滅す。其中に因縁を逐ふて、果報を受けるものは、只此の業種である。此の業種が、一回結ばると、何くまでも果しはない。此の業種の外に、人もない、我もない、禽獸もない。此の業種によりて、縁を引て、種々、異類、異形な衆生が出来る。少し工夫して見ると、分明な事である。

この業種の畏るべき事を、目のこ勘定で云へば、現在斯うした事がある。昔源平兩家として、至て繁昌な家がありし。此の兩家の事は、種々な物語ものもあるにより、小供までが能く知て居ることである。其中源家に就て云へば、斯うである。満仲、頼光、頼義、義家など、代々打續て、英雄ばかりで。朝廷へも忠義を盡し、親へも孝行を盡し、家來家門までも、能く愛撫して、中々の人ばかりである。現に八幡太郎義家が、奥州の後三年の戦の時、弟の新羅三郎義光と云ふが、京都にありて、兄の軍の難儀なる事を聞て。その援にとて、終に官位をも棄て、奥州へ下りし事が

ある。是れにて、親子兄弟の情の深かりしを知れ。其後爲義の代になりて、子が八人ある。惣領を義朝と云ふ、末子が鎮西八郎爲朝である。時に王室に亂が起る、崇徳院と申す上皇と、其御世嗣の帝と、御父子の間に、種々の事が重なりて、終に軍となる。其時爲義は、上皇の御味方となり、義朝は帝の御味方となり、親子の間にて、互に弓箭を引くこととなる。此軍に、上皇御敗北なされ、遂に爲義も、其子義朝を頼みて降参せしゆゑ。帝に願ひて、已れが功を捨て、命乞をせしに。其時帝の御言葉に、清盛は伯父さへ殺せり、然るに義朝は親を殺すことが出来ぬか。不忠なものじやと、御立腹遊ばされしゆゑ。致方なく、家來の鎌田政家と云ふものと相談して。人の手に掛けて殺さすより、此方にて殺すがよからうとて、遂に爲義を殺す。實に此時の有様は、王室より、源平兩家に至るまで、随分、見苦しき事である。日本の歴史上になき、大變でありし。此等も、因縁のある事で、一朝一夕の故では無い。易經の坤の卦の文言に、善を積むの家には、必ず餘慶あり。不善を積むの家には、必ず餘殃あり。臣として其君を弑し、子として其父を弑す、一朝一夕の故にあらず、其由來する所の者漸なりと。箇様な大變の到來することは、必ず

其因縁があるべき等である。それは兎もあれ、源家の上て言へば、是までは、左程見苦しき事もなきやうに見えてあるが。此變に、義朝が親を殺せしより以來は、種々な怪事ばかりである。義朝の子の悪源太義平と云ふは、伯父を殺したゆゑ、悪源太と仇名を付けらるゝ。其後、義朝が、清盛と戦ひて敗北し、京都を落ち延び、關東に下るとて、尾州知多郡の長田と云ふ處に、家來鎌田政家が妻の家あるを尋ね往き、暫く滞留する中。政家の舅の長田の莊司忠致が、其子と謀りて、義朝主従を殺す。斯て義朝の子頼朝が、伊豆より起りて、親の仇とて、平家を討亡ぼす。其時に尤も力を盡せしは、弟の範頼、義經であるが。此兩人を、兄の頼朝が、故もなきに憎みて、兩人ともに殺す。其頼朝の子が二人あり、頼家、實朝と云ふ。兄の頼家が、鎌倉の二代將軍となる。此の頼家も、其母の尼御前の身元の北條を憎みて、之れを亡ぼさんとして事ならず。遂に己れ伊豆へ追遣れ、牢に入れられて、恨みに堪へかね、狂氣になりて死す。其弟の實朝が、三代將軍となる。或時鎌倉の八幡宮に、參詣する折に、公曉と云ふ小坊主が飛出して、刀を振ふて、實朝の首を打落す。此の小坊主は、頼家の子なりしを、尼御前が寺に遣りて、坊主にせしものであ

る。親の仇とて、現在叔父に當る實朝を殺し、已れども、北條の爲に殺さるゝ。是れにて、源家の正統が断える。此の因縁を、能々考へて見よ、一家一門が、互に仇となり敵となりて、殺し盡すじや。随分業種と云ふものは、畏きものである。因縁のある所に、何くまでも付き廻る。是れは一家門に、業種が相續した有様である。家門にさへ相續するからは、自己に作りし業は、固より生々死々に付き廻る道理である。此外箇様の例證を舉れば、和漢古今に、其數は知れぬ。凡人は、左程に思はぬ事でも、明眼の者から見ると、一々因縁のある事で、業種が相續して、善惡の果が分明である。歴史などに見えるのは、多くは王侯貴人などの事のみであるが、それさへ箇様な事である。況して平常凡人の、一身一家一族の上より云へば、其事は限なかるべし。此等の事を、憶念すると、此の業種の畏るべき事が、知れる。一朝の迷から、前後を顧みず、物事を輕慢に取り行ふは、實に畏きこととて、凡夫が輕慢にする處に、一家一族一國を亡ぼす業種を結ぶてある。義朝が親と戰ふ時は、武門の習ひ、親子兄弟も敵となる、致方は無いと思ふたに、相違無い。其親を殺す時は、帝の御意じや。臣として致方がないと思ふたに、相違ない。此輕慢の心

より、遂に一家一族の大難を引起す。世の中の習ひである、致方がないなど、云ふて、理非を辨せずして、取行ふ事は、謂はゆる漸なりて、畏るべき事である。少し智分のあるものは、考へて見るがよい。

此の心境内外の相を、底を拂ふて見徹すときは、唯是れ一心である。唯是れ一法である。能所相對して、暫く種々の模様があれば、固より一法の取るべき相はない。時々遷流し、念々に轉變して、鏡中の影の如く、水上の波の如し。これを名づけて、一心法界と云ふ。心と云ふも、法といふも、悉く假名なれど、此の假名を立て、此一大事を開悟するの方便となす。扱この一心法界の上より觀ると、智と識との分際もなく、一切の法、ことごとく在の儘である。此の在の儘の處に、一々智慧が成就してある。明らかなる處は、明らかなる智慧が成就してある。暗き處は、暗き智慧が成就してある。生ずる處に、生ずる智慧が成就してある。滅する處に、滅する智慧が成就してある。自身のある處に、自身の智慧が成就してある。他身のある處に、他身の智慧が成就してある。天地山河大千世界の智慧が成就してある。分別是非して、知るのではない。

臆測、妄想して、知るのては無い。其物のある處、其法の生ずる處、其儘智慧である、如實に知るである。眼を擧れば、眼に智慧が成就してある、色と識とを、一度に見透す。耳を欲れば、耳に智慧が成就してある、聲と識とを、一度に見透す。自身を起せば、自身に智慧が成就してある、自身、他身を、一度に見透す。乃至、盡十方法界の一々の相を、一々に見透して、異念なきじや。天地を翻し來りて、一念の中に置き。一念を翻して、天地の外を包む。鬼神も形を隠す處なく、衆魔も窺ふ便を得ず。何によりて斯くの如きぞと云へば。早く汝の腮にありて、狗を逐ひ馬を躍らして、傍若無人じや。此心に相なく、此智に分なし。迷へば識となり、悟れば智となる。且らく方便に、種々薩陀の名相を立て、口業を作るも。一念の悲心、他の奴隸となり來て、塵を拂ひ垢を滌ふて、却て罪科を得るものである。然も是の如しとは云へど、口があるから食はねばならぬ。目があるから、見ねばならぬ。耳があるから、聞かねばならぬ。身體があるから、養生もせねばならぬ。自身も其通り、他身もその通り、人間一般に、其通りとすれば。随分、難儀な事もあるべし。これを取り纏めて言へば、つまり欲の世界である。ほしいほ、しいより

外に、子細はない。此のほしいほしいに、疋をかけたが、愛である。己れを可愛がるである。種々高慢な事も、言へば言はるゝなれど。つまりと云へば、茲に落着する。見よ、無事な時には、天下の爲とか、國家のためとか、言ふものも、澤山なれど。少し自身の上に、病氣でも出來ると。先は天下も國家も、取除けじや。七轉八倒して、狂ひ出す、これを凡夫と云ふ。此の凡夫の心實が、正直な所である。此の正直な處を、忘れさへせねば、おのづと邪見な事もない。人を呪咀へば、穴二つじや。此の人間世界に、我が身を芥の如く思ひて、傍若無人の振舞をなすものほど、畏しきものは無い。一番大切な我が身を、芥の如く思ふほどなるによりて、其以上は、推して知らるゝ。看よ、船に乗るに、命知らずの船頭に打任せては、心元なきことである。みづから其身を大切に思ふものは、おのづと人をも大切に思ふ、物をも大事に思ふ。管に人と物とを、大切に思ふばかりでは無く、明日の事をも、大切に思ふ。明年の事をも、大切に思ふ。遂に身後の事までも、大切におもふ。一家、一村、一國の事までも、大切に思ふ。みづから大切に思ふ心に相應して、一切の事が、大切に、見ゆる。恐痴なものほど、みづから大切な事を知らぬ。四半分ばかり身

命を捨て、他人を押し倒し物事を手荒らく取行ひ。少し才氣のあるものは、英雄豪傑を氣取り。下品な處では、喧嘩争論を好み。甚しきは、押込み強盗なども企つる。其の由來を尋ねると、悉くみづから輕んじ、自ら愛せぬより起る事である。凡夫持前の心實を失ひて、不正直な心底である。此等のものが、世に生れ出るほど、人間の福分が薄くなり、難儀の上に、難儀が重なる。一番大切な身體を捨て、一寸とした識の轉變から生ずる金銀財寶乃至一朝の快樂を貪るから、簡様な事になる。百貫の方に、編笠一つを擔いで。途轍もなき方角へ迷ひ込み、果は地獄の洋となる。看よ佛も、其初めは、生老病死を悲みて、遂に家をも身をも捨て。涅槃常樂の地を求め、成佛致されたのである。みづから愛し、自ら重んずるの心が無ければ、生老病死も、左程に悲むべき事ではない。事を好んで、病も作り、死にもするものが、何しに生老病死が悲まるゝものぞ。涅槃常樂の地も、一旦の快樂を貪りて、後の世の事を顧みねば、無用の長物である。これによりて知れ、此の凡夫持前の心底が、直に大智慧を起す因縁である。人間にありては、人間の徳である。善と云ふ事も、惡といふ事も、此の人間が、各々みづから愛する所より起る。文王

民を視ること傷の如しである。

此凡夫の心底を、其儘引くり返さへすれば、直に悟りとなる。引くり返すとて、嫌なものを、すき好むては無い。善き事を、惡きと思ひなすのでもない。此等を其儘にして、引くり返すのである。譬へば、毒を藥とするやうなもので、毒の性を其儘にして、藥とするである。古の聖人、これを知るゆゑに、仁義を以て、名教を立て。禮樂を以て、威儀を制す。其本を推し、其源を尋ねると、悉く凡夫持前の事である。見たい聞たい、飲たい食たいである。男女の欲より、生を喜び、死を惡むの情にいたるまで。これを其儘にして、人間の徳を全ふする法である。此の欲ありて、此の苦あり、此の苦ありて、此の道德が起る。沃土の民は、惰る、先王是を以て、民を瘠地に誘ふ。是故に、苦は樂の因である、徳の原である。苦を轉じて、樂とするは、能く思ひて勤むるからである。禍福吉凶、此處にある。徒らに、高遠の事ばかりを妄想して、饒舌ばかりが、賢いものとは云はれぬ。畢竟、眞實のある處が、どこまでも、人間の歸すべき場所である。其の眞實を、眞實として、虛妄虚喝な事を、取除いて。有の儘の道理の在る處に、隨順すべきである。其の道理の在る處

が、どこまでも人間の福分の在る所である。苦を脱するの法である。人と生れし欲があれば、其の欲を廣大にして、徳を成就すべきである。誰しも心の癖はあるものなれど、これは此心の病氣と云ふものである。此身に病氣があれば、一所懸命に保養をする。此心に病氣がありても、取り構はぬは、不覺千萬である。看よ、此の身體の病苦の爲に、狂氣したり、自殺したりするものは、大概は無い。此心の病苦が募ると、發狂もする、自殺もする。人をも殺すやうな事が出来る。箇様に、此心の病苦は、一入苦しいものに相違ないが、これを保養して、療治するものは、稀な事である。眞實に能く思ひて、これに心が付けば、畢竟此心の癖から生ずることなれば、直に取除きが出来ものである。夫れも段々大病になると、致方がない。此の人間の持前の心實を盡して見ると、横道な事はならぬ、横着な事は言はれぬ。此心は、明鏡の如きもので、悪き事は、悪きと知る、知らぬ事は、知らぬと知る。假令、聖人、賢人を誑かすことは出来ても、此心を誑かす事はならぬ。一分一厘でも、胡亂の無いものである。それも變な處に、迷ひ込むと、平常の心を失ふにより。随分とも心底から、不都合な事を仕出すこともある。是れは例の大病

の成り果て、通途、凡夫の持前とは云はれぬ。

此心あれば、必ず此身がある。身と心とは、常に恒に和合して、暫くも離れぬものである。影の形に添ふが如く、響の聲に應ずるが如く、無始曠劫より、盡末來際まで、相違はせぬ。一生一死は無きにあらず、されど此心の生々の處に、必ず此身がある。此身あれば、必ず此の眼耳鼻舌がある。此の眼耳鼻舌あれば、必ず此の色聲香味がある。此心に、この色聲香味を受納して、妄想を起す。種々に分別して、違順の二境を感ずるである。此の違順の二境が、どこまでも一切衆生の境界である。違順とは、此の心に背き違ふを、違境と云ふ。此の心に従ひ順ずるを、順境と云ふ。此の順境に對しては、貪欲の心が起る。此の違境に對しては、瞋恚の心が起る。此の貪欲、此の瞋恚に苦しめられて、愚痴の心が起る。これを意業と云ふ。意業とは、意で作る業といふ事である。此の意業が動いて、言葉に現るゝを、口業と云ふ。身に現るゝを、身業と云ふ。口業とは、口で作る業といふ事である。妄語、綺語、兩舌、惡口など云ふ差別がある。身業とは、身で作る業といふ事である。殺生、偷盜、邪淫など云ふ差別がある。此の身口意の三業が、種々惡業の因となり

て業種子を作ると云ふことである。さるによりて佛が十善戒を制して、世間、出世間の道を立てらるゝ。此の十善戒は、性戒と云て、此心の徳として、本來成就してあるによりて。これを破すると、自心で、自心の性功徳を喪ふて。地獄にも墮ると云ふことである。左程六つかしき戒法ではなけれど、其の事柄は、至て大切な事である。これを破るは、自身に傷を求めて苦しむと、同じことである。不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不綺語戒、不惡口戒、不兩舌戒、不貪欲戒、不瞋恚戒、不邪見戒、これを十善戒と云ふ。箇様に身口意の三業を差別して、これに一々不の字を加へて、十善戒法とす。此の戒法が、其儘人間の世界と云ふことである。譬へて言へば、物に底を入れて、酒なり水なりを、盛るやうなものである。此底が破るゝと、餓鬼、畜生、地獄にも、其儘墮落すると云ふことである。此の十善戒の事は、十善法語など云ふ書物がある、これに就て見るがよい。至て面白き法である。此心あれば、此身あるものと決定して、疑ふ心の無きが、大智慧である。此身あれば、一切の法を感覺受納して、違順の二境が起る。違順の二境が起ると、身口意の三業が起る。身口意の三業が起ると、十善戒法がある。此の戒法は、此心の性

功徳なりと決定して、疑ふ心の無きが、大智慧である。箇様に決して見よ、幽霊、怪物、鬼神、上帝、天狗などは居らぬ。假令一切衆生が此土を死し去るも、必ず彼の土に生を受けて。此心と此身とは、影の形に生ずるが如く、隨處に従ふものである。身も口も無き心ばかりが、幽冥にぶらぶらして居るものではない。看よ虫蟪てさへ、心があれば、其の形がある。若し幽霊、怪物、鬼神、上帝、天狗などは、心ばかりで、此身を現はす事が出来ぬとなれば、最下等の片輪ものである。虫蟪ほどの働も出来ぬ、冥頑不靈である。箇様なものが、何しに、身心具足した人間を、なやます事が出来るものぞ。此の道理を考へても、直に知れたことである。若し幽霊、怪物、鬼神、上帝、天狗なども、此心あれば、此身あるものとすれば、一種の衆生である。一種の動物である、彼等も必ず、眼耳鼻舌身意の六識がある、色聲香味觸法の六塵がある。識と塵とが相對して、始めて内外の分際が立つ。これが心境と云ふ二法である、即ち物と我とである。此心に此物を愛するが、順境である。此心に此物を憎むが、違境である。此の違順の二境があれば、意業が動く、口業を作る、身業を作る。さすれば假令、鬼神、上帝、天狗、幽霊、怪物なども、彼の十善戒を護らねばな

らぬ。若し破戒すれば、性功徳を喪ひて、地獄にも墮つべきことである。若し此心もなく、此身もなく、此口もなきものと云へば、以上無きものである。されど幽霊怪物、鬼神、上帝、天狗など云ふ名がある。名があれば、何かあるべき筈である。妄想するものゝ爲に云へば、それは有るに相違はない。彼れは彼れの心がある。彼れの身がある。彼れの口がある。されど此の人間の目には見えぬ、耳には聞えぬ。彼れは彼れの身口意で、善惡の業を作り、自業自得の果報を引て、生々世々、輪廻するである。假令、人間の仲間に混雜して、威福を求むるも、人間の果報を受けて、人間に生れ來たるまでは、それはならぬ事である。此の道理を能々憶念して見ると、斯うである。幽霊は、九こかし愚痴なものである。貪欲なものである。人を恨み、世を怨みて死するものが、幽霊と云ふ衆生である。其の口業を作るを見よ、いつても、うらめしやの繰言である。不貪欲戒も、不瞋恚戒も、不邪見戒をも、破りしものである。箇様な愚痴深きものは、幽霊ばかりでも無い、目のあたり、隨分澤山ある。殊更不思議とするに足らぬ。怪物は、其の本體本性を顯はさぬもの

である。能く種々に形を變化して、人を誑かす。是れも愚痴なものである。人を誑かす積りて、己の本體本性を失ひ。己を欺き、人を欺きて、途轍もなき事に、苦勞するものである。妄語、綺語、兩舌、惡口である。此外に藝は無い、此の怪物も、目のあたり澤山なものである。殊更不思議とするに足らぬ。鬼神、上帝なども、種々な意業、口業を造る、多くは破戒の姿である。天狗と云ふ衆生は、殊更に瞋恚の強き衆生である。鬼神、上帝の類が、日本にては、大概天狗である。しかし是は、今日本人の妄想する處より、成敗するところである。其實多くは、出家の墮落せしものが、天狗になると云ふことである。半僧坊、三尺坊、僧正坊など云ふ名前も、悉く坊主の名である。されど支那、天竺の坊主は、墮落しても、天狗にはならぬものと見える。彼方の書物には、天狗と云ふ衆生がある事は見えぬ。これは日本に限る事である。されど今時は、天狗にもなりかぬと見えて、墮落せしものも、大概天狗の眷屬である。昔の天狗を擔ぎ廻りて、口すぎをする。名づけて護法神と云ふ、奇怪千萬の事である。日蓮宗には、題目がある。淨土宗には、彌陀がある。天台眞言には、觀音や、不動や、大師がある。禪宗は、無一物で、何も無い。そこで近來

天狗の古手を擔ぎ出して、口すぎの助とするは、大概禪宗である。箇様な破戒無慚なものを祭りて護法神など、云ふ沙汰の限りである。總じて十善戒の一部を破りても、悪は悪である。悪を作るものは、神にもあれ、人にもあれ、其徳の全からぬは、固よりの事である。貪欲を起して、物を貪り、瞋恚を起して、人を惡み。甚しきは罰を與へて、己が威福をなすは、暴惡と云ふものである。此の人間の中ても、少し心得のあるものは、せぬ事である。神なればとて、許すべからず。箇様な惡を作す神は、惡神である。人間なみくものより、卑劣の神である。下等の神である。箇様なものには、近付かぬがよい、取合ぬがよい。近付たとて、利益は無い。遠ざけたとて、彼より申分もない。なま中につき、立をすると惡い。先斯う考へても、成敗の出来る事である。

耶蘇教の神は、斯う云ふて居る。我の外、別に神あるべからず、我は妬の神である。若し他の神を祭り崇むときは、大に嗔りて、罰を與へ。汝の子孫、三四世にまで、及ぼすと斯うである。随分不都合な申分である。他の神のあるを承知して、我の外に別の神あるべからずと云ふは、大妄語と云ふものである。若し他の神を祭

り崇むときは、罰を與へると云ふは、不愼、悲戒を破りしのみならず。人の三四世まで、害を及ぼすの罪惡は、此神がみづから受けて、地獄にも墮つべきことである。我は妬の神なりと怒鳴りて、愚痴を云ふは、恐ろしき山の神である。下等卑賤の者の女房でも、少し志のよきものは、言はぬ事である。箇様なものゝ相手には、成らぬがよい。耶蘇の言ふた事にも、斯うしたことがある。我の來るは、太平をなす爲ではない。我の來るは、戎を起すが爲である。我の來るは、人をして其父を疎ましめ、女をして、其母を疎ましめ、婦をして、其姑を疎ましめ。而して、人の敵となるものは、我の家來である。故に父母を愛すること、我に過るものは、我によりしからず。子女を愛すること、我に過るものは、我によりしからず。其の十字架を任て、我に従はざるものも、また我によりしからず。其命を全せんとするものは、却て命を失ふ。我が爲に其生命を捨るものは、反てこれを得ると、斯うである。是れは彼れの教法を弘むる爲に、言ふことであれど、随分毒のある申分である。彼れが奉ずる神が、みづから稱して、妬の神と名乗るくらゐなれば。終には、箇様な大邪見な事を云ふに至る。さるにより、此耶蘇教が其むかし西洋諸國に、攪入

流布するときは。大概は一たび軍が起りて、國なれば爲に滅亡し。血て血を洗ふて、今日に至り。人々教法より生ずる害を恐れて、あまり取構はぬやうになつた事である。回々教なども、概ね此途轍である。宗教の信徒を以て、兵隊を組立てる仕構である。此事は今日の日本人は、承知して置くがよい。夢中になりて、アメン、アメン言ひて祈り立ると、都表もなき事を祈り出すのである。一寸とした迷から、永く我國人の災害の種子を播き置くとは、扱も不仁な事である。少々文字もあり、世の中に學者とか言はるゝものにも、此類がある。我國にも、近頃は段々威が衰へてあれど、八百萬神とて、随分神々も澤山ある。彼れエホバが來て、此神々を、一々打潰す迄には、随分混雜も生ずべき事である。佛法も微力ながらある。神佛が加護して、此國を守りてある中は、耶蘇の申分通りに、軍事も起るべきとである。神佛は、勢を見て降参はせぬ流義である。討死するまでは、其國を護る意地がある。此事は、通途のものは侮て居れど。其時節が到來すると、神威佛徳といふものが現はるゝものである。何千年と云ふ間、人々の頭腦に染み込し事なれば。一朝一夕の談にあらず、慎み畏るべき事である。

神と云ふも、つまり一種の法である。此法が立つと、意識で分別する故に。善神も立つれば立つ、惡神も立つれば立つ。一神を立て、多神を取除けば。是も人間の分別通りに、勝手になるものである。多神を立て、一神を打倒すも、其通りである。天地山河乃至家屋器物さへも、人間の妄想より、生起するほどの事なれば。況て目にも見えぬ事を、妄想すれば、果しの無き事である。されば従前より在來りのものは、左程人間に害さへなければ、強ちに打潰す事も入らぬ。況て正直の神を立てれば、自然と人間の心念も正直になる。正法を念ずれば、其念が、其儘、正念である、心と法と、一致である。昔の言に、神は正直の首にやどると云ふてある。此等は面白き言分である。昔の人は、深く此の道理を知りて、立てもせぬ、潰しもせぬ。善神は善神として、これを崇敬する。惡神は惡神として、これを遠くる。何も神と云ふ言葉に、付て廻りはせぬ。善惡の上を分別して、これを成敗する。此等は古實の有ることである。今時の者は、神と云へば、善惡の差別もなく、一概に畏るゝものもあり。一概に打潰すものもありて、共に邪見に墜るてある。紀の貫之の土佐日記にも、梶取の心は、即ち神の御心なりとある。これは何も知

らぬ梶取の言ふに任せて、住吉の神に幣物を奉り。而して船の危難を免れしに
よりて。扱も梶取の心が、直に神の御念であると悟られた言葉である。奥ゆか
しき心底である。誰も知る歌に、心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとも神や守
らんと、此等も面白きことである。元來神は、人間を守護するが職分である、外に
尊き謂れは無い。手早く云へば、巡查が夜晝、非常を警しめ、人の安寧を守護する
やうなものである。此の世の中に、破戒無愆の悪神があり、喜怒哀を恣まゝにし
て、人を害する。そこで善神が、晝夜目を見張りて、此の悪神を退治して、常に恒に、
國家人民を守護せらるゝ。それも縁もゆかりも無き他國の神が、箇様な面倒を
見るものには無い。必ず其國に縁起した神に限る事である。親兄弟朋友にし
て、必ず我が幸福を祈る、見もせぬ知りもせぬ人は、此事は無い。されば安心して、
正直に職業を營み、人事を盡しさへすれば。別に祈らずとも、神の守りは有る
べき事である。祈れば、悪人でも守る、祈らざれば、善人でも守らぬと云ふは、邪神
である。左様な不都合の神は、片隅の方へ押し除けて置くべき事である。是も
伊弉册神のやうな、國の大切の神なれば、これを祭り、機嫌を取りて置くべきであ

る。家のうちの、愚痴深き老母の如きである。程よく取扱ひて、苦勞させぬがよ
い。神代の巻の中にも、種々な邪見の神もある。此の人間の有様と、別に易らぬ
面白き事である。此の世界は、妄想の世界である。此の妄想の中に、天上、人間も
建立してある。生死禍福も、つまり妄想なれば、正邪、是非の沙汰も、入らぬやうな
ものなれど。此の妄想の外に、一法の取るべきものも無きによりて。此の妄想
が、實際である。故にこれを差排して、正さねばならぬ。夢に苦痛を感ずる時は、
夢中ながらに、一所懸命である。況て現在に此事がある。それを打捨て置くべ
きにあらず。猶此事を論ずれば、千萬無量の事なれば。一心法界の道理を、能々
思惟して、人々悟るべき事である。一切の物事に推し通じて、面白き事限りなし
穴賢。

眞正 無神論 三大尾

無神論跋

此の書は、我が師の君の、西洋の旅の疲れをやしなはんとて、熟

海の温泉に物したまひし時。おのれ清丸に。口づから授けたまへる御誨言を承はるまにく。寫し出たるものなり。固より鈍き筆なれば。活きたる言辭の。いきほひ寫しそこなへるは更なり。二週間ばかりの旅のすさびに。物したまひしわざなれば。説き洩らされしふしも。また多かりなん。されど。かゝる高尚なる。所謂不思議分際の事ども。女わらはべにも。解りやすく。説き諭したまへるは。是なん師の大慈大悲にはありける。おのれもわかきほどより。御國漢國の人どもの著したる鬼神の典籍を讀みて。聊か思ひよれるふしの無きにしもあらざれば。早くより暇あらん時には。思ふむねを。書きあらはさばや。と思ひたりしを。今この御書を授かりては。豫ての望も満ち足らひて。嬉しきこと言はむかたなし。されば一日もはやく。此の大慈大悲を。

賤の男賤の女までに被ふらしめて。所謂無始の無明とかいへる心の闇を打破りて。眞如の月の。さやけく明らけく。世をわたらせまほしく思ふあまりに。やがて印刷には付せり。漢土の蒼頡が初めて文字を製りし時に。鬼神の哭き悲しみけりとなん。聞傳へたりしを。今この書の世に出なば。上帝鬼神天狗幽靈怪物等の。己が世界を打碎かれて。愁ひさまよひ歎き號ばんさまを。文明の今日に見んことを。かしさよ。樂しさよなど。つぶやきつゝある折しも。印刷の事卒へたりと。告げおこせたりければ。嬉しさのあまり。一言書きつけぬ。

明治二十年八月上澣

門人 川合清丸誌

無神論終

東洋哲學意見

余は歐洲巡廻中學問上の事に付き聊か悟る所ありて、東洋哲學の方向を一定するの必要を感じり。その故は、今日歐洲の學者が稱する所の「オリエンタル、ヒロソヒー」と云ふは、東洋哲學とも翻譯すべきものにて、亞細亞洲中、印度支那、日本等に、古來より傳來する學問を總稱して云ふ事なり。此の「オリエンタル、ヒロソヒー」を、各國の學者社會にて種々の方法を以て研究せり。其の目的は、何の爲なるかを知らねども。學問上の常理にて判断せば、博く學んで、審かに之を思ひ、道理の本源を探つて、學問の進歩を圖る爲なるべし。是れ歐洲の學術上、普通の仕組みにて。此の地球上の善美を集めて、文物を大成せんとするの趣向なり。歐洲の學者と、たま／＼東洋哲學の問題を説話する時。或は佛經を引き、或は孔孟諸子百家を引き、反覆爭論するも。彼方の學者は、此の諸學を擧げて、東洋哲學の範圍に置て、更に怪む事無し。其故に、我々の智識は、此等一般の學術上より成り立ちしのみならず。諸家の學問を擧げて、智識を發達するの筈跡とするは。

固より學問の本領とすればなり。譬へば希臘羅馬の古代に、種々の學者が出て、種々の議論を著はしたるも。其の一家の説を執つて、今日西洋の學問の大體を、是非すべからざるが如し。余は此の有様を、熟考合して思へらく。今日東洋の學問の方向にては、到底西洋の學問の規模に及び難しと。何となれば、彼方の學問は、希臘羅馬より當代まで、種々の異説異論あるを。之を取り集めて大成するには、後進の學者の本分なりとするのみならず。是にて猶足らずとして、終に「オリエンタル、ヒロソヒー」と云ふまでも取り出して、普く東洋の學問を研究し、併せて、完全の哲學を組織して、世界の文化を誘導せんとす。其の規模の廣大なる、稱賛するに堪へたり。

然るに今日、我が國などの學問の有様を顧みれば。大概屋下に屋を架し、儒は漫りに佛老を排して、みづから高しとするのみならず。儒中に在りても、朱と云ひ、陸と云ひ、王と云ひ。各々門戸を立て、相通せず。佛家も種々の宗旨宗義を限りて。佛教の大體さへ、學ぶ事を爲さざるが故に。學問の道は、四分五裂、また收むべからず。之を彼れに比するに、電機の消極と、積極との如く。反對の方に向

つて相走るものと云ふべし。平易の心を以て、兩洋の學問を判斷する時は。其のいづれが得、いづれが失。必ずしも智者を待ちて後ち知らざるなり。故に余は以爲らく、我が東洋の學問をして、此の儘に打ち捨て置く時は。今日西洋流の學問を、西洋に學ぶのみならず。終には東洋の學問も、西洋の學者に就いて學ばざれば、其の全體を得ること能はざるに至るべし。實に氣の毒千萬なる次第なり。

總じて學問は、人の智識を増進せしむるの具なり。種々の異說異論より、後來の學問を開き。後世の智識を進むる者なり。元來人々の智慧は、人々の具足せし者なれば。其の發達は、必ず異說異論の中に就て、彼此を比較し、是非を判斷し。各々みづから、其の歸向を定むるを肝要とす。故に一世の學問に、後世を籠絡するは。却て人の智識を、退減せしむるの大害あり。固より西洋の學者とて、みづから立つる一見識は有りて、彼此主張する事なれども。是は全分の力を盡くして、道理の歸着する所を、工夫判斷せし立論なれば。古人の門戸に彷徨して、聖賢の遺教を守ると稱し。他は馬耳東風、是非不關と云ふ有様とは、雲泥の相違なり。

り。さるに依り、學者各々城廓を構へ、辯難攻撃常に絶ゆること無く。終に不全の立論は、學者社會に勢力を失ひ。其の人其の論、共に泯滅するに至る。

斯かる有様なれば、天地間の道理を判斷するには。最も論理と證據とを、重んずる事にて。論理も無く、證據も無く。各々自得自信の妄想を秘藏して。徒らに高遠の風情を氣取るやうなる、卑屈の事は、曾て無き事なり。況て古人の議論をも、種々に是非差排する事なれば。後生に對して、道理不道理を問はず、我が説を信ずべし。と云ふやうな口氣は、有るまじき事と思はる。固よりみづから信じて、眞實の道理と思へばこそ。之を書にも筆し、人にも説く事なれども。大體學問の方向目的を異にする故。今日亞細亞東方の學風とは、其の趣きを同らせざること分明なり。

元來學問は、人々學問上の判斷力を、貴重する者なり。裁判官の理不、理是、不是を判決するが如く。不黨不偏にして、其の正邪を撰ぶべし。一概に師家の學問を傳ふるを専として。他家他流に、之よりも打ち越えたる道理のあるをも、顧みざるは愚と云ふべし。歐洲各國にては、學者は勿論、常人とて、論理に關せずし